

名古屋市立大学人文社会学部  
現代社会学科社会調査実習報告書  
2021年度 第2分冊

# 名市大生のジェンダー意識

——ジェンダー観・家族観・人生設計・社会課題について——

〔 2021年度・現代社会学科社会調査実習報告書 〕

第2分冊

名古屋市立大学人文社会学部  
現代社会学科

## 目次

はじめに	(p. 2)
<b>第1章 調査の概要</b>	
第1節 社会背景	(p. 3)
第2節 調査目的	(p. 4)
第3節 質問内容	(p. 4)
第4節 調査経過	(p. 5)
第5節 先行研究	(p. 5)
<b>第2章 調査結果</b>	
第1節 調査方法	(p. 10)
第2節 結果と分析	
第1項 名市大生のジェンダー観	(p. 11)
第2項 名市大生のライフプラン	(p. 23)
第3項 名市大生の家族観.	(p. 50)
第4項 社会課題に対する考え	(p. 55)
<b>第3章 研究のまとめ</b>	
第1節 まとめ	(p. 82)
第2節 今後に向けて	(p. 83)
<b>第4章 研究資料</b>	(p. 85)
<b>第5章 編集後記</b>	(p. 93)

## はじめに

近年、様々な場面でジェンダーに関する話題が取り上げられていることは、多くの人が実感していることだと思う。特に若い世代や女性の間でのフェミニズムの盛り上がりや、同性パートナーシップ制度の普及、多くの政党が掲げる LGBTQ と呼ばれる人々への政策などを受けたセクシュアルマイノリティに対する注目度も高くなり、徐々にではあるが、日本社会のジェンダー観も様相を変えつつある。

しかしながら、現在の日本社会を見れば、変化していく人々のジェンダー意識に社会体制や各種制度、その他多くの動きが追いついていないのは明らかである。一向に増加しない女性管理職や女性議員、取得率がまだまだ低い男性の育児休暇、減らない女性の家事育児負担、認められない同性婚などあらゆる面で日本はジェンダーに関する課題を多く抱えている。

このような状況の中、就職活動を控え、これまで以上に真剣に将来を考え始める時期にある私たちは、世の中にいまだ蔓延る固定化された性別のイメージに、実際どれほどの影響を受けているのかを把握し、ジェンダーの再生産という負の連鎖を断ち切って、「性別」という制限から解放された将来の選択をするための手がかりを見つけたいと考えた。そして、誰もが自由にライフプランを創造することができる、多様な日本社会にしていくための課題を見つけ、今後を担う存在である私たちが今できることは何なのかを探っていこうと思う。

なお、この度のアンケート調査に精力的にご協力くださった名古屋市立大学の学生、並びにアンケートの実施にご尽力いただいた教員各位には、この場をお借りし、深謝の意を表させていただきます。

# 第1章 調査の概要

## 第1節 社会背景

2021年3月に世界経済フォーラムが発表した「The Global Gender Gap Report 2021（ジェンダー・ギャップ指数2021）」では、日本は156カ国中120位であった。これは前年と比較しても横ばいで、ジェンダーギャップについて改善が見られないことを意味している。先進国の中でも最低レベル、アジア諸国内においても、韓国や中国、ASEAN諸国よりも低い順位となった。

特にジェンダーギャップが大きい点として挙げられるのが、「経済」と「政治」の分野である。「政治」分野については、国会議員の女性割合が10%にも満たず、女性大臣の割合も10%程度、さらにこれまで女性の総理大臣が生まれていないこともあり、「政治」におけるジェンダー格差が目に見えてわかる。実際に2021年10月に発足した岸田内閣においても、女性の大臣はわずか3名であった。

「経済」分野では、管理職の女性の割合がおよそ15%未満であること、女性の72%が労働力となっている一方で、パートタイム労働の女性の割合が男性の2倍近くにのぼり、平均所得は男性より44%も低くなっていることが指摘された。

このような男女格差が存在する中で、近年では女性や若い世代を中心としてフェミニズムの盛り上がりが見られる。なかでも、黒人の女性たちの発信によって広まった、セクシュアル・ハラスメントや性的暴力の被害を訴える運動である「#MeToo運動」や、日本で行われている、女性が職場でヒール靴を強制されることなどの職場での苦痛に対する抗議の運動である「#KuToo運動」がSNSを通して起こっている。

この「#KuToo運動」は、2019年1月、俳優の石川優実さんが「いつか女性が仕事でヒールやパンプスをはかなきゃいけないという風習をなくしたい」などとツイートしたことが発端である。その声に押されるように2月、インターネット上で署名活動が開始され、6月3日に厚生労働省に約1万8800人分の署名を届け、ハイヒールの強制を禁止するよう通達を出してほしいと訴えたことが、2019年6月6日の朝日新聞において取り上げられた<sup>1</sup>。

また、近年話題に上がるのが、同性婚や性的マイノリティへの差別の問題である。2021年10月31日に行われた第49回衆議院議員総選挙に際して、「同性婚の法制化」「性的指向や自認に基づく差別を禁止する法律の制定」について、各政党の回答を見ると、「同性婚の法制化」については自民党と公明党以外は賛成を示しているが、自民党は「現行憲法では、同性カップルの婚姻を認めることは想定されていない」として、法制化には消極的である。「性的指向や性自認に基づく差別を禁止する法律の制定」については、自民党以外が賛成を示した。自民党も「広く正しい理解の増進を目的とした議員立法の速やかな制定を実現する」としている<sup>2</sup>。しかし、法案の了承を巡っては党内での反発

<sup>1</sup> 朝日新聞、「ハイヒール強制やめて『#KuToo運動』世界が共感」（2019/6/6）

<https://www.asahi.com/articles/ASM663D3LM66UHBI00G.html>

<sup>2</sup> ハフポスト日本版、「NO YOUTH NO JAPAN」衆院選、各党のLGBTQ政策は？同性婚や差別禁止法、性同一性障害特例法の改正について比較【政党アンケート結果（3）】（2021/10/28）

[https://www.huffingtonpost.jp/entry/story\\_jp\\_6178914ee4b03072d6fd23d0](https://www.huffingtonpost.jp/entry/story_jp_6178914ee4b03072d6fd23d0)

も見られる。日本はG7で唯一、LGBTQに関する差別を禁止する法律がないため、要望する声も多い。

## 第2節 調査目的

ジェンダー観に関する意識調査についての先行研究調査を行った。先行研究の分析から、その中で特に大学生に特徴的なジェンダー観が見られるのではないかと考えた質問内容を日常生活の何気ない行動に見られるジェンダー差に関する内容、就活/仕事・結婚出産・家庭生活など将来生活に関する内容、家庭での体験についての内容に分類し、それぞれの項目を「日常におけるジェンダー意識」「ライフプラン」「家族観」と設定し調査を行った。

日常におけるジェンダー意識では、大学生が普段の生活で、どのような考えのもとどのような行動をしているのかを調査していく。具体的には恋人の条件を通じた恋愛観や女性の化粧、男性が食事をおごるべきかなどを問い、大学生なりの視点からリアルな価値観を調査することで、伝統的性役割観に対する考えなどの外面的なジェンダー観と併せて、この質問項から日常行動に潜む内面的なジェンダー観を明らかにし、大学生のジェンダー観を考察していく。

ライフプランでは、将来どのような働き方を理想としているか、家庭生活などでどのようなライフプランを考えているのかを問う。そこから、大学生が今の社会をどのように捉えているのか、また社会の諸要素が大学生にどのように影響を与えているのかを、大学生の立場から仕事と家庭両面の将来像を問うことで、社会問題としてのジェンダー観を考えていく。

家族観では、家庭における親の家事分担・家庭内決定権の在り処や家庭内で女らしさ男らしさを感じた経験を問う。それらの状況や経験を対象者がどのように捉えているのかを調査することで、ジェンダー観が家庭内ではどのように現れるのか、またその家族の価値観が子のジェンダー意識にどのように作用しているのかを明らかにしていきたい。

最近のジェンダーの話題が盛り上がっている。そのような潮流の中、男女共同参画社会の実現、近年議題に上がる同性婚や夫婦別姓をはじめとしたジェンダー理解やジェンダー平等の推進が、これからの社会を担っていく私たち若者に求められている。そこで今回、今後就職活動などを通し現代社会について深く考えていくであろう若い大学生の中でも、課題に対するフィードバックがしやすい名市大生を対象に調査を行うこととした。名市大生の回答をもとに、現在の社会におけるジェンダーに関する課題を明らかにし、これからの将来を担う大学生へ向けて提起していこうと思う。

## 第3節 質問内容

第1項では、名市大生のジェンダー観について調査を行う。ここでは、性別役割分担に対する名市大生の考えを知るために、伝統的な役割分担観についての意見と、その理由を調査していこうと考えた。また、名市大生自身の性格や大学生によく見られる行動について、それがジェンダーバイアスに影響されているのかを調査するために、自身の性格や行動について考えてもらう質問をした。第1項を通じて、伝統的な性別役割分担意識やジェンダーバイアスに対して、現在の名市大生がどのような意見を持つのかを調査する。

第2項では、名市大生のライフプランについて調査を行う。将来の就職や家庭生活の考え方につ

いても双方に関連性があるのか、また性別によって違いがあるのかを調査するため、就職先を選ぶ際に重視する項目や、家庭生活での家事の分担、育児休業の取得の有無などを質問する。

第3項では、名市大生の家族観について調査を行う。現在・これまでの家族の在り方について知るため、家族で鍛冶屋決定権を担っていた人を質問する。そして、「男らしさ/女らしさ」の観点で家族の存在が名市大生のジェンダー意識に何か影響を与えたのかを知るため、家族から「男らしさ/女らしさ」を求められた経験を自由記述で質問する。

第4項では、社会課題に対する名市大生の考え方を調査する。近年議論が高まっている同性婚、選択的夫婦別姓の問題について名市大生の自由な考えを聞く。さらに、これまでの質問を踏まえて現在の社会を見たときに、社会全体の男女の地位が平等になっているかを質問する。そして、そもそも「ジェンダー」という言葉を名市大生がどのような言葉として捉えているのかも質問する。

## 第4節 調査経過

5～7月 文献調査

- ・インターネット調査
- ・先行研究『男女平等参画に関する大学生の意識調査』  
『2016年度近畿大学 大学生人権意識調査』

8～9月 アンケート用紙作成・アンケート依頼

9～10月 アンケート調査実施 集計・分析

10月 中間報告会、第15回社会調査実習インターカレッジ発表会準備

10月15日 中間報告会

10月31日 第15回社会調査実習インターカレッジ発表会

11月～2月 アンケート調査結果の分析・最終報告書作成

## 第5節 先行研究

本学の生徒を対象に調査を行うにあたり、大学生を対象として男女平等に関する意識やジェンダー、ライフプランについて問うアンケート調査を先行調査として参考にした。

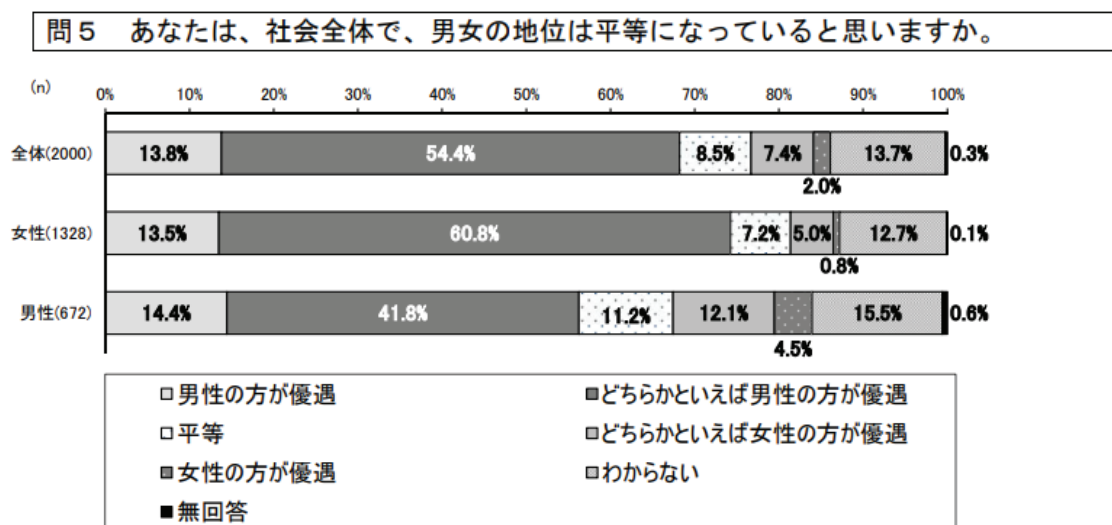
### ①「男女平等参画に関する大学生の意識調査（2016）」

まず1つ目は、2016年に名古屋市男女平等参画推進会議が名古屋市内の大学生約2000名を対象に行った「男女平等参画に関する大学生の意識調査」である。本調査の概要は「仕事や結婚、家族、教育、人権などについて、男女平等参画の視点から、大学生の意識と実態を把握すること」である。この先行調査は、男女平等における大学生のジェンダー意識はもちろんのこと、キャリアやライフプランにもわたって幅広く質問項目を設けているのが特徴である。

本調査のジェンダー観に関する複数の問いから、男女で差はみられるものの、大学生は性別役割分担に否定的であり、親世代とは異なる男女平等意識を持っていることが明らかとなった。加えて、大学生は実社会の男女不平等を実感しており、社会全体においては男性優遇であると捉えているこ

とが読み取れる（図1）<sup>3</sup>。特に女性で「男性優遇」と回答する傾向が高いことがわかる。

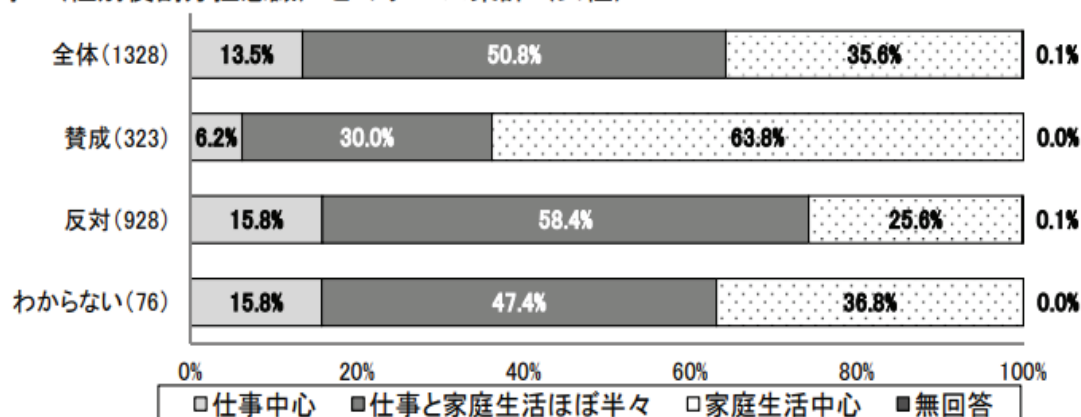
（図1）



仕事と家庭のバランスについては、問6で「将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くか」が問われている。この質問について、男女ともに「仕事と家庭生活ほぼ半々」というワーク・ライフ・バランスを理想とする人が最も多かった一方で、次点で女子学生は「どちらかといえば家庭中心」、男子学生は「どちらかといえば仕事中心」という従来の性別役割分業意識を反映した人生キャリアを思い浮かべる傾向があることが明らかになった。

この理想について、女性では性別役割分担意識とのクロス集計から、性別役割分担意識に「賛成」の人ほど「家庭生活中心」を望む傾向があることがわかる。また「反対」もしくは「わからない」と回答した人は「仕事と家庭生活ほぼ半々」を望む傾向が高い。これらのことから、女子学生に関しては、自身が今までに獲得してきた性別役割分担意識が人生キャリアを考える上で影響を与えていると考察できる（図2）<sup>3</sup>。

（図2） ●問1（性別役割分担意識）とのクロス集計（女性）



<sup>3</sup> 名古屋市男女平等参画推進会議「男女平等参画に関する大学生の意識調査」（調査結果報告書）平成28年



この先行調査をふまえて、現在の学生における性別役割分担への意識には変化があるのか、そして、その考えを持っている理由とはどのようなものであるのかということ調査したいと考えた。また、男女の平等感、そして彼らが思い描く理想のライフプランについて、本学の大学生はどのように考えているのかということや、彼らのジェンダー観に影響を与える要素は何なのかを明らかにしたいと考えた。そこで、私たちのアンケート調査において、上記の調査の問いを参考にし、同様の質問を行った。

## ②「2016年度近畿大学 大学生人権意識調査（2017）」

2つ目は、近畿大学人権問題研究所が学生におけるジェンダー意識を把握するために、2016年度近畿大学の学生を対象に行った「2016年度近畿大学 大学生人権意識調査」である。学生のそれまでの家庭内での経験や、恋愛での経験、ジェンダーに対する意識や将来のライフプランなどを細かく質問することで、大学生の人権意識、ジェンダー意識を調査している。私たちの研究と同じように大学生を対象として調査している点や、標本数 1767 件と、一つの大学での調査としては圧倒的な標本数の多さを誇ることから、アンケート調査における設問づくりの参考資料や、分析における比較の対象として先行研究の一つとした。

複数の設問において、女性よりも男性の方が性別役割規範を肯定する傾向にあり、特に、「男性はこうあるべきだ」といった男性性を肯定する意識、および男性に「強さ」と経済的責任を求める意識が男性に高いことも示されている。さらに本研究ではいくつかの設問の回答結果を因子分析することで「男性性肯定因子」を抽出しており、男性性を肯定する意識が特に高かった、男性の「男性性肯定因子」と、学生のそれまでの家庭、学校での経験を問う設問の男性の回答とのクロス集計にすることによって、家庭で、「男らしさ」を求める発言をされた経験、学校で、男子生徒と女子生徒との扱われ方の差を感じた経験をしている人の方が、男性性を肯定する意識が高いことが示されている。ここから、家庭で男性性を強化し内面化する発言を受けたり、学校で女子と男子が対等に対応されていなかったりした経験が、男性のジェンダー意識において、男性性規範を肯定するような影響を及ぼしていることが推察されている。

次に、将来のライフプランについての設問では、男女ともに「結婚しても、仕事を続ける」と回答する割合が最も高かったが、次点で、男性は「子供ができて、仕事を続ける」、女性は「子供ができれば退職し、子育てが終わったら再就職する」との回答の割合が高くなっており、また、将来のパートナーに求めるライフプランについても、男女ともに「結婚しても、仕事を続けてほしい」と回答する割合が最も高くなっていったものの、次点で、男性は「子供ができれば退職し、子育てが終わったら再就職してほしい」、女性は「子供ができて、仕事を続けてほしい」との回答の割合が高くなっていることが読み取れた。（表 1、表 2）



表1：先行研究をもとに筆者作成

問16 あなたは、将来どんな生き方や働き方をしたいと思いますか。次のうちから、あなたの考えに近いと思うものに○をつけてください。(○はいくつでも)

		全体	結婚しても、仕事を続ける	結婚したら、仕事を辞める	結婚しないで、仕事を続ける	子供ができて、仕事を続ける	子育てのために仕事を辞めて、子供が大きくなったらまた働く	子育てのために仕事を辞める 子供ができたなら、仕事を辞める	仕事はしない	わからない	その他	無回答
全体		1,767 100.0	1,440 81.5	73 4.1	194 11.0	1,013 57.3	312 17.7	43 2.4	24 1.4	123 7.0	22 1.2	41 2.3
性別	女	608 100.0	437 71.9	58 9.5	65 10.7	206 33.9	285 46.9	37 6.1	6 1.0	56 9.2	5 0.8	9 1.5
	男	1,144 100.0	992 86.7	15 1.3	129 11.3	802 70.1	26 2.3	6 0.5	18 1.6	66 5.8	15 1.3	29 2.5
	その他の回答	5 100.0	4 80.0	0 0.0	0 0.0	3 60.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 20.0	1 20.0

表2：先行研究をもとに筆者作成

問17 あなたが将来パートナーと暮らすとしたら、相手の人にはどんな生き方や働き方をしてほしいと思いますか。

次のうちから、あなたの考えに近いと思うものに○をつけてください。(○はいくつでも)

		全体	結婚しても、仕事を続けてほしい	結婚したら、仕事を辞めてほしい	子供ができて、仕事を続けてほしい	子育てのために仕事を辞めて、子供が大きくなったらまた働いてほしい	子育てのために仕事を辞めて、子供ができたなら、仕事を辞めてほしい	パートナーと暮らすことは考えていない	わからない	その他	無回答
全体		1,767 100.0	1,081 61.2	72 4.1	645 36.5	391 22.1	90 5.1	73 4.1	260 14.7	98 5.5	53 3.0
性別	女	608 100.0	544 89.5	3 0.5	412 67.8	8 1.3	1 0.2	21 3.5	34 5.6	2 0.3	10 1.6
	男	1,144 100.0	532 46.5	68 5.9	232 20.3	379 33.1	87 7.6	52 4.5	224 19.6	95 8.3	40 3.5
	その他の回答	5 100.0	2 40.0	0 0.0	0 0.0	2 40.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 20.0	1 20.0

このデータ、および先述した性別役割分担についての設問の回答から、近畿大学の調査においては、性別役割分担に否定的な意見を持つ学生は多いが、自分やパートナーの将来のことになると性別役割分担意識に基づいた考え方をしてしまう人が多いのではないかとということが考えられた。

なお、問 16、問 17 に関しては、複数回答可能な設問であったため、学生の意識をより正確に把握するため、本調査研究における同様の設問においては複数選択不可とするなど、必要に応じて改善を加えている。

## 第2章 調査結果

### 第1節 調査方法

本調査を行うにあたって我々はアンケート調査を行った。

調査対象については名古屋市立大学の大学生のうち、教養教育科目・専門教育科目の合わせて73講義を開講している教員の方々に協力をいただき、これらの受講している学生を対象とした。アンケート調査の方法については Google フォームまたは紙媒体により名古屋市立大学生に匿名により回答を依頼した。質問数は調査に関して問う質問を22問、対象者の属性を問う質問を5問の計27問を質問した。質問の内容としては性別役割分担などのジェンダー観についての質問、育児休暇を取得するかなどのライフプランについての質問、同性婚や夫婦別姓などの家族観について質問となっている。調査期間は2021年9月24日の金曜日から2021年11月7日の日曜日までとした。

調査人数は401人（無回答1人）の学生に回答をいただいた。内訳は以下のようになっている。

調査人数内訳（学部学年別、総数400人）

	学部1年	学部2年	学部3年	学部4年	合計
人文社会学部心理教育学科	37	19	32	7	95
人文社会学部現代社会学科	41	34	15	1	91
人文社会学部国際文化学科	28	32	25	8	93
医学部	10	0	0	0	10
薬学部	5	0	0	0	5
経済学部	53	4	4	0	61
芸術工学部	21	4	0	0	25
看護学部	1	0	0	0	1
総合生命理学部	18	0	0	0	18
交換留学生	0	0	1	0	1
合計	214	93	77	16	400

調査人数内訳（学部性別、総数400人）

	男性	女性	その他	合計
人文社会学部心理教育学科	10	84	1	95
人文社会学部現代社会学科	33	56	2	91
人文社会学部国際文化学科	11	79	3	93
医学部	5	5	0	10
薬学部	2	3	0	5
経済学部	27	34	0	61

芸術工学部	15	10	0	25
看護学部	1	0	0	1
総合生命理学部	9	9	0	18
交換留学生	1	0	0	1
合計	114	280	6	400

## 第2節 調査結果と分析

### 第1項 ジェンダー観

ここでは、名市大生のジェンダー観について調査をしていく。性別役割分担に対する態度、ジェンダーから見る自己理解、恋人に求める条件にはジェンダー的要素があるのか、男性・女性のジェンダーバイアスに対する態度を調査することで、日常における今の名市大生のリアルな内面的・抽象的なジェンダー観について考えていく。

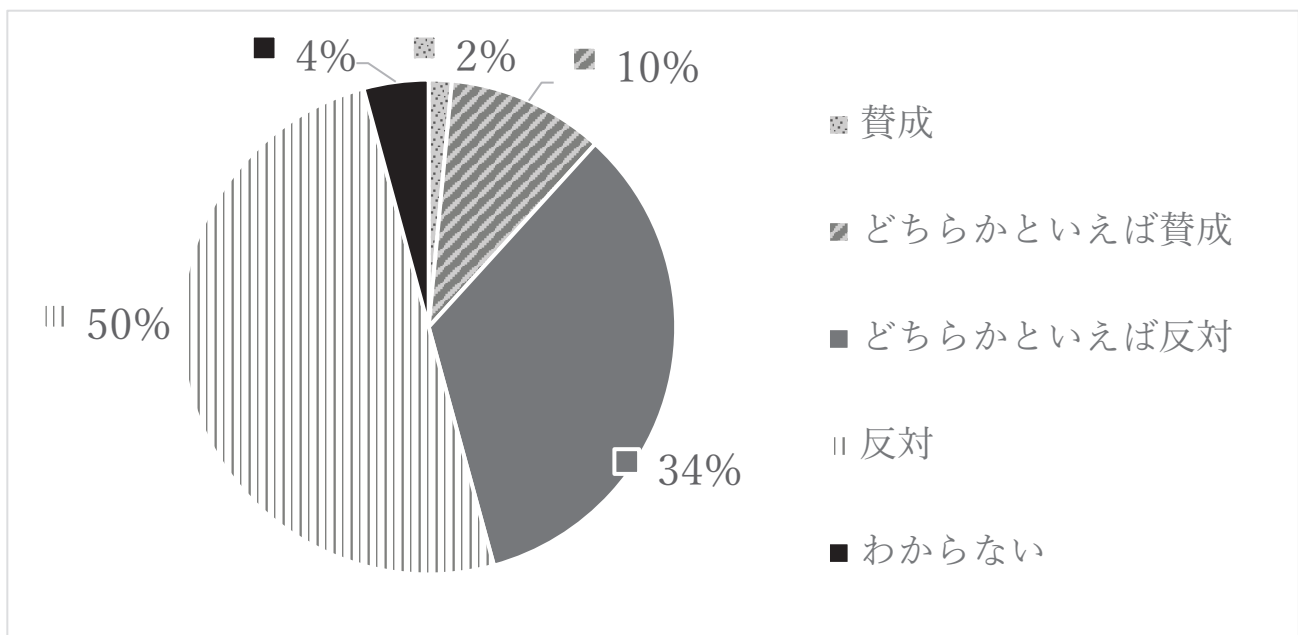
#### ジェンダー観-1 『性別役割分担について』

問1 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について、あなたの意見に最も近いものはどれでしょうか。【当てはまる番号1つだけを記入】

ここでは伝統的な性別役割分担についての質問をした。名市大生が性別役割分担についてどのように考えており、またその根拠は何なのかを明らかにする。

#### 分析

性別役割分担について、「賛成」「どちらかといえば賛成」「どちらかといえば反対」「反対」「わからない」の5択で質問した。

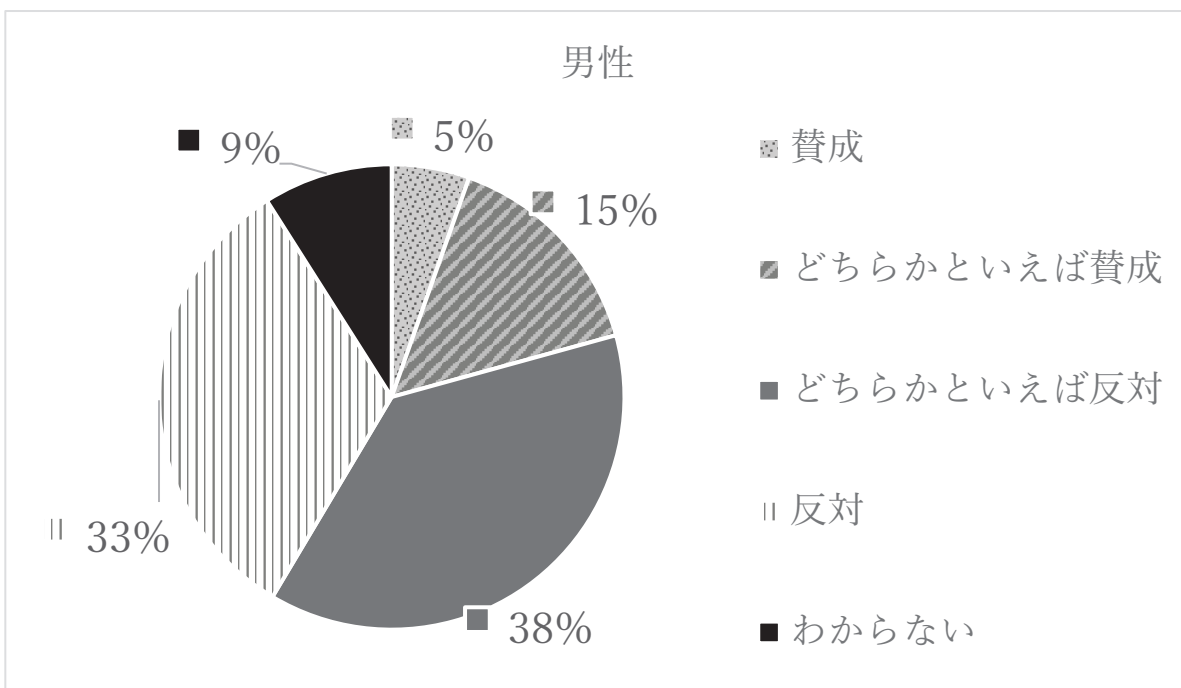
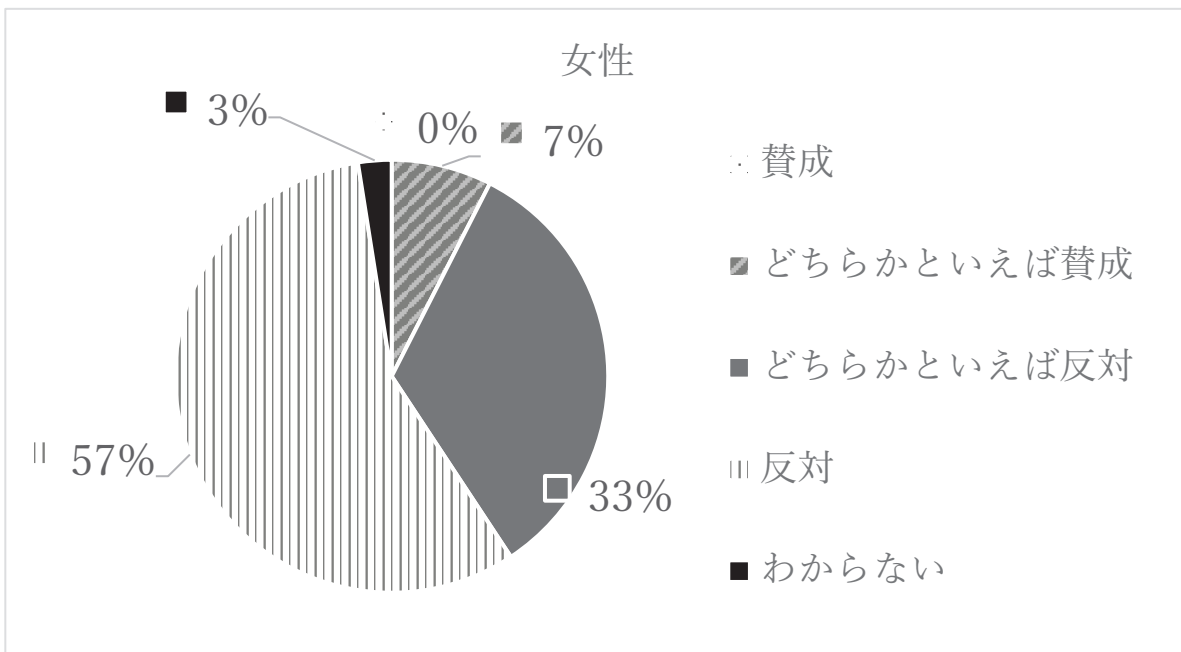


◎考察

「どちらかといえば反対」「反対」の割合が84%と八割を超える結果となった。このことから、名古屋市立大学の学生は伝統的な性別役割分業について否定的だという結論が出た。名市大では男女平等参画を意識した講義も多く開講されていることから、固定的な価値観について考える機会が多くある。このことは結果に大きな影響を与えたように感じる。しかしながら理系の回答者が少なく、文系の生徒の割合が極端に多いことも、このような結果となった原因であると推測する。

◎性別別グラフ

次に表示するのはその質問を男女別で表示したものである。



◎考察

女性のグラフから見ていく。女性では「賛成」と答えた回答者は0であった。また「どちらかといえば反対」「反対」と回答した割合が89%とほぼ9割との結果になった。以下のことから名市大生の中でとりわけ女性は、古典的な性別役割分業について否定的だという結果となった。

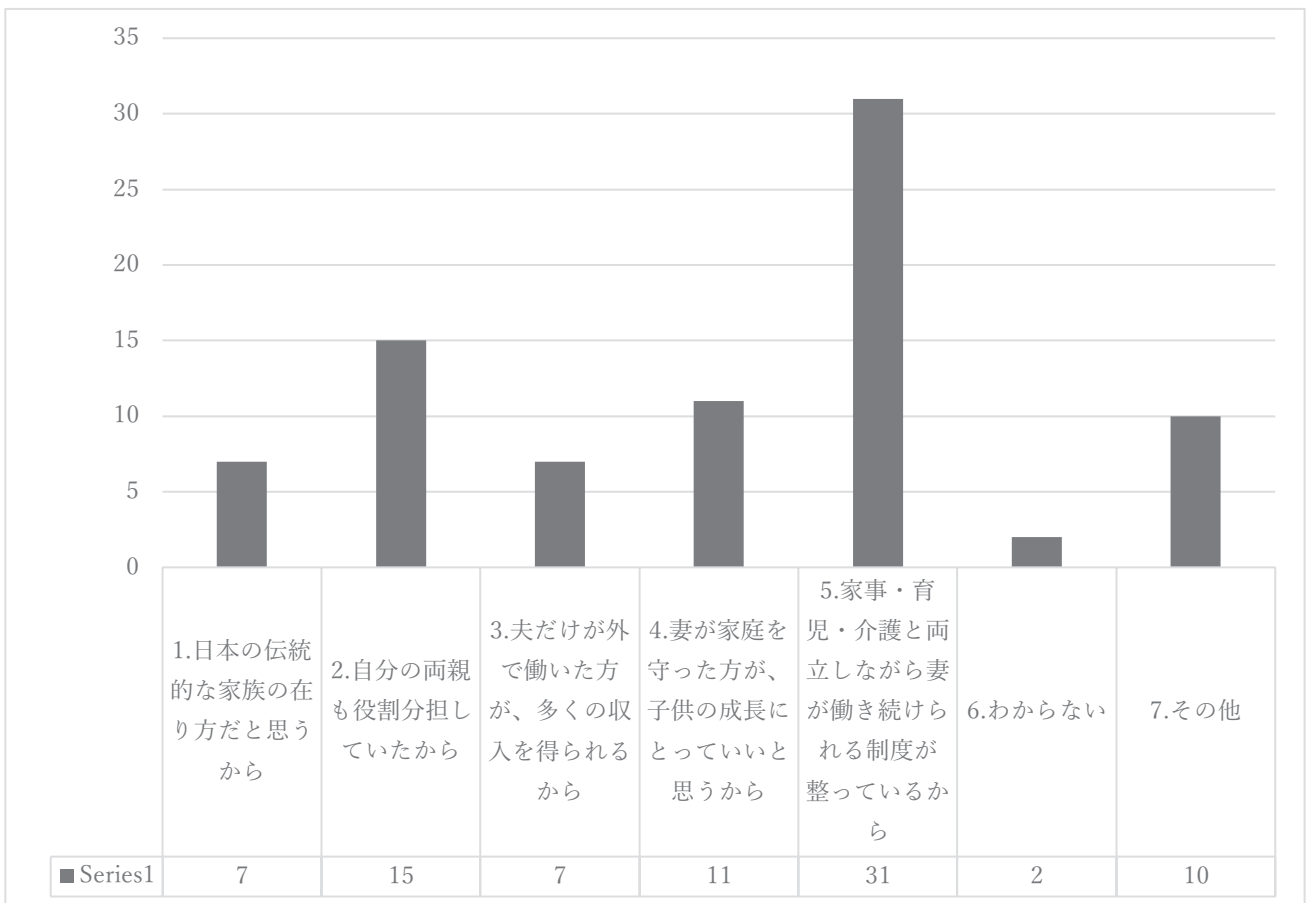
次に男性のグラフを見ていく。女性と比べると「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた割合が上昇していることがわかる。また「わからない」と答えた割合も9%と女性の回答と比較して多いことから、男性は女性と比べて古典的な性別役割分担についての意識が希薄であると考察した。

問1-1 問1で「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた方におたずねします。それはなぜですか。

【あてはまる番号をすべて記入】

分析

問1で「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた学生に対して、その理由を問う。「日本の伝統的な家族の在り方だと思うから」「自分の両親も役割分担をしていたから」「夫だけが外で働いた方が、多くの収入を得られると思うから」「妻が家庭を持った方が、子供の成長にとって良いと思うから」「家事・育児・介護と両立しながら妻が働き続けられる制度が整っていないから」「その他」「わからない」の7択で質問した。



◎考察

最も多いのが「5.家事・育児・介護と両立しながら妻が働き続けられる制度が整っていないか



ら」について「2. 自分の両親も役割分担をしていたから」が回答の多くを占めた。前者にある家事・育児・介護は主に女性が家庭内で担う役割である。また職業としてこの三つに携わっている人の男女比は女性の割合が圧倒的に高い。家庭内でも社会でもこの三つは女性がするものだという価値観がまだ深く残っているように感じる。しかし「イクメン」の誕生や父親の育児休暇取得などが進みつつある現代で、この価値観は今後大きく変化していくだろう。

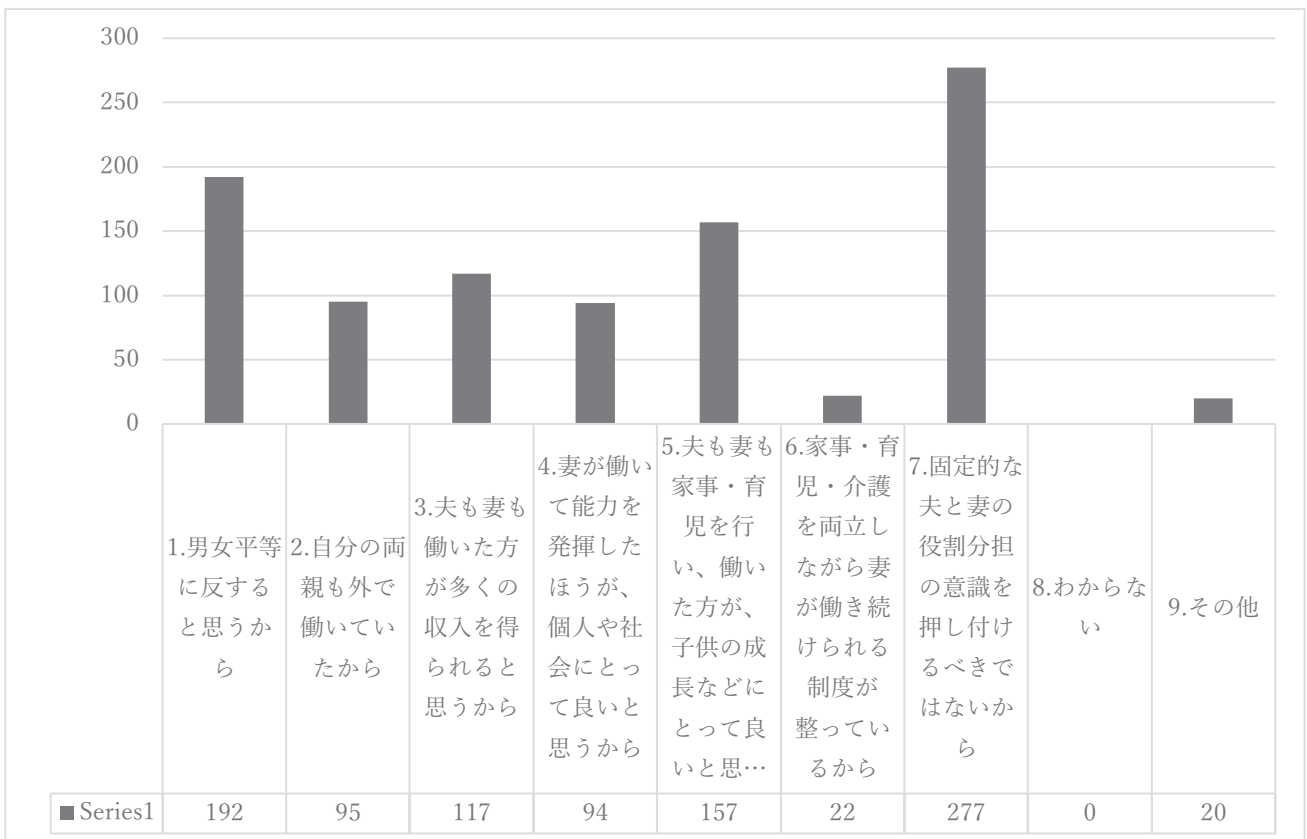
その他の回答として挙げられたのは、男女の身体的な差異や労働に対する嫌悪感であった。嫌悪感を記した回答はすべて女性であった。また自分の家庭がそうだからという回答もあり、自分の生活環境や経験が大きく価値観の形成に関わっていると感じた。

問1-2 問1で「反対」「どちらかといえば反対」と答えた方におたずねします。それはなぜですか。

【当てはまる番号をすべて記入】

### 分析

問1で「反対」「どちらかといえば反対」と答えた学生に対して、その理由を問う。「男女平等に反すると思うから」「自分の両親も働いていたから」「夫も妻も働いた方が、多くの収入を得られると思うから」「妻が働いて能力を發揮した方が、個人や社会にとって良いと思うから」「夫も妻も家事・育児・を行い、働いた方が、子供の成長などによって良いと思うから」「家事・育児・介護と両立しながら妻が働き続けられる制度が整っているから」「その他」「わからない」の9択で質問した。



### ◎考察

「7. 固定的な夫と妻の役割分担の意識を押し付けるべきではないから」が最も多く、次いで「1. 男女平等に反すると思ったから」「5. 夫も妻も家事・育児を行いはたらいた方が、子供の成長など

にとって良いと思うから」が続く結果となった。「7. 固定的な夫と妻の役割分担の意識を押し付けるべきではないから」が最も多いことから、多くの人が「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方に押し付けられていると感じ、不快感を持っていると考えられる。男女平等や夫の家事育児の参加は今後も社会全体の課題として取り組んでいかなければならない。

その他の回答で特に多いと感じたのは、外で働きたいという女性の意見と経済的に共働きでないと生活できないという意見であった。またジェンダーで役割分担をするのではなくやりたいことをやればいいという回答もあり、ジェンダーというレンズを取り払い個人の意思を優先させるべきだという意見もあった。キャリアプランやライフプランを固定的で古い価値観ではなく、自分の意志で決めたいと感じている人が多いように感じた。

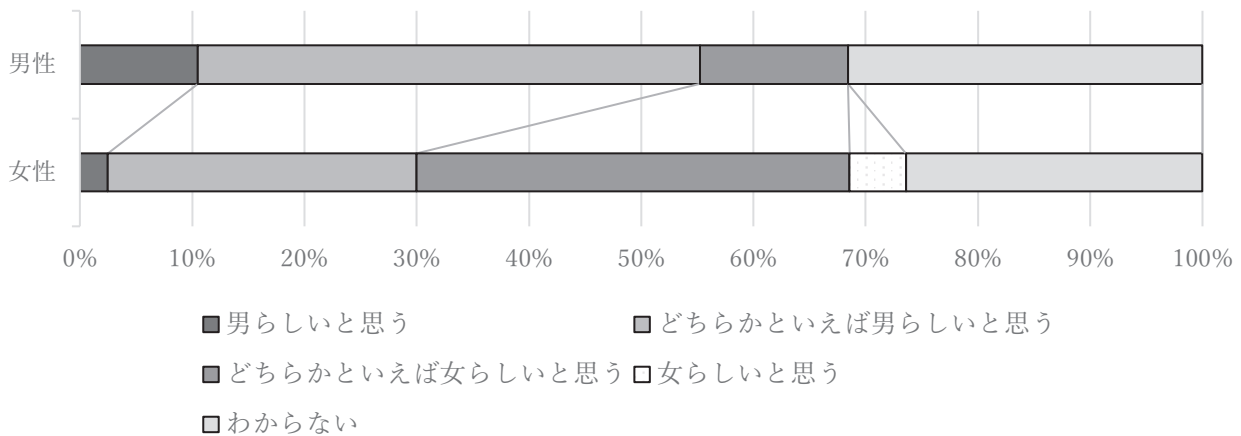
## ジェンダー観-2 『自分の性格について』

### 問2 あなたは自分の性格についてどう思っていますか。【当てはまる番号1つだけを記入】

ここでは、自身の性格の「男らしさ」「女らしさ」と実際の性別との違いや、性別との相関が見られた他の問とクロス集計をすることで、その問との相関があるかを調べる。

#### 分析

自身の性格について、「男らしいと思う」「どちらかといえば男らしいと思う」「どちらかといえば女らしいと思う」「女らしいと思う」「わからない」の5択で質問した。男女別の回答結果は以下の表の通りである。



#### ◎考察

男女ともに「わからない」とする回答が3割ほどみられた。また男女を比較すると、女性の方が自分の性別と異なる回答をする割合が高かった。

このような結果の原因として、「男らしい女性」と「女らしい男性」という言葉の印象の違いが考えられる。「女らしい男性」は「男らしい女性」に比べてネガティブな印象があるため、無意識的に「わからない」と回答する男性が多いと推測される。

また、性別と相関の見られた問4や問6とクロス集計をしたが、特に相関はみられなかった。このことから、男らしい、女らしいという性格的な要素は、ジェンダー意識において必ずしも身体的な性別と同じ影響を及ぼすとは限らないとわかった。

ジェンダー観-3 『理想の恋人の条件について』

問3 あなたの理想の恋人の条件について、当てはまるものを選んでください。【当てはまる番号をすべて記入】

ここでは、大学生が描く理想の恋人の条件を様々な形容詞を用いて尋ね、男らしさ・女らしさやジェンダー規範などの価値観との関わりを調べる。

**分析**

理想の恋人の条件について、下記の表の項目のうち当てはまるものを全て選択する形式で質問した。性別ごとの結果は以下の通りである。

	男性(人)	女性(人)	その他(人)
誠実	45	180	4
上品	21	25	0
従順	3	8	0
優しい	68	193	2
面白い	37	132	1
活発	24	46	0
寛容	38	141	5
幼げ	9	7	0
大柄	3	30	0
小柄	11	1	0
家庭的	25	65	0
細身	12	20	0
感情豊か	33	55	2
一途	32	96	0
背が高い	7	63	0
大人びた	18	38	1
かわいい	41	17	1
かっこいい	3	63	0
意志が強い	17	50	1
たくましい	2	37	0
おしゃれ	15	23	0
ふくよか	2	1	0
話が上手い	23	59	1
話しやすい	62	172	2
趣味が合う	35	93	1
礼儀正しい	32	106	2
さわやか	5	49	0
容姿が好み	43	64	1

経済力がある	9	71	0
甘えてくれる	33	22	0
将来性がある	11	67	0
クール	4	10	0
大人しい	7	7	0
料理ができる	23	31	0
包容力がある	28	90	0
親しみやすい	43	105	2
居心地が良い	57	152	3
プライドがある	8	6	0
頼りがいがある	19	103	0
ギャップがある	13	28	0
交友関係が広い	7	16	0
価値観が似ている	50	146	3
人として尊敬できる	46	160	3
素の自分で居られる	57	164	3
支えがいがある	19	33	0
自分にはないものを持っている	42	92	1
自分の気持ちを伝えてくれる	40	111	0

◎人気選択肢の考察

上位 5 項目には色を付けて表示している。この表を見ると、上位項目は性別に関わらずおおむね一致しており、人間性や居心地の良さを重視する傾向にあることがわかる。また、性別その他を選んだグループでは特に寛容さを重視する傾向がみられた。

性別ごとの選択個数でみると、男性 12.3 個、女性 13.9 個、その他 6.5 個となり、性別でその他を選んだグループでは特に少なかった。

次に、男女で差のある項目を調査するために項目ごとの男女割合の比を求めた。比率の上位と下位それぞれ 5 項目には色を付けて表示してある。

誠実	1.648069		趣味が合う	1.094788
上品	2.03875		礼儀正しい	1.364807
従順	1.098712		さわやか	4.037768
優しい	1.169402		容姿が好み	1.630697
面白い	1.469899		経済力がある	3.250358
活発	1.266304		甘えてくれる	3.640625
寛容	1.528801		将来性がある	2.509559
幼げ	3.120536		クール	1.030043
大柄	4.120172		大人しい	2.427083

小柄	26.69792		料理ができる	1.800739
家庭的	1.071245		包容力がある	1.324341
細身	1.45625		親しみやすい	1.006088
感情豊か	1.45625		居心地が良い	1.098712
一途	1.236052		プライドがある	3.236111
背が高い	3.708155		頼りがいがある	2.233567
大人びた	1.149671		ギャップがある	1.12686
かわいい	5.853554		交友関係が広い	1.061849
かっこいい	8.652361		価値観が似ている	1.20309
意志が強い	1.211815		人として尊敬できる	1.433103
たくましい	7.622318		素の自分で居られる	1.185453
おしゃれ	1.58288		支えがいがある	1.397412
ふくよか	4.854167		自分にはないものを持っている	1.108016
話が上手い	1.056914		自分の気持ちを伝えてくれる	1.143348
話しやすい	1.143015			

表をみると、比率が大きい項目の方が性別限定的であるといえる。調査前時点での予測と比較すると、「細身」「料理ができる」「支えがいがある」といった項目はあまり差がつかなかった一方で、「誠実」「寛容」といった項目は男女間で差がみられた。

色のついた項目について、男女差のあるなしで分け、問1の性別役割分担について、問4の女性化粧について、問6の男性が奢るべきかについてのそれぞれとクロス集計を行った。結果を見ると、男性は奢るべきかとのクロス集計では男女差ありのグループの方が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答する割合がやや高くなっているが、他の項目を含めほとんど差は見られなかった。このことから、当初の仮説とは異なり、理想の恋人像とジェンダー規範についてはあまり関連がないということが分かった。

#### ジェンダー観-4 『女性の化粧について』

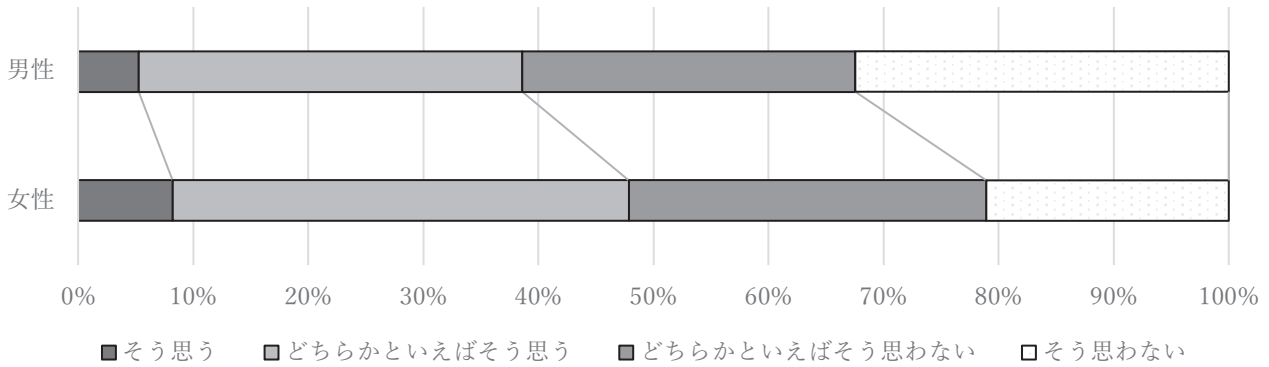
#### 問4 女性は人前に入る際化粧をするのがマナーだと思いますか。【当てはまる番号1つだけを記入】

ここでは、女性と結びつけられやすい「化粧」の役割に対する学生の考えを調査する。

#### 分析

女性が人前で化粧することをマナーであるとするかについて、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4択で質問した。

回答は以下の通りである。



### ◎考察

半数以上がそう思わないと回答し、女性が化粧することは必ずしもマナーとは言えないという結論がでた。また、女性よりも男性の方がそう思わないとする回答が多かった。この部分については、問6と合わせて考察する。

### ジェンダー観-5 『化粧をする理由』

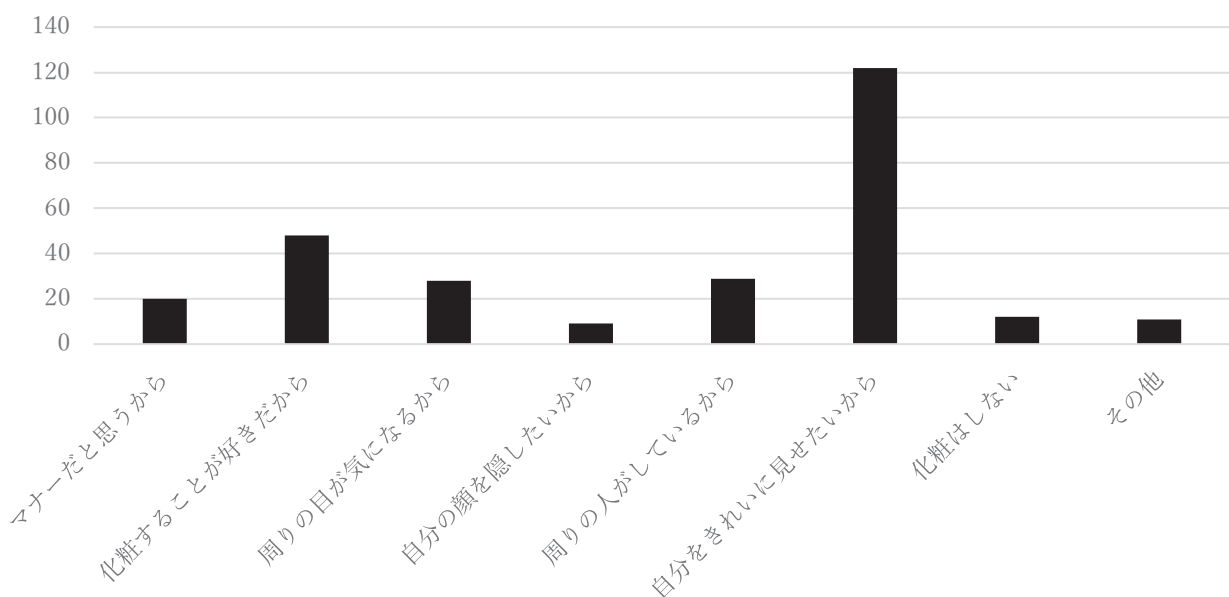
#### 問5 女性の方に質問です。あなたが化粧をする理由はなんですか。【当てはまる番号1つだけ記入】

ここでは、大学生がなぜ化粧をするか調査し、「化粧」という行為が大学生にどう評価されているかを考察する。

#### 分析

化粧をする理由として「マナーだと思うから」「化粧することが好きだから」「周りの目が気になるから」「自分の顔を隠したいから」「周りの人がしているから」「自分をきれいに見せたいから」「化粧はしない」「その他」の8択で質問した。

回答は以下の通りである。

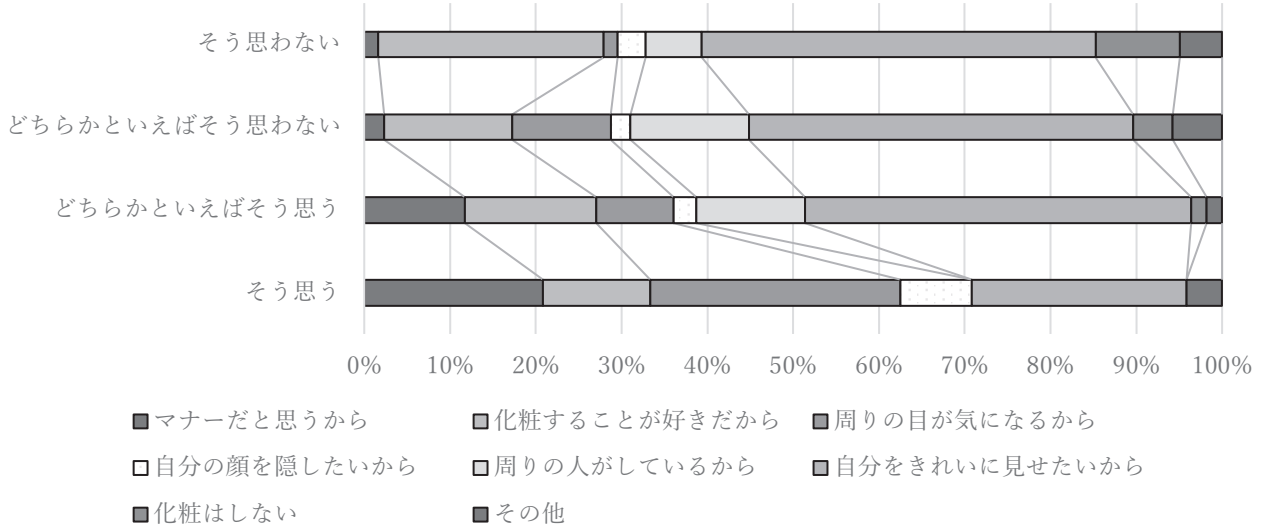




◎選択肢の考察

自分をきれいに見せたいからとする回答が多く全体の44%にのぼった。

また、問4「女性は人前に出る際化粧をするのがマナーだと思いますか。」とのクロス集計の結果が以下である。

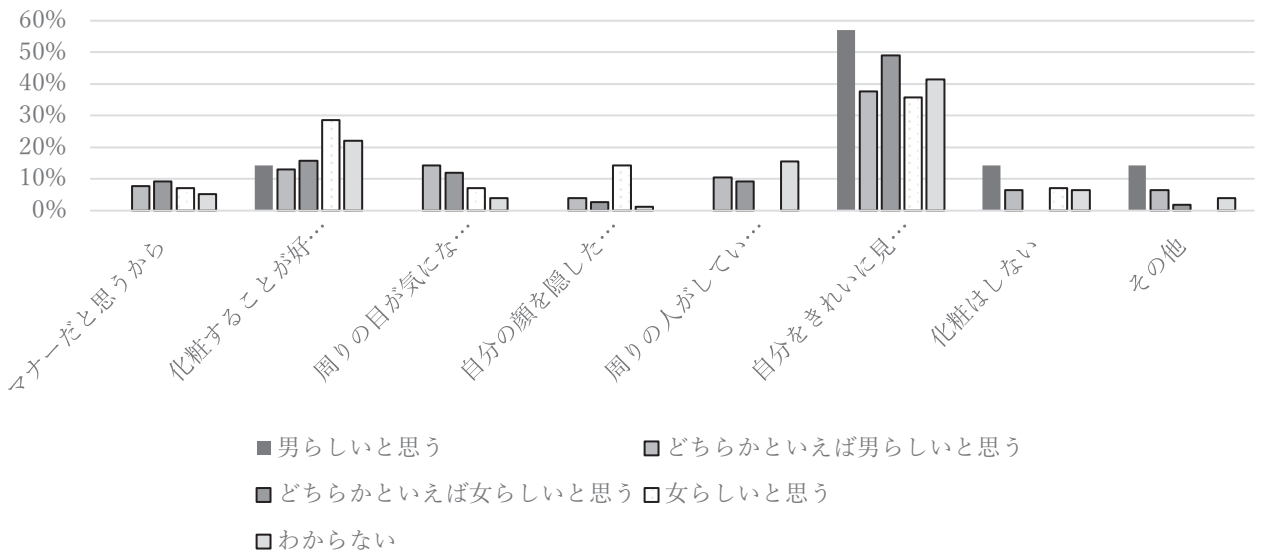


◎考察

結果をみると、問4で「どちらかといえばそう思う」「そう思う」と答えた人の方が、問5で「マナーだと思うから」「周りの目が気になるから」とする回答が多く、「どちらかといえばそう思う」「そう思う」と答えた人の方が「化粧することが好きだから」「自分をきれいに見せたいから」とする回答が多かった。

化粧をすることはマナーであると考えていても、実際に化粧をするのは他の理由によるとしている回答者が多く、化粧という行為そのものは肯定的に受けとられているといえる。

また、問2「あなたは自分自身の性格についてどう思いますか」とのクロス集計の結果が以下である。



### ◎考察

自分のことを男らしいと思う女性では「化粧はしない」と回答する割合が高く、女らしいと思う女性では「化粧をすることが好きだから」と回答する割合が高かった。

また、予想外の結果として、「どちらかといえば男らしい/女らしいと思う」または「わからない」と回答した女性において、「周りの目が気になるから」「周りの人がしているから」と周りの人を意識する回答の割合が高かった。

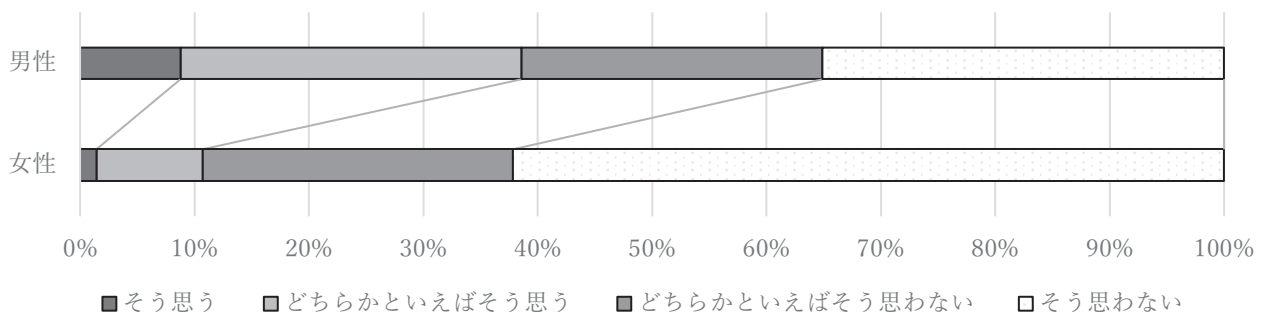
### ジェンダー観-6 『男性が食事の際に奢ることについて』

#### 問6 男女で食事に出かけたら、男性が奢るべきであると思いますか。【当てはまる番号1つだけ記入】

ここでは、主に男性の大学生にとって身近な行為である、「奢る」という役割に対する大学生の考えを調査する。

#### 分析

男性が奢るべきかという問いについて、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4択で質問した。回答は以下の通りである。



### ◎考察

男性の約4割が奢るべきであると回答したのに対し、女性では約1割と男女で回答に差がみられた。問4「女性は人前に出る際化粧をするのがマナーだと思いますか。」と合わせて考えると、特に同性のジェンダー規範について厳しい傾向がみられる。このことから、一般論としてのジェンダー平等の意識は浸透しつつある一方で、自分事としてとらえた場合には未だ旧来のジェンダー意識に縛られている人が多いことを示している。

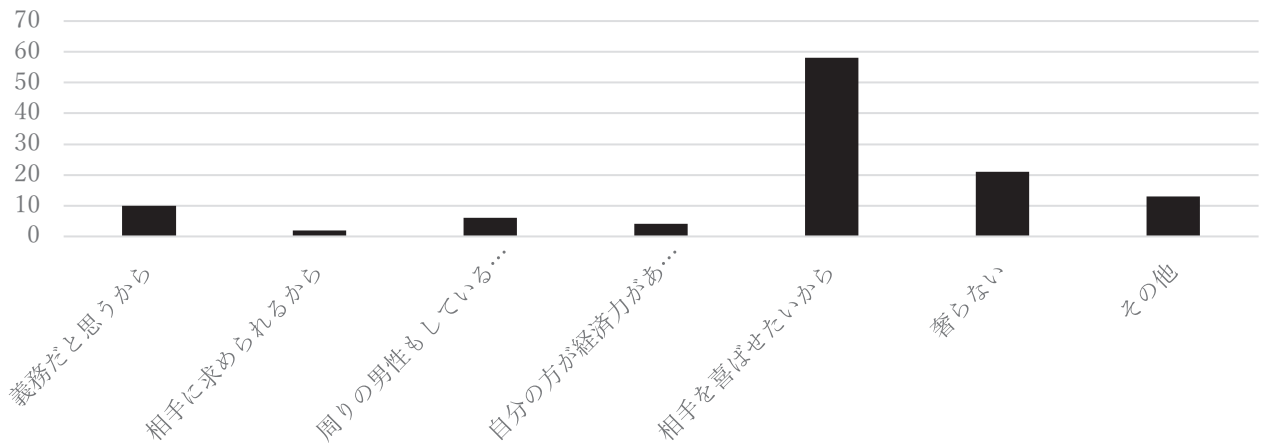
### ジェンダー観-7 『男性が奢る理由』

#### 問7 男性の方に質問です。あなたが女性に奢る/奢りたいと思うのはなぜですか。【当てはまる番号1つだけ記入】

ここでは、問6と合わせて「奢る」という行為が、それを行う大学生にとってどう評価されているかを調査する。

#### 分析

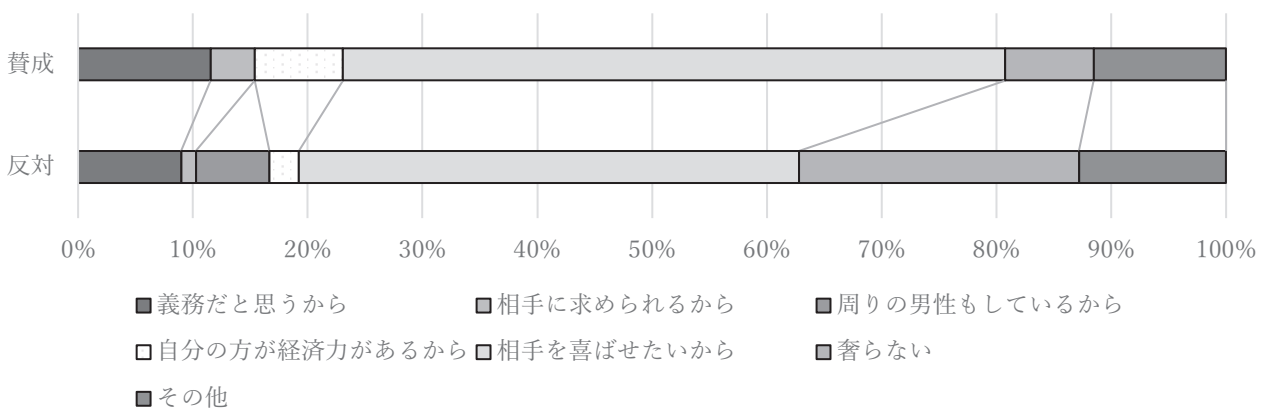
奢る理由について、「義務だと思うから」「相手に求められるから」「周りの男性もしているから」「自分の方が経済力があるから」「相手を喜ばせたいから」「奢らない」「その他」の7択で質問した。回答は以下の通りである。



### ◎選択肢の考察

「相手を喜ばせたいから」とする回答が最も多く全体の51%にもものぼった。また、「奢らない」とする回答も18%あった。その他の意見として、「かっこよく見せたい」「かっこつけたい」といった意見が多くみられた。

また、性別役割分担意識とのクロス集計結果が以下である。



### ◎考察

これを見ると、性別役割分担に反対している人の方が、奢らないという傾向にあることがわかる。実際にその他の意見の中には、奢らない理由として経済的な男女意識が無意識のうちに潜在化されてしまうからという意見があった。

他にも、金銭的要素を含むため生活環境も影響するかと考え、問24「あなたの生活環境を教えてください」とのクロス集計も行ったが、一人暮らしと実家暮らしで傾向に大きな差はみられなかった。

調査対象の多くが学部の1・2年生であることから、奢るかどうかという判断基準は感情的な部分が多くを占め、金銭的な要素は少ないと考えられる。

## 〈第1項 総括〉

名市大生のジェンダー観については、伝統的な性別役割分担意識が薄れてきており、一般的には従来のジェンダー観については薄れてきていると推測できる。しかし問4～6にかけての大学生の身近な行動に光をあててみると、従来のジェンダー観が残っていることがわかる。特に、女性の化粧に関してはすべきと考える女性が男性よりも多く、逆に男性が食事を奢るべきと考える男性は女性より多かった。このことから、自分ごととなると周りの目を気にして伝統的な役割分担の考え方に従っている大学生が多いことがわかる。

つまり、明示的、社会的なわかりやすいジェンダー観については多くの大学生が否定的に捉えている一方で、潜在的なジェンダー観については、無意識的にしろ、未だ従来のジェンダー観に従っている大学生が少なくないと考えられる。

## 第2項 ライフプラン

ここでは大学生が思い描く、将来の自分と自分のパートナーの理想の働き方がどのようなものかを調査し、実際に大学生が感じているリアルなジェンダーを明らかにする。そして、社会問題としてのジェンダーを考えていく。

### ライフプラン-1 『将来の就職先選択について』

**問8 あなたは就職先を選ぶときに次のうちどのような項目を重視しますか。【当てはまる番号をすべて記入、一番重視するものに◎】**

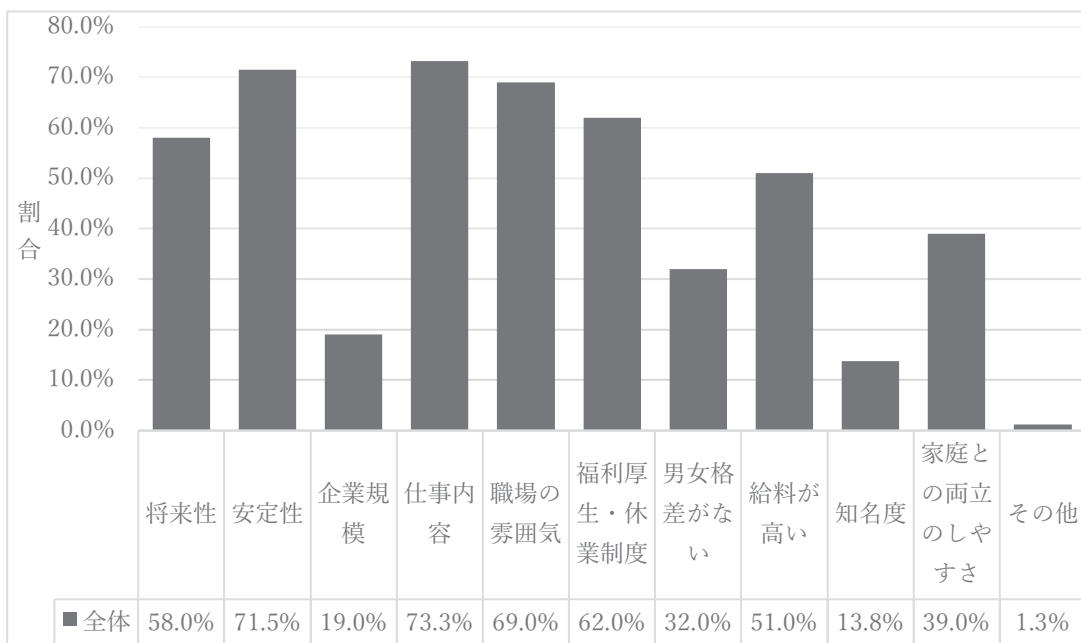
将来の就職先を選ぶときに重視する項目について、性別や希望する働き方によって何か違いがあるのかを調査する。

### **分析**

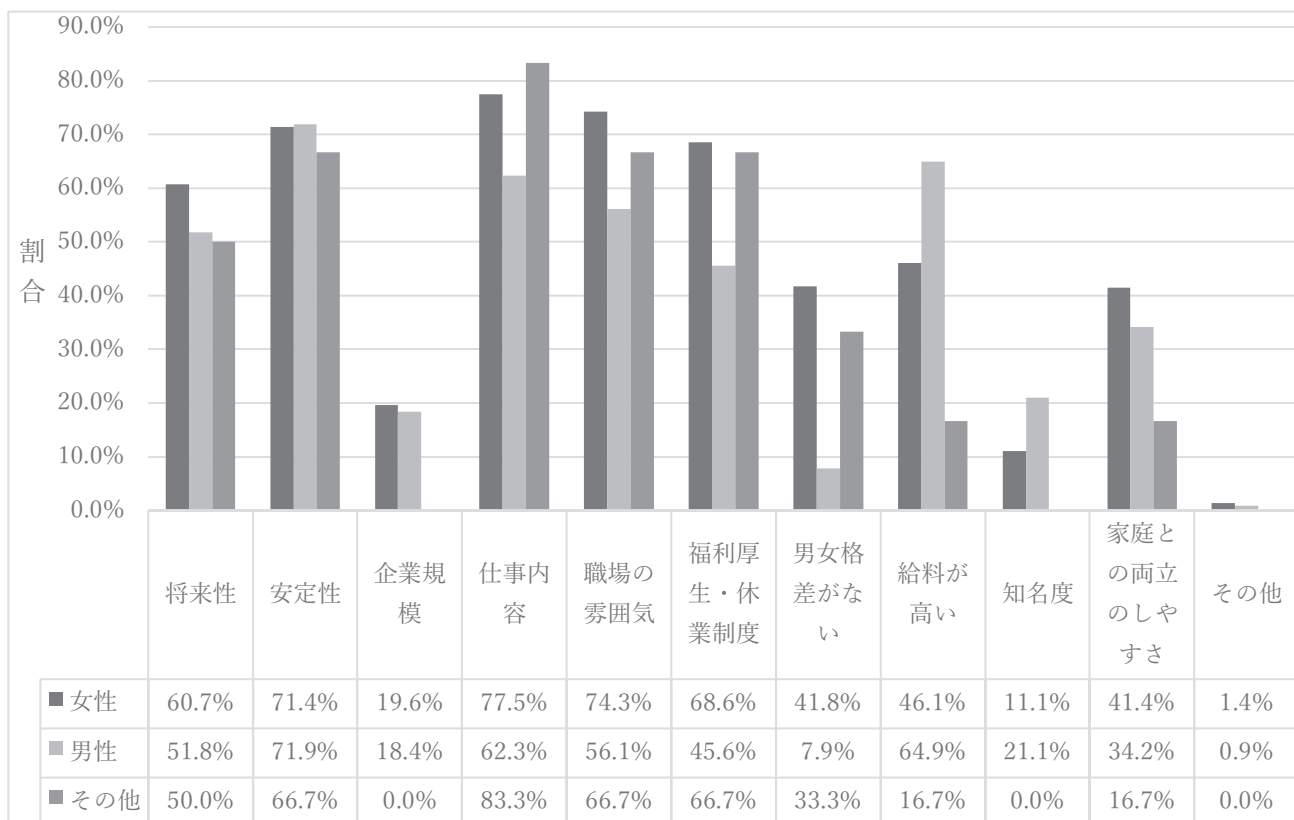
重視する項目を「将来性」「安定性」「企業規模」「仕事内容」「職場の雰囲気」「福利厚生・休業制度」「男女格差がない」「給料が高い」「知名度」「家庭との両立のしやすさ」「その他」の11択で質問した。

◎結果

<全体>



<性別>



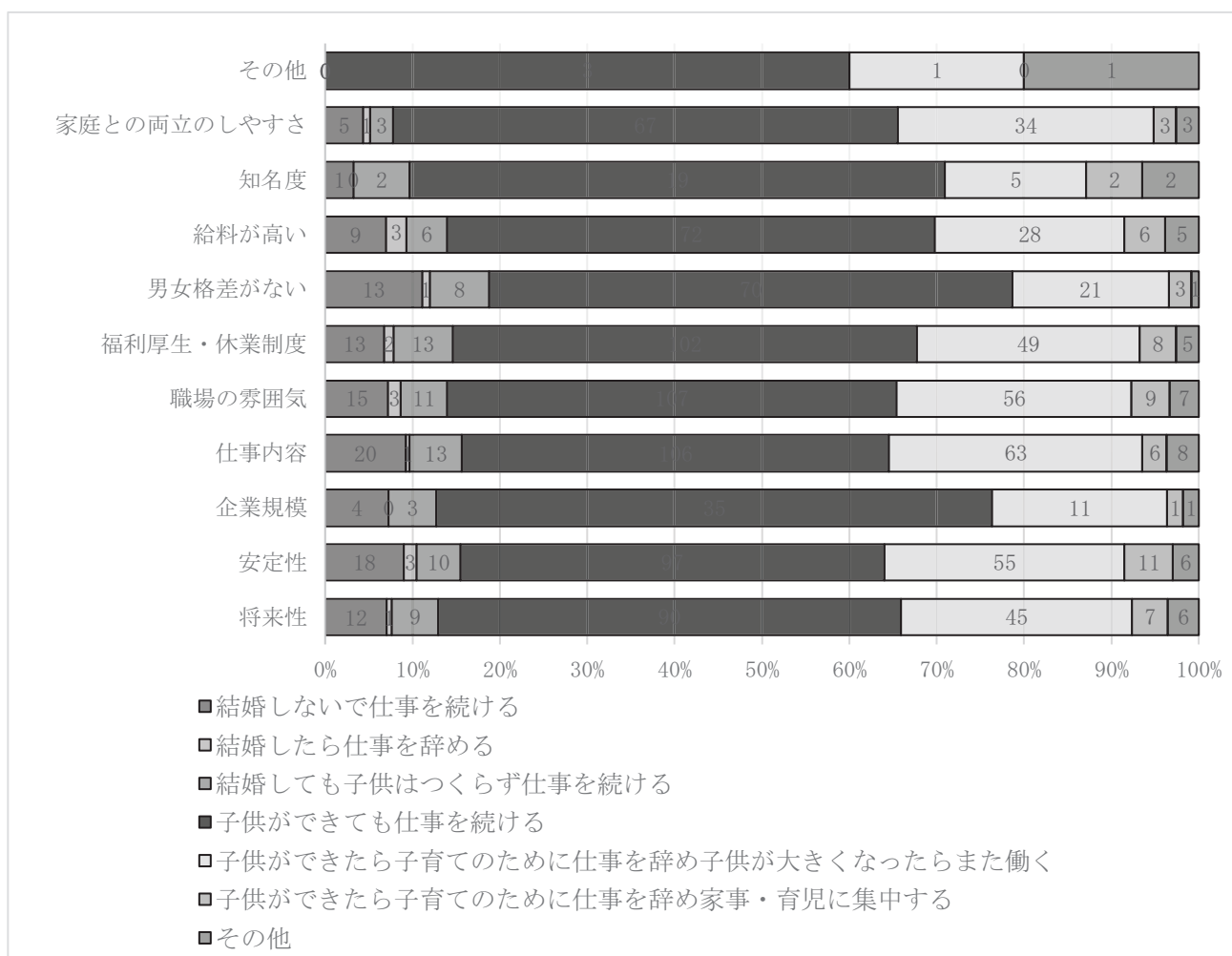
◎考察

全体では仕事内容が一番多く、次に安定性、職場の雰囲気、福利厚生・休業制度と続いた。このことから多くの人が将来を見据え、初めに就職した職場で働き続けるという考えを持っているのではないかと考える。

次にこの質問を性別で集計をした。女性は仕事内容が一番多く、職場の雰囲気、安定性、福利厚生・休業制度と続いた。仕事内容や職場の雰囲気、安定性を選ぶ人が多いことから、結婚後も仕事を続ける人が多いのではないかと考えた。また、福利厚生・休業制度を選ぶ人が多いことから、子供が出来ても仕事を続ける人が多いのではないかと考えた。男性は安定性が一番多く、給料が高い、仕事内容と続いた。安定性、給料が高い、を選ぶ人が多いことや福利厚生・休業制度、家庭との両立のしやすさを選ぶ人も一定数いたことから、男性は結婚後も家事や子供が生まれた後は子育てをすることを考えられるが、主に働いて家庭を支えることを見据えている人が多いのではないかと考えた。その他の人は仕事内容が一番多く、安定性、職場の雰囲気、福利厚生・休業制度が続いた。

この結果から、問9『あなたが夢見る理想の家庭生活について想像しもっとも当てはまると思う番号を選択し、記入してください。』の①自分について」とクロス集計をして考察に似た結果を得られるのかを調べた。また、その他の人に関しては母数が少なかつたため省略した。

◎問8、問9-1のクロス集計（女性）



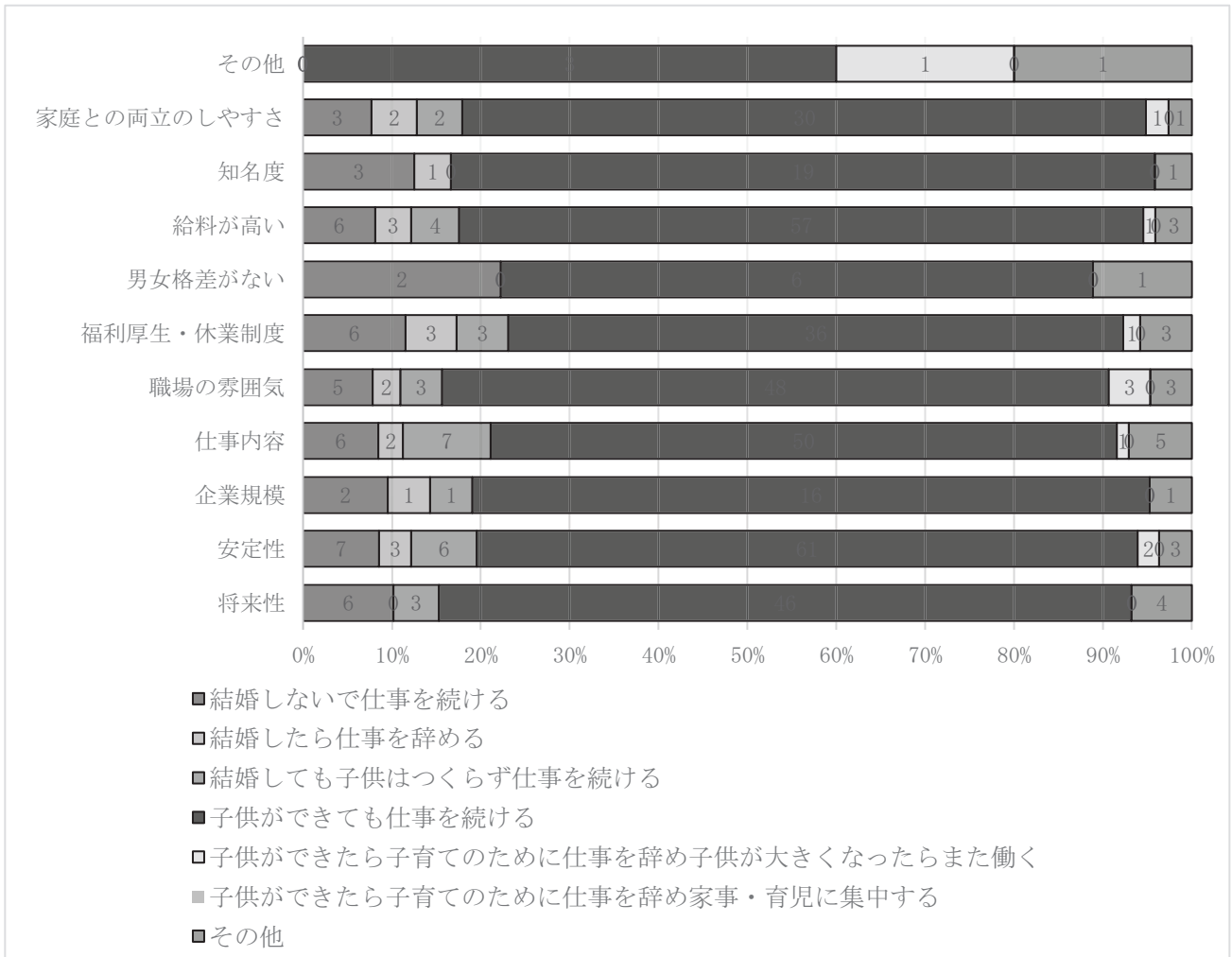
◎考察

8のすべての選択肢において問9-1で子供が出来ても仕事を続けると回答している人が一番多かつたため、結婚や出産しても仕事を続けるという人が多いという結果が出たが、問8で安定性や仕事内容、職場の雰囲気、福利厚生・休業制度を選択した人の中には、問9-1で子供が出来たら子育て



のために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働くと回答した人が一定数いたため、考察とは少し異なる結果が出た。

◎問8、問9-1のクロス集計（男性）

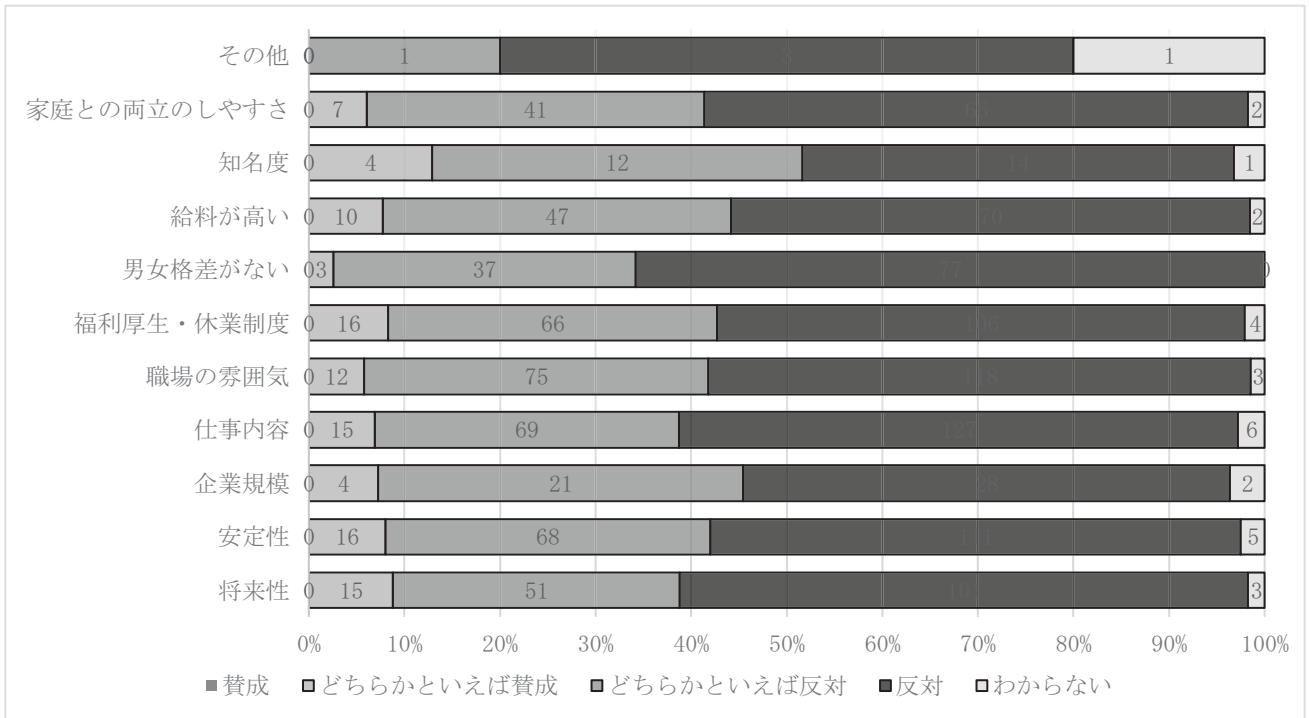


◎考察

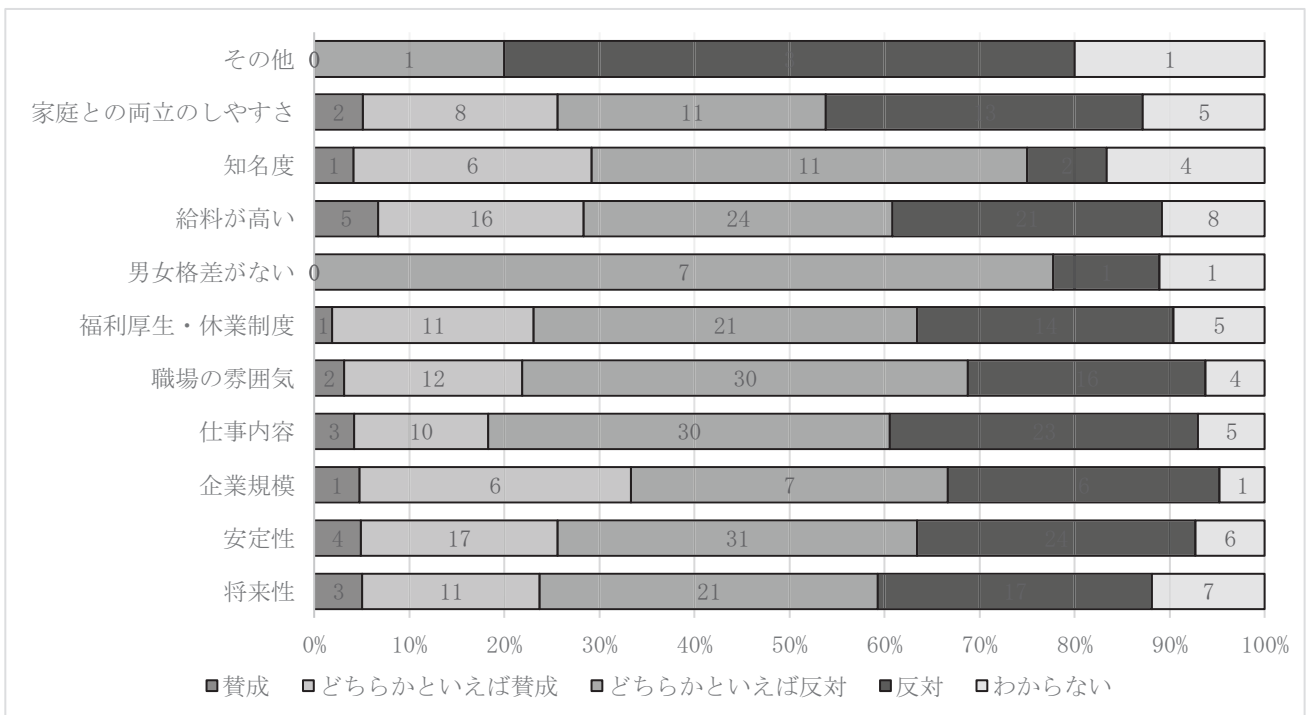
男性についても問8のすべての選択肢において問9-1で子供が出来ても仕事を続けると回答している人が一番多く、そのほかの選択肢よりも圧倒的に多いことから仕事をして家庭を支えるという考察と同じような結果が出た。

また、このような結果が出たことにより、問1『夫は外で働き、妻は家庭を守るべき』という考え方について、あなたのご意見にもっとも近いものはどれでしょうか」とクロス集計を行い、家庭についてどう考えているのかについても考えてみた。

◎問 1、問 8 のクロス集計（女性）



◎問 1、問 8 のクロス集計（男性）



◎考察

問 1 で反対、どちらかといえば反対と回答している女性は反対であるほど仕事に関する選択肢を選択しており、男性については家庭に関する選択肢を選んでいるとは言い難く、仕事に関して選択しているという結果が出た。このことから男性は性別役割分担に反対であると考えている人であっても仕事で家庭を支えていくという考えがあるのではないかと考える。

## ◎総括

男女ともに結婚や子供が生まれても仕事に就いて生活していきたいと考えている人がほとんどであった。しかし、男性は仕事をすることで家庭を支えていくという結果が出て、女性も仕事を続けるという人が多いと結果としても出たが、女性も男性も家庭との両立のしやすさを選択している人がそこまで多くなかったため家庭について男性、女性どちらが家庭について行っていくのかとても疑問に残り、今後の課題にしたい。

## ライフプラン-2 『理想の家庭生活について』

**問9 あなたが夢見る理想の家庭生活について想像し、最も当てはまると思う番号を選択し、記入してください。**

ここでは、これからのライフプランや築いていく家庭生活の理想に潜む性別役割分担意識を調査するため、将来の理想の家庭生活について、自分と将来の自分のパートナーについてそれぞれ調査する。なお、この問いは先行研究「2016年度近畿大学 大学生人権意識調査」をもとに作成したが、より正確に名市大生の理想の家庭像に映し出されるジェンダー意識を把握するため、本調査では回答を1つに絞って回答する方式に変更を加えた。

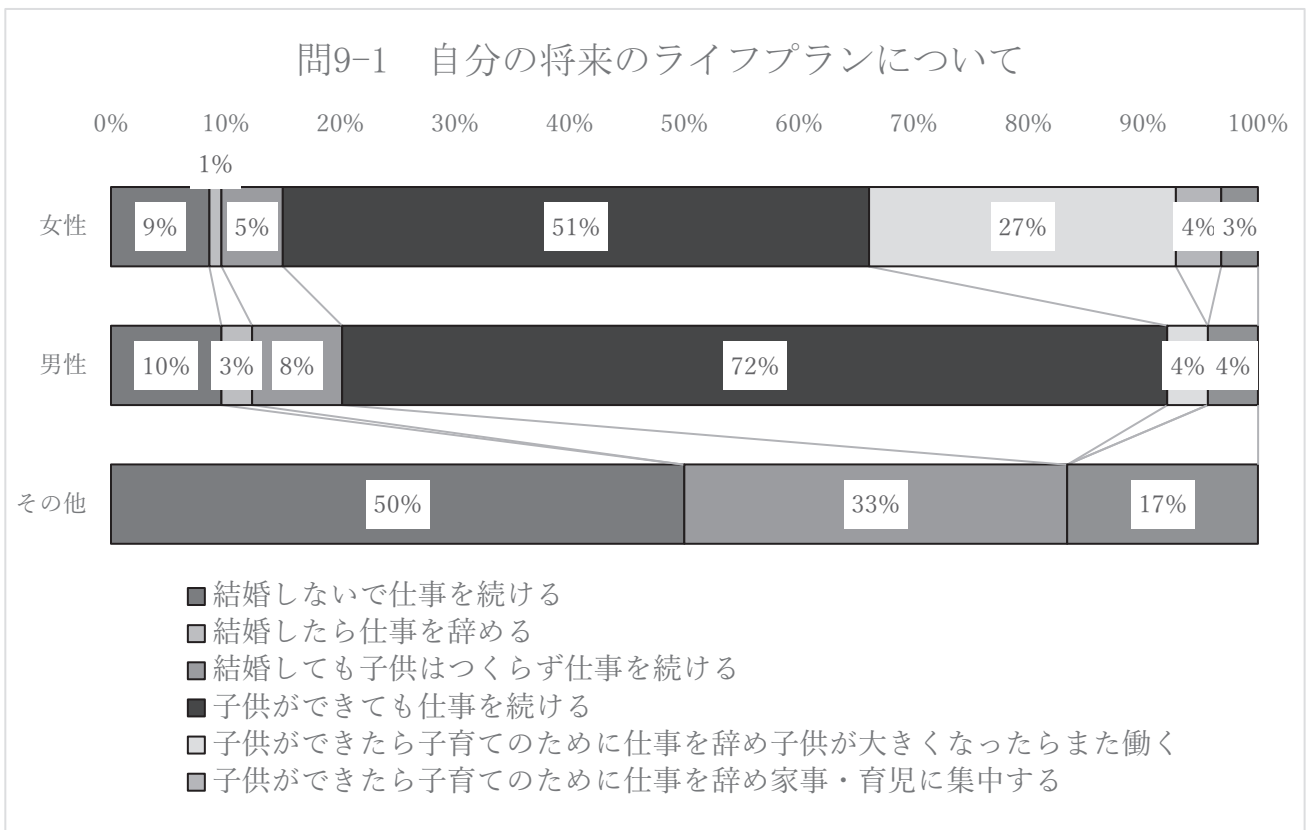
## **分析**

### ◎問9-1 分析

①自分について、「結婚しないで仕事を続ける」「結婚したら仕事を辞める」「結婚しても子供はつからず仕事を続ける」「子供ができて仕事を続ける」「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働く」「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め家事・育児に集中する」「その他」の7項目で質問した。

◎問 9-1 結果

人数	結婚しないで仕事を続ける	結婚したら仕事を辞める	結婚しても子供はつくらず仕事を続ける	子供ができてもしっかり仕事を続ける	子供ができたなら子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働く	子育てのために仕事を辞め家事・育児に集中する	子供ができたなら	その他
女性	24 9%	3 1%	15 5%	143 51%	75 27%	11 4%	9 3%	
男性	11 10%	3 3%	9 8%	82 72%	4 4%	0 0%	5 4%	
その他	3 50%	0 0%	2 33%	0 0%	0 0%	0 0%	1 17%	
全体	38 10%	6 2%	26 7%	225 56%	79 20%	11 3%	15 4%	



◎考察

まず、自分についての設問の結果は、男女ともに「子供ができてもしっかり仕事を続ける」の割合が最も高

く、特に男性ではそれが顕著に見られた。やはり「男性が家庭の経済的な柱だ」というような意識が、いまだに根強く残っている結果だと言える。次点の回答は、男性が「結婚しないで仕事を続ける」、女性が「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め、子供が大きくなったらまた働く」であった。近畿大学の調査結果と比較してみると、上位の回答はおおむね一致していたが、女性における「子供ができて仕事を続ける」と「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め、子供が大きくなったらまた働く」の順位が逆になっており、差も大きい。さらに「結婚したら仕事を辞める」と回答した女性はわずかに3名と非常に少ないことも読みとれる。ここから名市大の女性は、結婚しても専業主婦にはならず、夫だけではなく自分も社会に出て働きたいという気持ちをより強く持っているのではないかということを読みとることができた。

◎女子学生の学部別回答数

人数	結婚しないで仕事を続ける	結婚したら仕事を辞める	結婚しても子供はつくらず仕事を続ける	子供ができて仕事を続ける	子供が大きくなったらまた働く 子育てのために仕事を辞め	子育てのために仕事を辞め 家事・育児に集中する	子供ができたなら	その他
医学部	0	0	0	4	1	0	0	
薬学部	0	0	0	2	1	0	0	
看護学部	0	0	0	0	0	0	0	
総合生命理学部	2	0	0	5	2	0	0	
芸術工学部	1	0	1	3	4	1	0	
経済学部	3	0	1	19	9	2	0	
人文社会学部 心理教育学科	6	2	5	33	30	5	3	
人文社会学部 現代社会学科	8	1	5	30	10	1	1	
人文社会学部 国際文化学科	4	0	3	47	18	2	5	
その他	0	0	0	0	0	0	0	

◎考察

上の表は、女子学生の本設問の学部別での回答数をまとめたものである。特に十分な標本数が得られた人文社会学部の3つの学科を比較すると、回答数上位2つの差が、国際文化学科、現代社会学科は大きく開いているのに対し、心理教育学科は極端に小さいことがわかる。すなわち、子どもができた際に職を離れるかどうかという点について、学科間で差があるということである。この差が大学入学前から存在していて、こういった意識が志望学科に影響を及ぼした結果なのか、大学入

学後の教育や人間関係の中で生まれたものなのかは今回の調査では分かりかねるが、このような差が見られるということはとても興味深い結果であると考えます。

なお、女子学生が多い看護学部や、男子学生も多く在籍するその他理系の学部に関しては、キャンパスが離れていることや、先生方へのご依頼の都合上標本数を十分に得ることができなかったために十分な分析ができなかったため、これは今後の課題としたい。

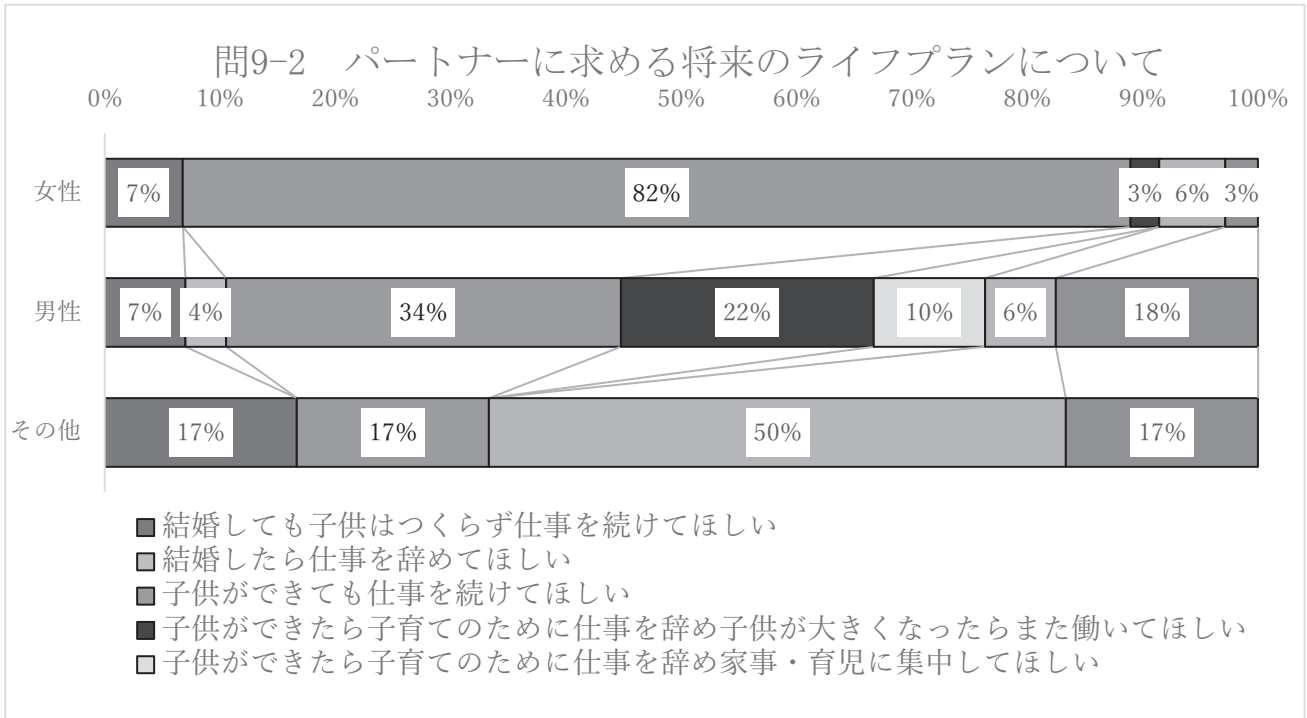
また、「その他」の自由記述の回答としては、「相手の意見も尊重して臨機応変に決める」といった旨の回答が多く、「仕事は辞めずに育児休暇を利用する」という意見や「できるなら専業主夫になりたい」という意見も見られた。

### ◎問 9-2 分析

②パートナーについて、「結婚しても子供はつくらず仕事を続けてほしい」「結婚したら仕事を辞めてほしい」「子供ができて仕事を続けてほしい」「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働いてほしい」「パートナーと暮らすことは考えていない」「その他」の7択で質問した。

### ◎問 9-2 結果

人数	結婚しても子供はつくらず仕事を続けてほしい	結婚したら仕事を辞めてほしい	子供ができて仕事を続けてほしい	子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働いてほしい	子供ができたなら家事・育児に集中してほしい	パートナーと暮らすことは考えていない	その他
女性	19 7%	0 0%	230 82%	7 3%	0 0%	16 6%	8 3%
男性	8 7%	4 4%	39 34%	25 22%	11 10%	7 6%	20 18%
その他	1 17%	0 0%	1 17%	0 0%	0 0%	3 50%	1 17%
全体	28 7%	4 1%	270 68%	32 8%	11 3%	26 7%	29 7%



◎考察

次に、パートナーについての設問の結果は、男女ともに「結婚しても仕事を続けてほしい」の回答が最も多かったが、女性ではほかの回答と大きな差があるものの、男性では「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め、子供が大きくなったらまた働いてほしい」などの他の回答と僅差であった。男性についても、パートナーの就業について寛容な意見が多く見られていることは、近年見られる女性活躍や性別役割意識反対などの風潮の影響が見られると考えられる。近畿大学の調査結果においても男性の回答数は上位の回答で分散しているが、「子供ができてても仕事を続けてほしい」と「子供ができたなら子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働いてほしい」の回答数の順位は僅差だが逆になっている。

また「その他」の回答としては、「相手の意思を尊重し、やりたいようにすればいいと思う」といった旨の回答が大半であり、伝統的な性別役割分担観にとらわれず、相手を個人として尊重する意見が多く見られた。

◎問9-1 と問9-2 とのクロス集計（男女別）

問9-1 と問9-2 の結果をクロス集計し、男女別にまとめたものが以下である。

男性

人数	結婚しても子供はつくり 仕事を続けてほしい	結婚したら仕事を辞めて ほしい	子供ができて も仕事を続けてほしい	子育てのために仕事を辞め 子供が大きくなったら また働いてほしい	子供ができた ら 家事・育児に集中してほしい	子供ができた ら 子育てのために仕事を辞め 家事・育児に集中してほしい	パートナーと暮らすことは 考えていない	その他
結婚しないで仕事を続ける	2	0	2	1	1	4	1	
結婚したら仕事を辞める	0	0	2	1	0	0	0	
結婚しても子供はつくり 仕事を続ける	4	0	1	1	2	0	1	
子供ができて も仕事を続ける	2	4	31	19	8	3	15	
子供ができた ら 子育てのために仕事を辞め 子供が大きくなったら また働く	0	0	1	3	0	0	0	
子供ができた ら 子育てのために仕事を辞め 家事・育児に集中する	0	0	0	0	0	0	0	
その他	0	0	2	0	0	0	3	



女性

人数	結婚しても子供はつくり 仕事を続けてほしい	結婚したら仕事を辞めてほ しい	子供ができてても仕事を続 けてほしい	子育てのために仕事を辞め 子供が大きくなったら また働いてほしい	子供ができた ら 家事・育児に集中してほ しい	子供ができた ら 子育てのために仕事を辞め たい	パートナーと暮らすこと は 考えていない	その他
結婚しないで仕事を続ける	1	0	6	0	0	16	1	
結婚したら仕事を辞める	1	0	2	0	0	0	0	
結婚しても子供はつくり 仕事を続ける	14	0	1	0	0	0	0	
子供ができてても仕事を続 ける	0	0	139	2	0	0	2	
子供ができた ら 子育てのために仕事を辞め 子供が大きくなったらまた働 く	1	0	68	5	0	0	1	
子供ができた ら 子育てのために仕事を辞め 家事・育児に集中する	1	0	10	0	0	0	0	
その他	1	0	4	0	0	0	4	

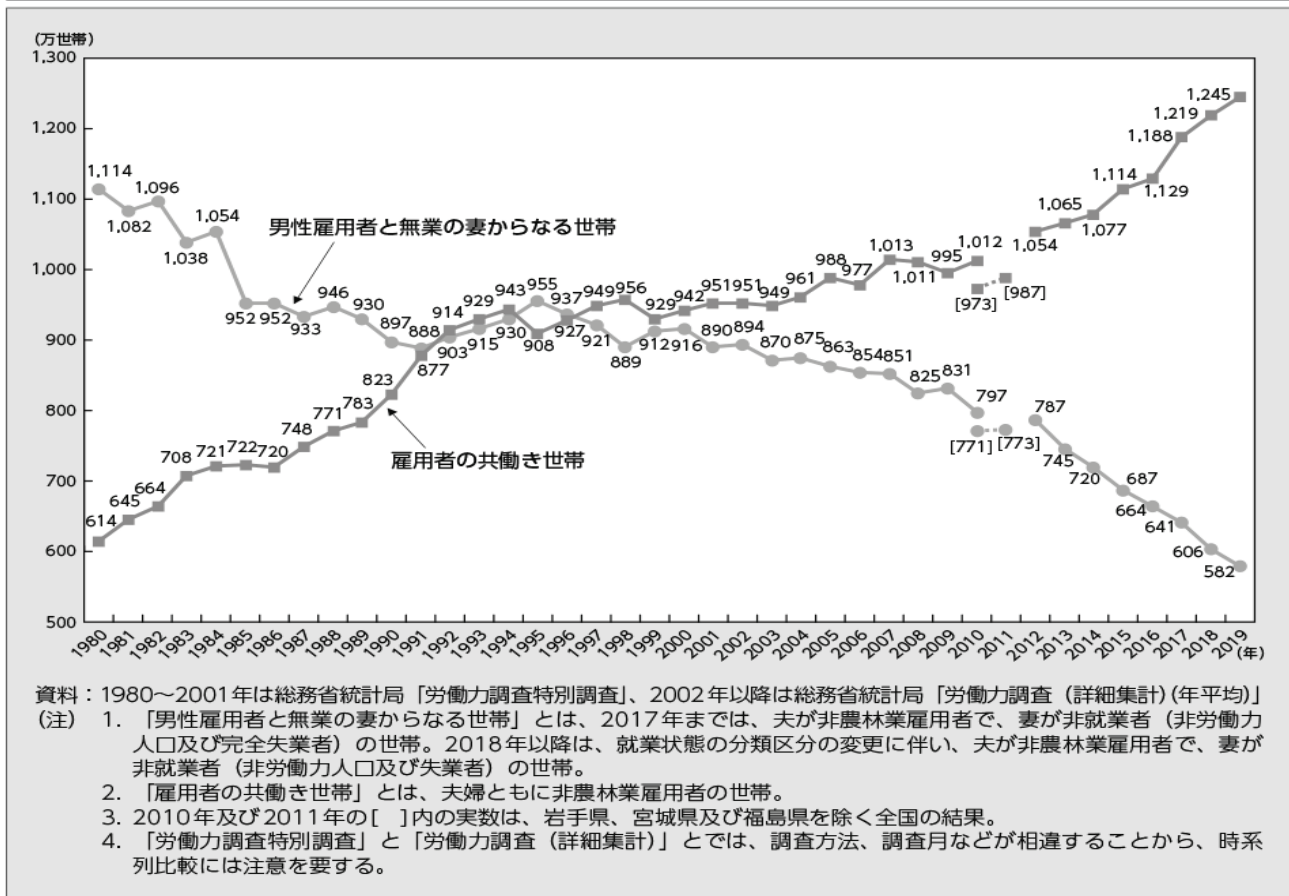
◎考察

男女ともに特筆したいのは、問 9-1 で「子供ができてても仕事を続ける」と回答した人のうち、問 9-2 での「子供ができてても仕事を続けてほしい」との回答が最も多くなっているということである。特に女性では、143 人中 139 人がこのように回答しており、パートナーも自分も、子どもができてても仕事を続ける共働きへの意識が強いことが分かった。この要因はいくつか考えることができる。1つは性別役割分担にとらわれない考え方が、特に女性を中心に浸透してきているということであるが、他にも次項の「令和 2 年度版厚生労働白書」の「共働き等世帯数の年次推移」<sup>4</sup>を見てもわかる通り、日本全体での共働き世帯数の増加によって共働きが専業主婦に代わる形で一般的なものとなってきたと捉えることもできるほか、子どもを育てていくうえでの経済的な負担を考えての回答と見ることできる。要因の明確な解明については今後の課題としていきたいが、いずれにせよ、問 10 や 11 の結果を見てもわかるように、理想のライフプランにおける「女性も男性も仕事と家事とを両

<sup>4</sup> 厚生労働省、「令和 2 年版 厚生労働白書－令和時代の社会保障と働き方を考える－  
<https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/02-01-01-03.html>

立する」という選択肢が広く一般的に浸透しつつあるということが言えるのではないだろうか。

図表 1-1-3 共働き等世帯数の年次推移



ライフプラン-3 『パートナーとの家事分担について』

問 10 あなたが将来パートナーと暮らすとしたら、家事はどのように分担しようと思いますか。【当てはまる番号1つだけ記入】

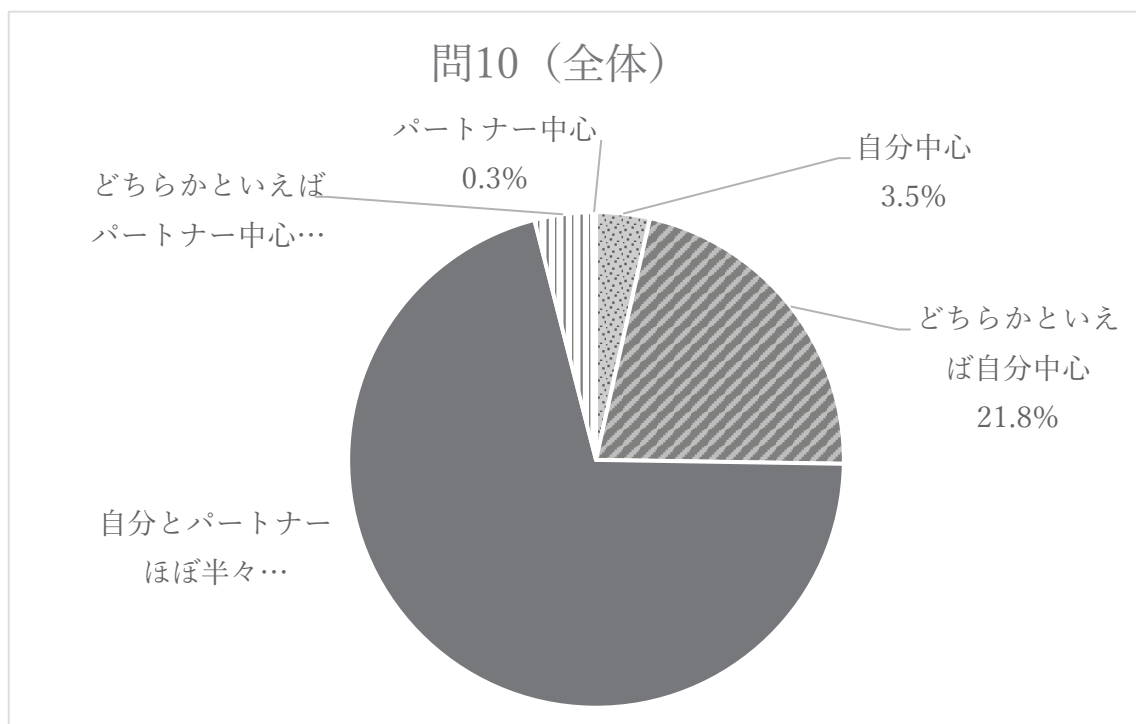
ここでは、将来パートナーと暮らすと仮定したときの家事分担について、性別の違いや自身が置かれていた家庭環境、自身の将来の理想の働き方によって考えに違いが生じるのか調査する。

分析

パートナーとの家事分担について、「自分中心」「どちらかといえば自分中心」「自分とパートナーほぼ半々」「どちらかといえばパートナー中心」「パートナー中心」の5択で質問した。

◎問 10 全体の結果

	自分中心	どちらかといえば自分中心	自分とパートナーほぼ半々	どちらかといえばパートナー中心	パートナー中心
全体	14 (3.5%)	87 (21.8%)	283 (70.8%)	15 (3.8%)	1 (0.3%)



全体の約7割が「自分とパートナーほぼ半々」と回答している。このことから、多くの人従来のような「家事＝女性の役割」という意識ではなく、性別と家事を分離して考えているといえる。

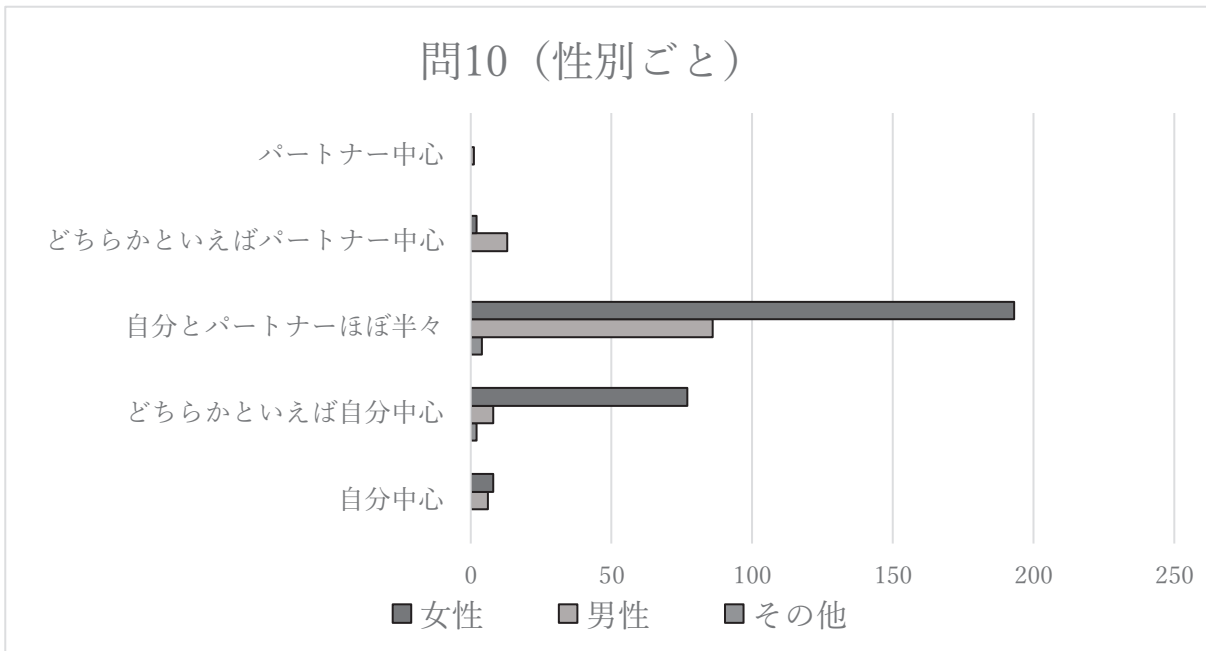
しかし、次に多い回答である「どちらかといえば自分中心」に関しては2割以上の人を選択しており、他の回答も少数ではあるが選択している人が見られる。これらが選択された要因として考えられるのは、

- ・問1 性別役割分担への意識
- ・問11 家庭と仕事の割合
- ・問14 家庭内での家事負担者

の3つであり、クロス集計により相関を明らかにしていこうと思う。

◎問 10 性別ごとの結果

	自分中心	どちらかとい えば自分中心	自分とパートナ ーほぼ半々	どちらかといえ ばパートナー中心	パートナ ー中心
女性	8	77	193	2	0
男性	6	8	86	13	1
その他	0	2	4	0	0



◎考察

「パートナー中心」「どちらかといえばパートナー中心」を選択した人数と「自分中心」「どちらかといえば自分中心」を選択した人数について、男性では両者の数に差はない。

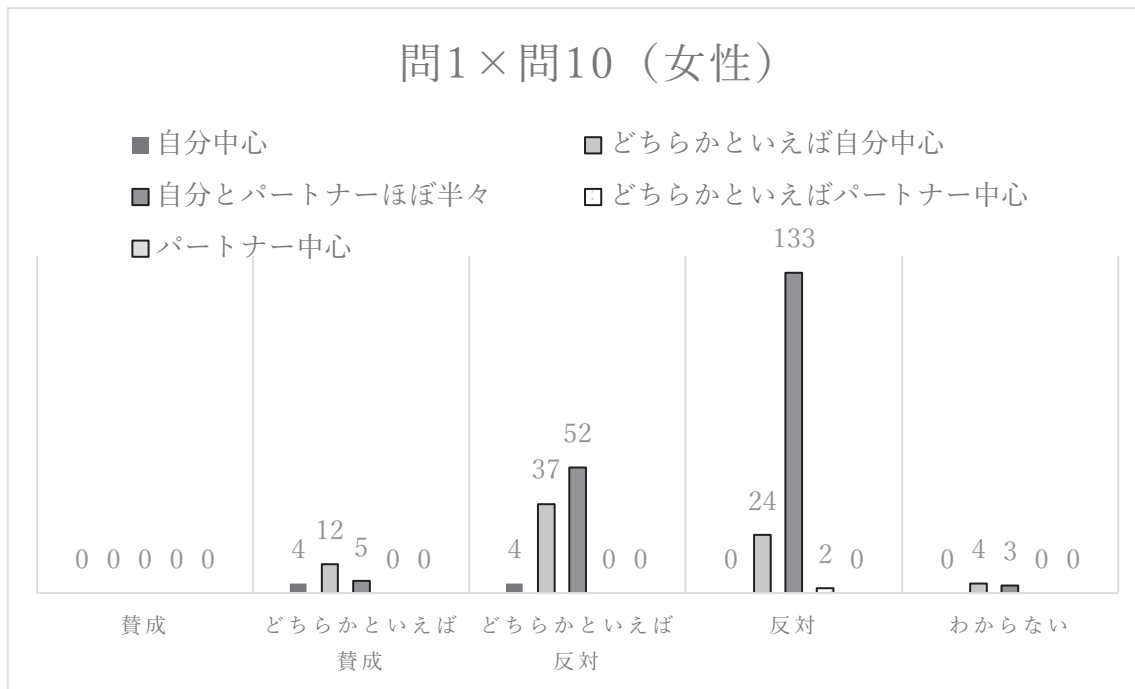
しかし、女性では「自分中心」「どちらかといえば自分中心」という自分中心寄り回答を選択した人が、圧倒的に多くなっている。ここから、女性に、「家事＝女性の役割」という意識が残っている可能性が考えられる。

この仮説については、問 1 の性別役割分担意識のデータとクロス集計を行って明らかにする。

◎問 1 と問 10 のクロス集計

女性

問 10 \ 問 1	賛成	どちらか といえ ば 賛成	どちらか といえ ば 反対	反対	わからない
自分中心	0	4	4	0	0
どちらかといえ ば自分中心	0	12	37	24	4
自分とパートナ ーほぼ半々	0	5	52	133	3
どちらかといえ ばパートナー中心	0	0	0	2	0
パートナー中心	0	0	0	0	0



※問10単独の分析で差が出た女性の回答のみをクロス集計している。

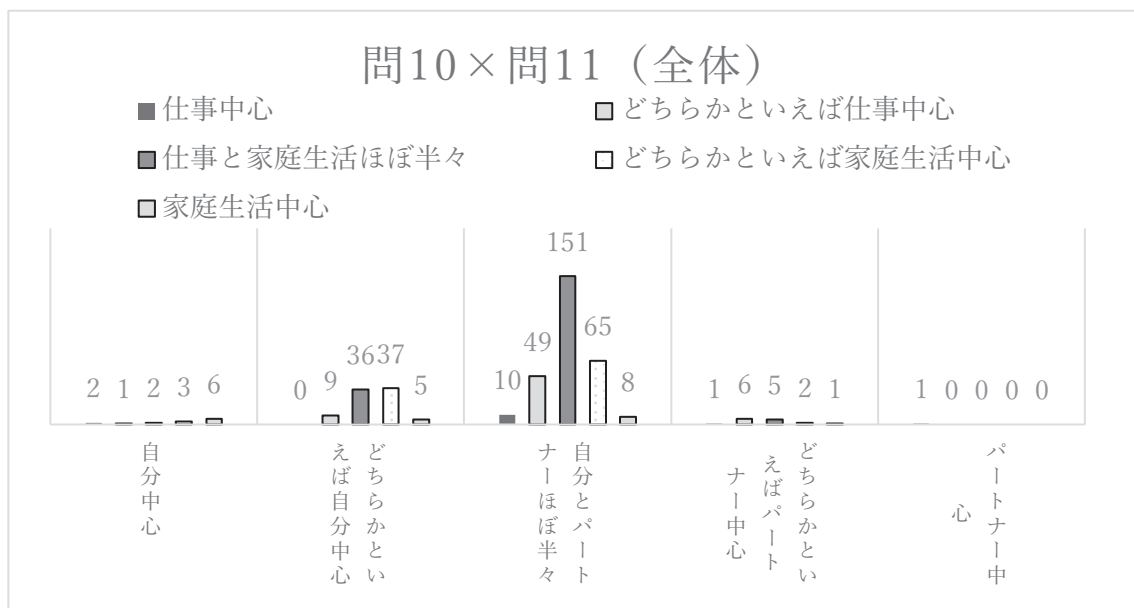
#### ◎考察

性別役割分担について「どちらかといえば反対」「反対」を選択した人で家事負担割合を「どちらかといえば自分中心」「自分中心」と回答した人が、性別役割分担に「どちらかといえば賛成」で家事負担について「どちらかといえば自分中心」「自分中心」と回答した人よりも多くなっている。このことから、自分の適性や好み等から自分中心を選択する人が多くを占め、性別役割分担意識はある程度薄れている可能性が考えられる。

#### ◎問10と問11のクロス集計

全体

問10 \ 問11	自分中心	どちらかといえば自分中心	自分とパートナーほぼ半々	どちらかといえばパートナー中心	パートナー中心
仕事中心	2	0	10	1	1
どちらかといえば仕事中心	1	9	49	6	0
仕事と家庭生活ほぼ半々	2	36	151	5	0
どちらかといえば家庭生活中心	3	37	65	2	0
家庭生活中心	6	5	8	1	0



◎考察

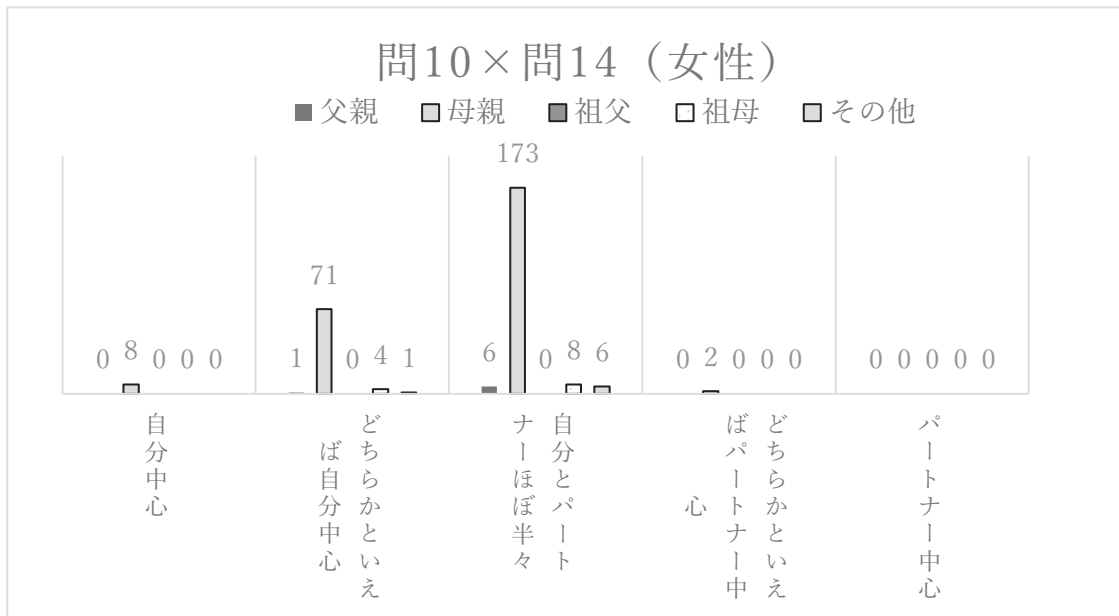
問10について「自分中心」「どちらかといえば自分中心」を選択した人は、比較的問11で「どちらかといえば家庭生活中心」「家庭生活中心」を選択する傾向にある。反対に問10で「どちらかといえばパートナー中心」と回答した人は、若干ではあるが「仕事中心」「どちらかといえば仕事中心」を選択する傾向にある。

ここから、家庭生活というものを家事に結び付けて、選択を行っていることがわかる。

◎問10と問14のクロス集計

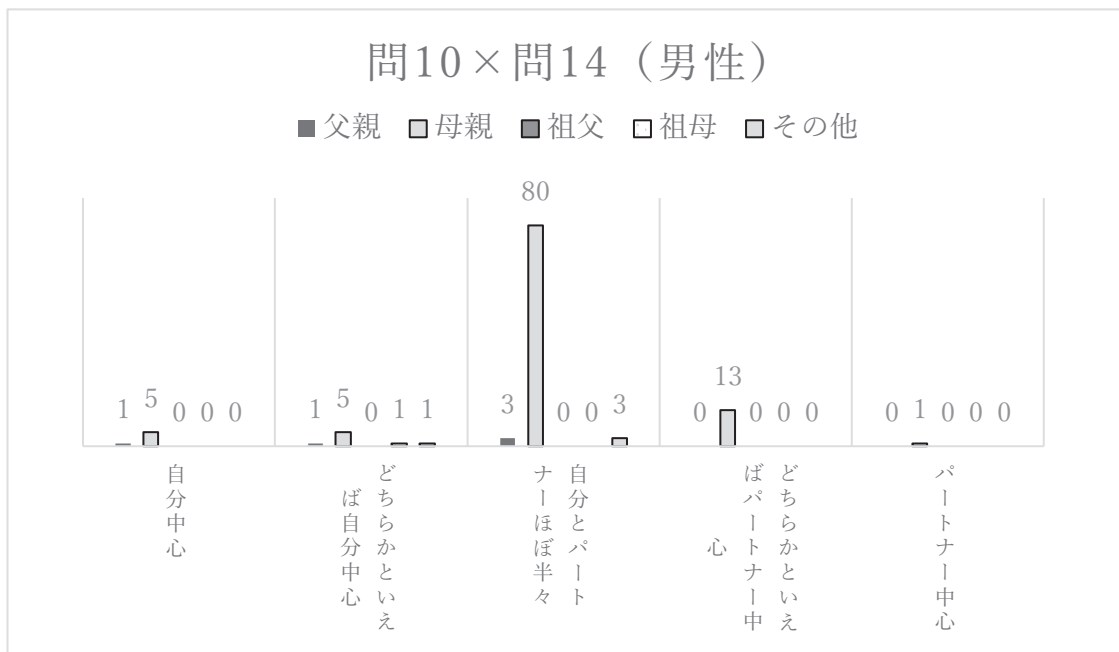
女性

問10 \ 問14	自分中心	どちらかといえば自分中心	自分とパートナーほぼ半々	どちらかといえばパートナー中心	パートナー中心
父親	0	1	6	0	0
母親	8	71	173	2	0
祖父	0	0	0	0	0
祖母	0	4	8	0	0
その他	0	1	6	0	0



男性

問10 問14	自分中心	どちらかといえ ば自分中心	自分とパートナー ほぼ半々	どちらかといえ ばパートナー中心	パートナー 中心
父親	1	1	3	0	0
母親	5	5	80	13	1
祖父	0	0	0	0	0
祖母	0	1	0	0	0
その他	0	1	3	0	0



◎考察

男性、女性ともに問 14 の回答は圧倒的に「母親」である。そして、「母親」と回答した人の中では問 10 の家事負担について、「自分とパートナーほぼ半々」と答える人が多くなっている。ここからは、多くの人が両親の家事をこなす割合にはそれほど影響されず、将来像を描いているといえる。

しかし、問 14 で「母親」を選択した人のうち、二番目に多い回答として、男性は「どちらかといえばパートナー中心」である。その一方で、女性では「どちらかといえば自分中心」となっている。このことから、一定の人には、それぞれの親の家事負担割合が将来のライフプランに影響を与えている可能性が考えられる。

ライフプラン-4 『ワーク・ライフ・バランスについて』

**問 11 将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くかについて、あなたの理想について最も当てはまると思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号1つだけ記入】**

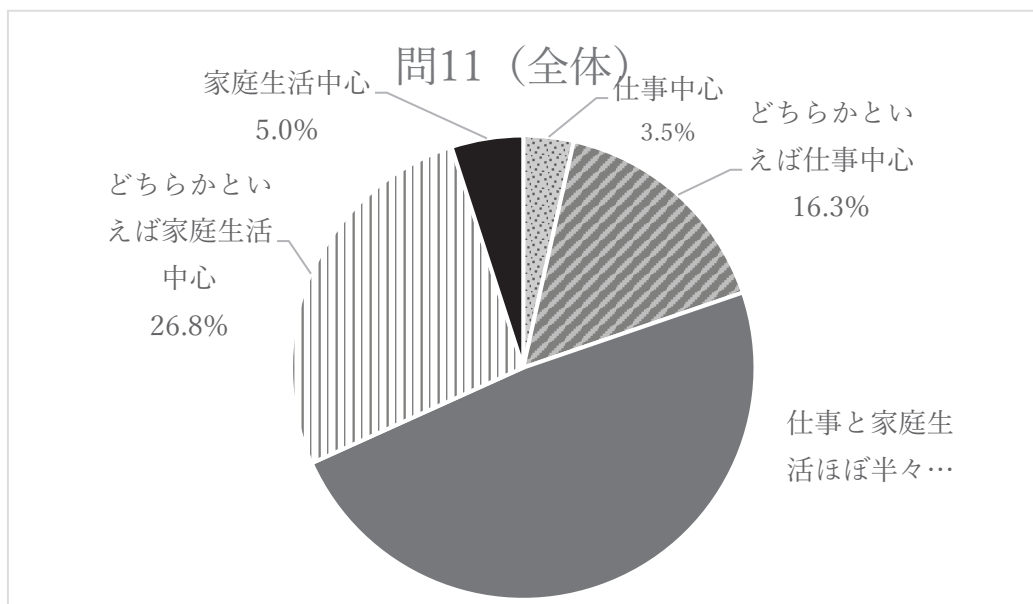
この質問についても、性別による理想の違いがあるのか、また性別役割分担意識との関連性などについても調査を行う。なお、この質問は先行研究「男女平等参画に関する大学生の意識調査（名古屋市男女平等参画推進会議実施）」の同内容の質問（問6 将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くかについて、あなたの理想についてもっともあてはまると思う番号に○をつけてください。）と比較を行い、名市大生に特有の傾向があるのかも調査を行う。

**分析**

仕事と家庭生活どちらに重点を置くかについて、「仕事中心」「どちらかといえば仕事中心」「仕事と家庭生活ほぼ半々」「どちらかといえば家庭生活中心」「家庭生活中心」の5択で質問した。

◎問 11 全体の結果

	仕事中心	どちらかといえ ば仕事中心	仕事と家庭生活 ほぼ半々	どちらかといえ ば家庭生活中心	家庭生活 中心
全体	14(3.5%)	65 (16.3%)	194 (48.5%)	107 (26.8%)	20 (5.0%)





◎考察

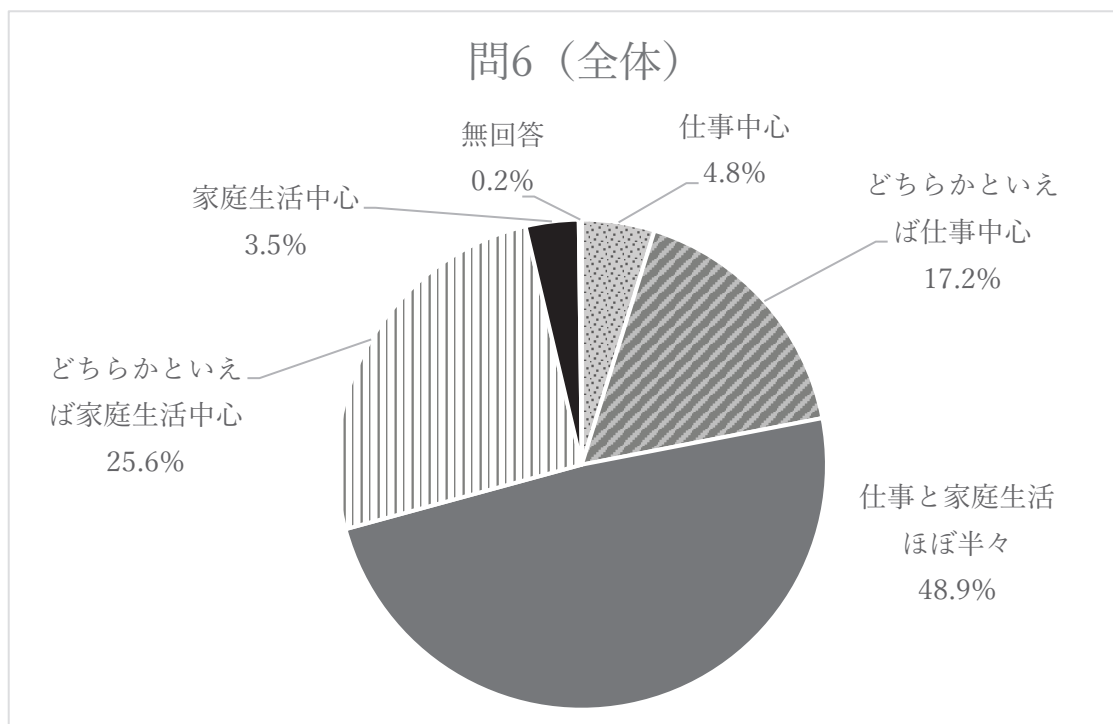
全体の約半数が仕事と家庭生活ほぼ半々を選択していることから、仕事と私生活両方の充実を求めている人が多いことがわかる。

ここで、先行研究として挙げた名古屋市実施の調査のうち、同内容の質問の全体の結果と比較する。次のページに掲載しているのが、名古屋市実施の調査データである。

なお、名古屋市のデータと比較するにあたって、今回の調査結果を名古屋市の調査回答者の男女比（女性：男性＝1.976190476：1）となるよう処理し、名古屋市の調査同様、性別をその他と回答した人については今回データに含めていない（名古屋市のデータの下に記載したグラフを参照）。

・『男女平等参画に関する大学生の意識調査』（名古屋市男女平等参画推進会議実施）より  
 問6 将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くかについて、あなたの理想についてもっともあてはまると思う番号に○をつけてください。（女性：1328人 男性：672人）

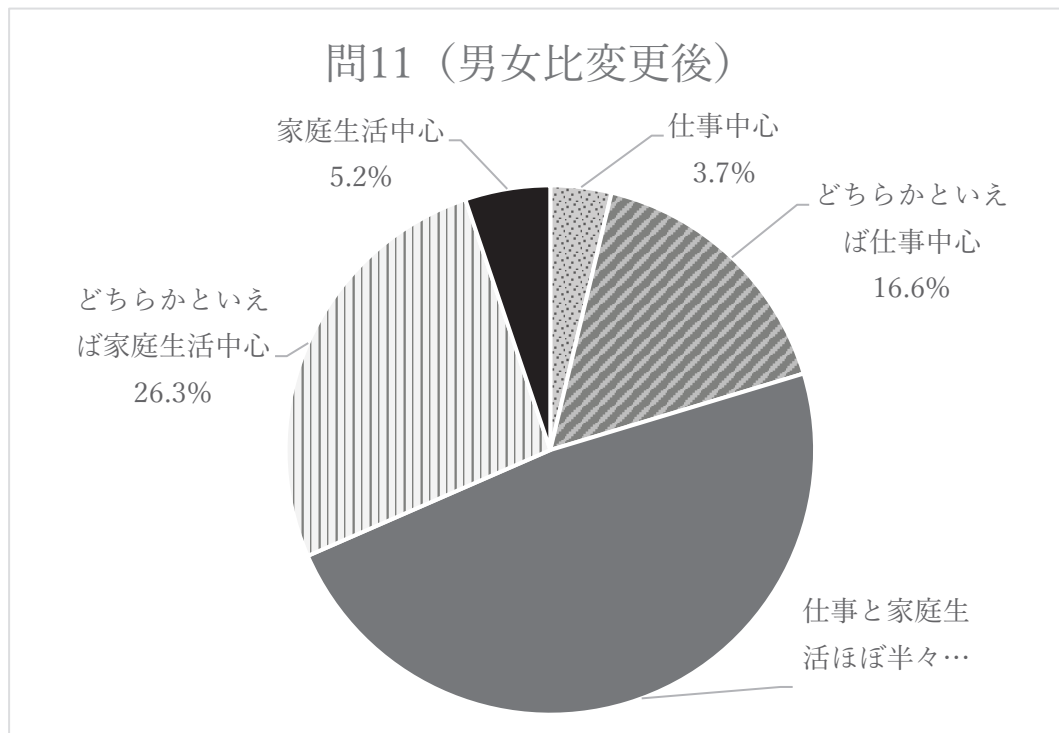
	仕事中心	どちらかといえば仕事中心	仕事と家庭生活ほぼ半々	どちらかといえば家庭生活中心	家庭生活中心	無回答
全体	4.8%	17.2%	48.9%	25.6%	3.5%	0.2%



名古屋市実施の調査より（全体の回答割合）

問11 将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くかについて、あなたの理想を教えてください。

【当てはまる選択肢を一つだけ選択】（今回のデータの男女比変更後）



◎考察

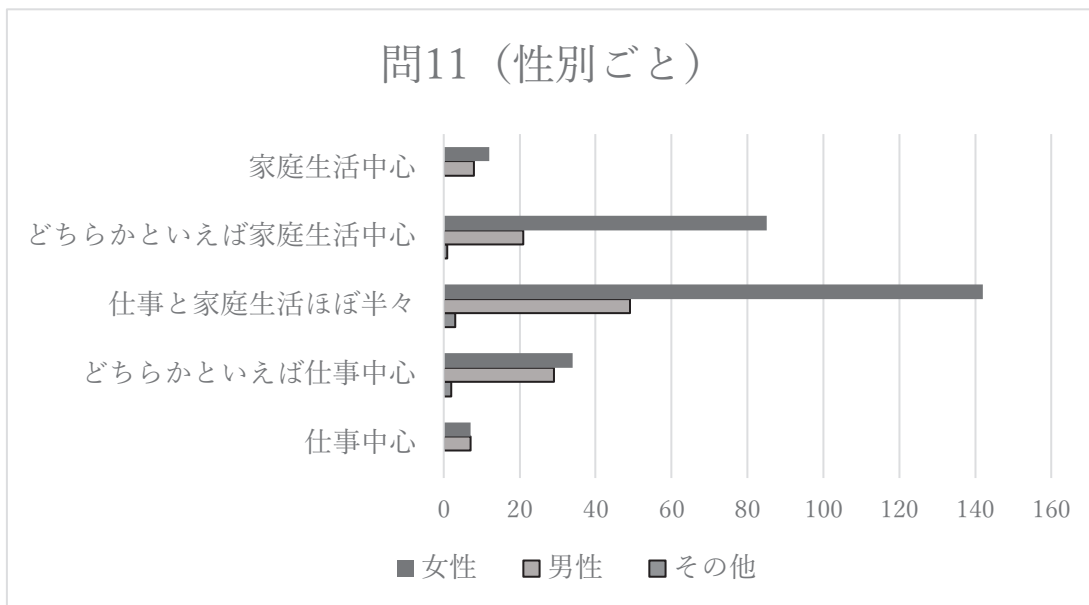
まず最も多くを占める「仕事と家庭生活ほぼ半々」という回答の割合については、名古屋市の方の方が0.8%高いものの、それほど大きな差は見られない。

しかし、そのほかの選択肢に関して比較すると、我々が実施した調査では名古屋市の調査よりも「家庭生活中心」「どちらかといえば家庭生活中心」と回答する割合が2.4%も高く、「仕事中心」「どちらかといえば仕事中心」と回答する割合は1.7%低くなっている。

このことから、名古屋市立大学の学生は、仕事と家庭生活の両立を理想とする人が多い一方で、名古屋市内の大学生よりも家庭生活を重視する傾向にあるということが推定できる。

◎問 11 性別ごとの結果

	仕事中心	どちらかといえば 仕事中心	仕事と家庭生活 ほぼ半々	どちらかといえば 家庭生活中心	家庭生活 中心
女性	7 (2.5%)	34 (12.1%)	142 (50.7%)	85 (30.4%)	12 (4.3%)
男性	7 (6.1%)	29 (25.4%)	49 (43.0%)	21 (18.4%)	8 (7.0%)
その他	0	2	3	1	0



#### ◎考察

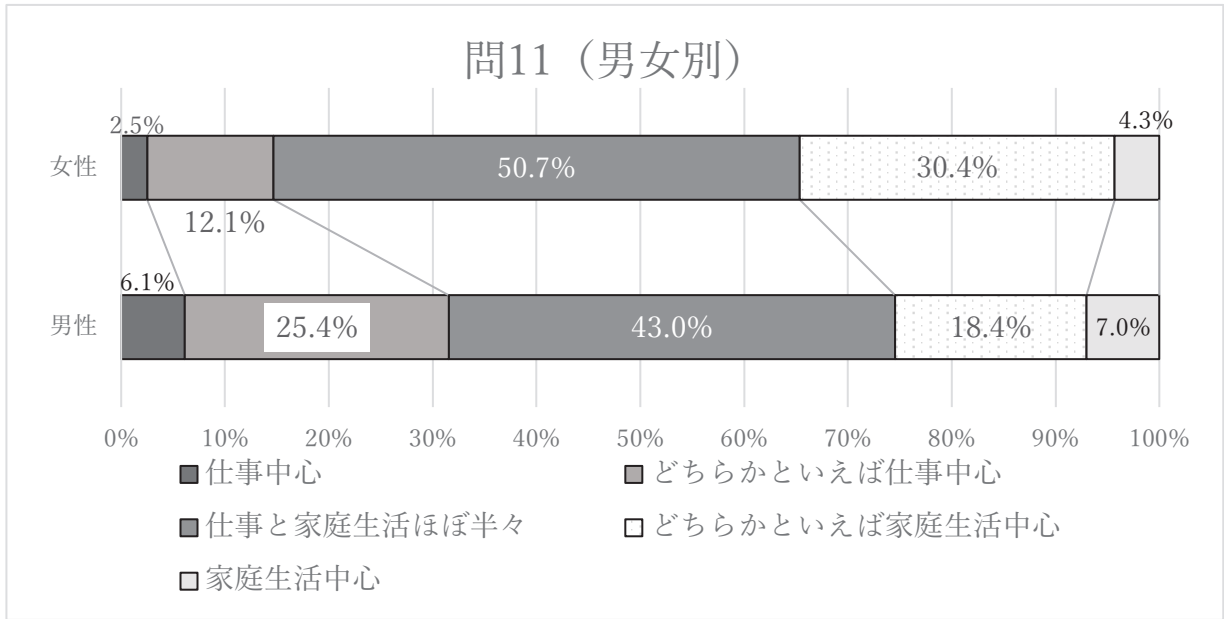
「家庭生活中心」「どちらかといえば家庭生活中心」を選択した人数と「仕事中心」「どちらかといえば仕事中心」を選択した人数について、男性では、後者二つの回答者の合計が、前者二つの回答者の合計よりも多くなっている。つまり、若干であるが仕事寄りの回答をしており、外に出て働くのは自分であるという意識が多少影響を及ぼしている可能性が考えられる。

一方女性では、家庭生活寄りの回答が、仕事寄りの回答の2倍以上になっており、やや強く家庭での役割を重視する傾向にあるといえる。ここから、「男性は仕事、女性は家庭」という意識が名古屋市立大学の学生にも見られるのではないかと推察される。

これについても、問1の性別役割分担に関する意識のデータとクロス集計を行うこととする。

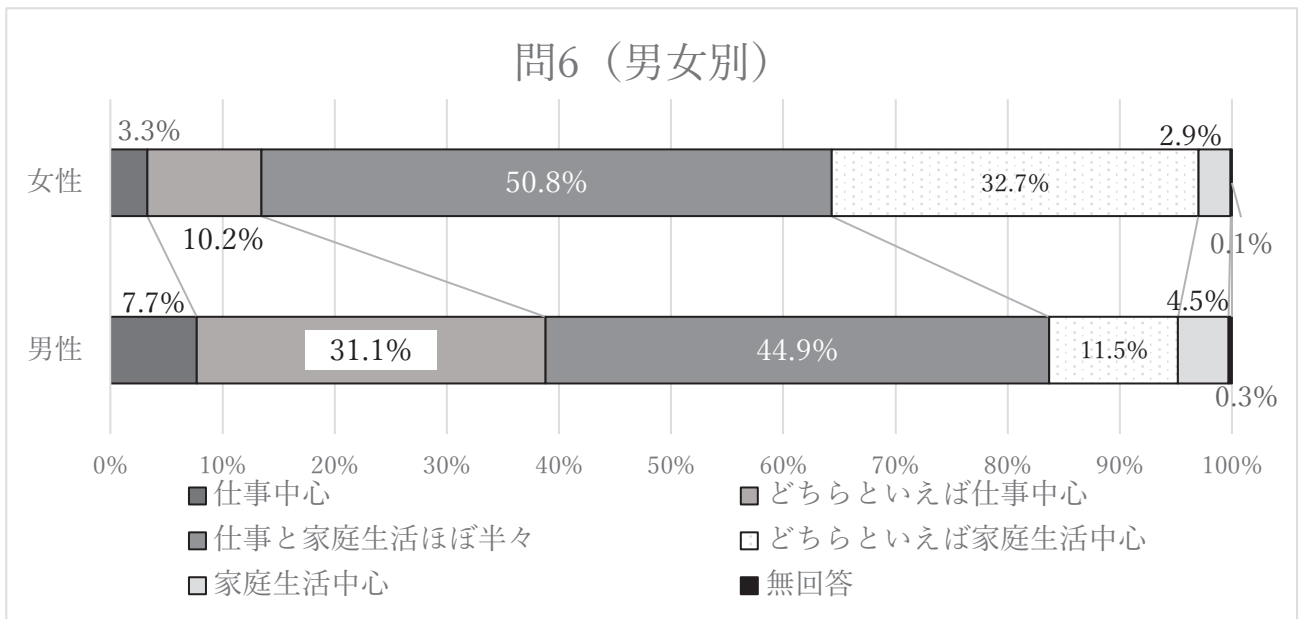
次に問11の全体の分析と同様に、男女別の割合についても名古屋市の調査と比較する。

◎問 11 男女ごとの割合



・『男女平等参画に関する大学生の意識調査』（名古屋市男女平等参画推進会議実施）より  
 問 6 将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くかについて、あなたの理想についてもっともあてはまると思う番号に○をつけてください。（女性：1328人 男性：672人）

	仕事中心	どちらかといえば仕事中心	仕事と家庭生活ほぼ半々	どちらかといえば家庭生活中心	家庭生活中心	無回答
女性	3.3%	10.2%	50.8%	32.7%	2.9%	0.1%
男性	7.7%	31.1%	44.9%	11.5%	4.5%	0.3%



◎考察

「仕事と家庭生活ほぼ半々」を選択した割合について、女性ではほとんど差が見られず、男性は

名古屋市の調査よりも 1.9%低くなっている。

ここから、本学の男性で仕事または家庭生活のどちらかに比重を置いた生活を求めている割合が若干高いといえ、従来の性別役割分担の意識に関係する可能性もあるのではないかと考えた。

しかしその内容に注目していくと、名古屋市では「家庭生活中心」「どちらかといえば家庭生活中心」を選択した割合と「仕事中心」「どちらかといえば仕事中心」を選択した割合の間に、22.8%の開きがあり、仕事中心の回答が高くなっている一方で、本調査データでは、仕事中心の回答率が高いという点は変わらないものの、両者の数値の開きが 6.1%と明らかに名古屋市の結果よりも差が縮まっている。このことから、性別役割分担意識が薄れ、より多様なライフプランを選択することができつつあると考えられる。

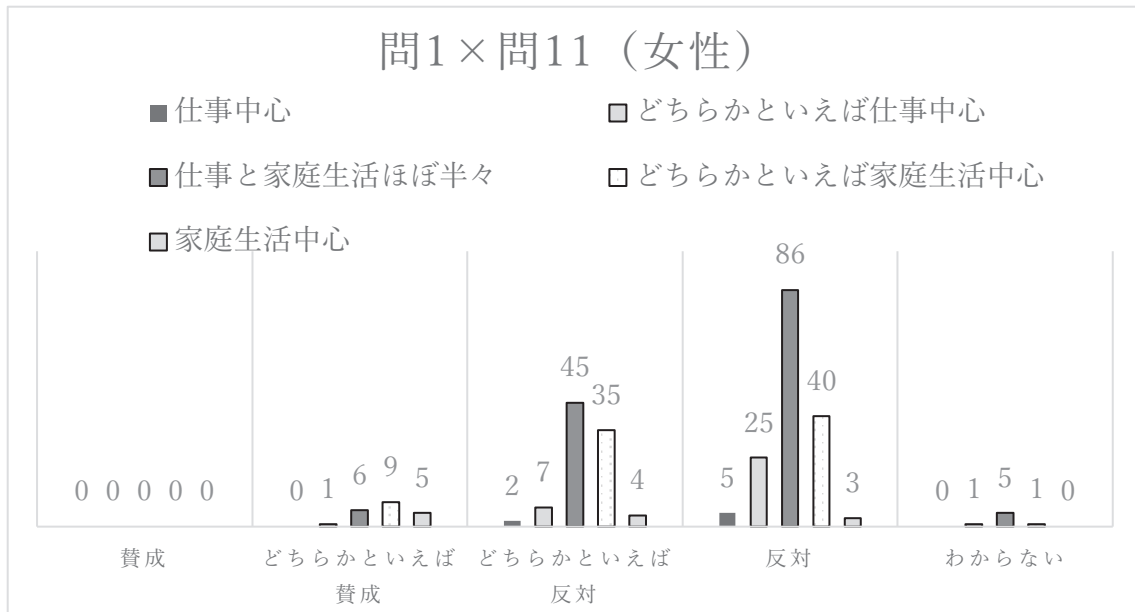
女性については、「家庭生活中心」「どちらかといえば家庭生活中心」を選択した割合と「仕事中心」「どちらかといえば仕事中心」を選択した割合の差が、名古屋市では 22.1%、本調査では 20.1%とのデータでは若干縮まっているものの、それほど大きな開きは見られず、依然として家庭生活に寄った回答が多くなっている。ここから、女性では、従来の「男性は仕事、女性は家庭」という意識に影響を受けたライフプランを選択している可能性が考えられる。

そのため、問 1 の性別役割分担に関する意識とのクロス集計によって明らかにする必要がある。

◎問 1 と問 11 のクロス集計

女性

問 11 \ 問 1	賛成	どちらか といえば 賛成	どちらか といえば 反対	反対	わからない
仕事中心	0	0	2	5	0
どちらかといえば仕事中心	0	1	7	25	1
仕事と家庭生活ほぼ半々	0	6	45	86	5
どちらかといえば家庭生活中心	0	9	35	40	1
家庭生活中心	0	5	4	3	0



#### ◎考察

問1について、「どちらかといえば反対」「反対」「わからない」と回答した人のうち、問11で最も多く回答されたのは「仕事と家庭生活ほぼ半々」であった。

それに対し、問1に「どちらかといえば賛成」と回答した人については、問11で「どちらかといえば家庭生活中心」を選択する人が最も多くなっている。そして、「どちらかといえば家庭生活中心」「家庭生活中心」という家庭生活寄りの回答の方が「どちらかといえば仕事中心」「仕事中心」という仕事寄りの回答よりも選択される傾向にあることがわかる。

ここから、これまでに獲得された性別役割分担意識がライフプランへ若干の影響を及ぼしている可能性が指摘できる。

男性の結果については優位な差が見られなかったため省略する。

#### ライフプラン-5 『育児休業について』

#### 問12 あなたは将来育児休業（産前産後休業ではない）を取得したいと思いますか。【あてはまる番号1つだけ記入】

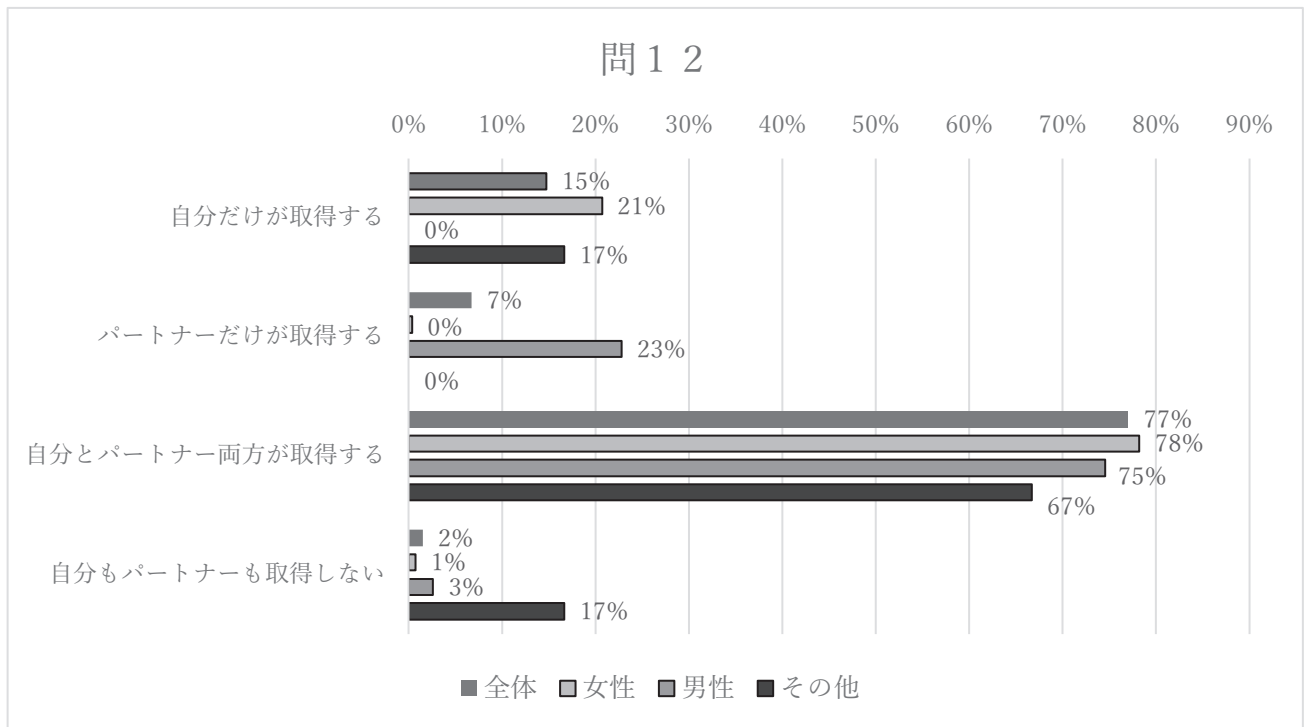
ここでは、現実では女性が取得することがほとんどである育児休業制度について、名市大の学生が、将来子供ができたときに育児休業を取得したいかについて、その理想に性別による違いがあるのか、また問1において薄れてきたとされる、伝統的な性別役割分担との関連から、育児休業についても伝統的な価値観（女性が取るべきもの）が薄れてきているのかについても調査を行う。

#### 分析

育児休業の取得について、「自分だけがとる」「パートナーだけがとる」「自分とパートナーの両方がとる」「自分とパートナー両方がとらない」の4択で質問した。

◎考察

	自分だけが取得する	パートナーだけが取得する	自分とパートナー両方が取得する	自分もパートナーも取得しない
全体	59	27	308	6
女性	58	1	219	2
男性	0	26	85	3
その他	1	0	4	1
その他	1	0	4	1

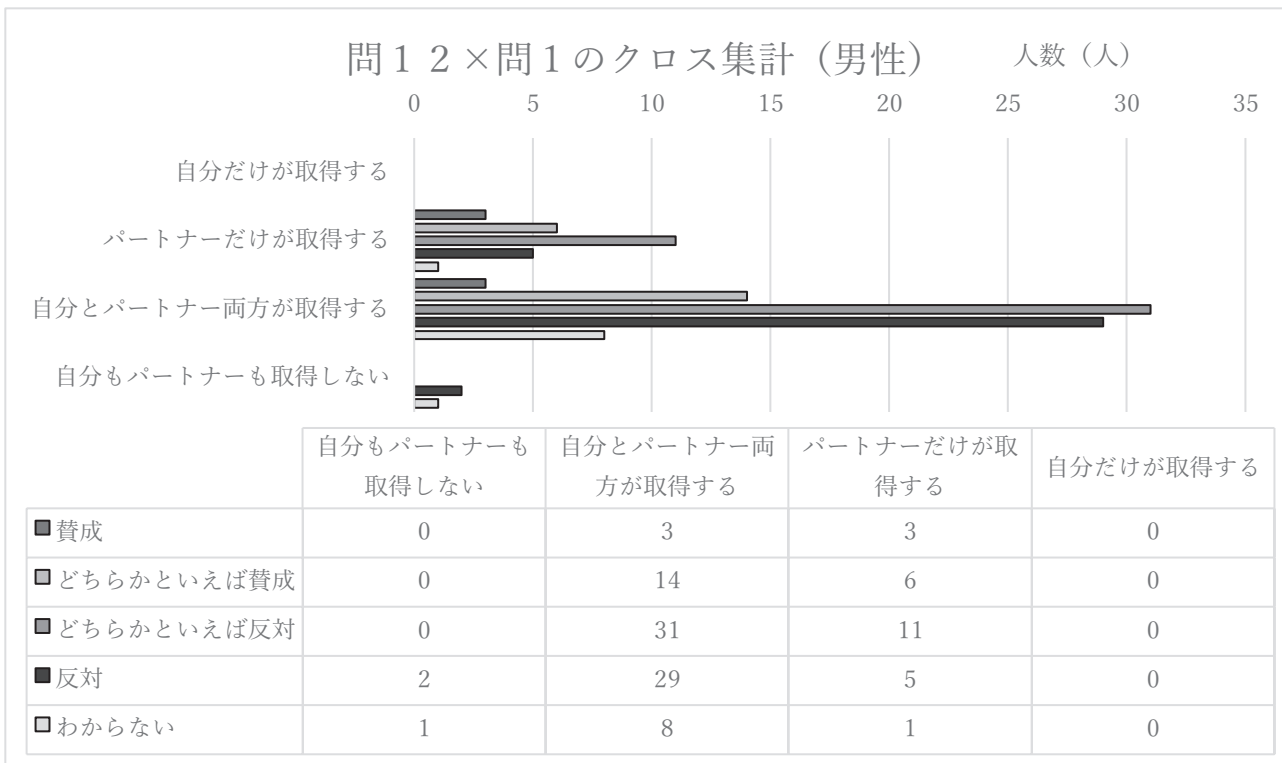
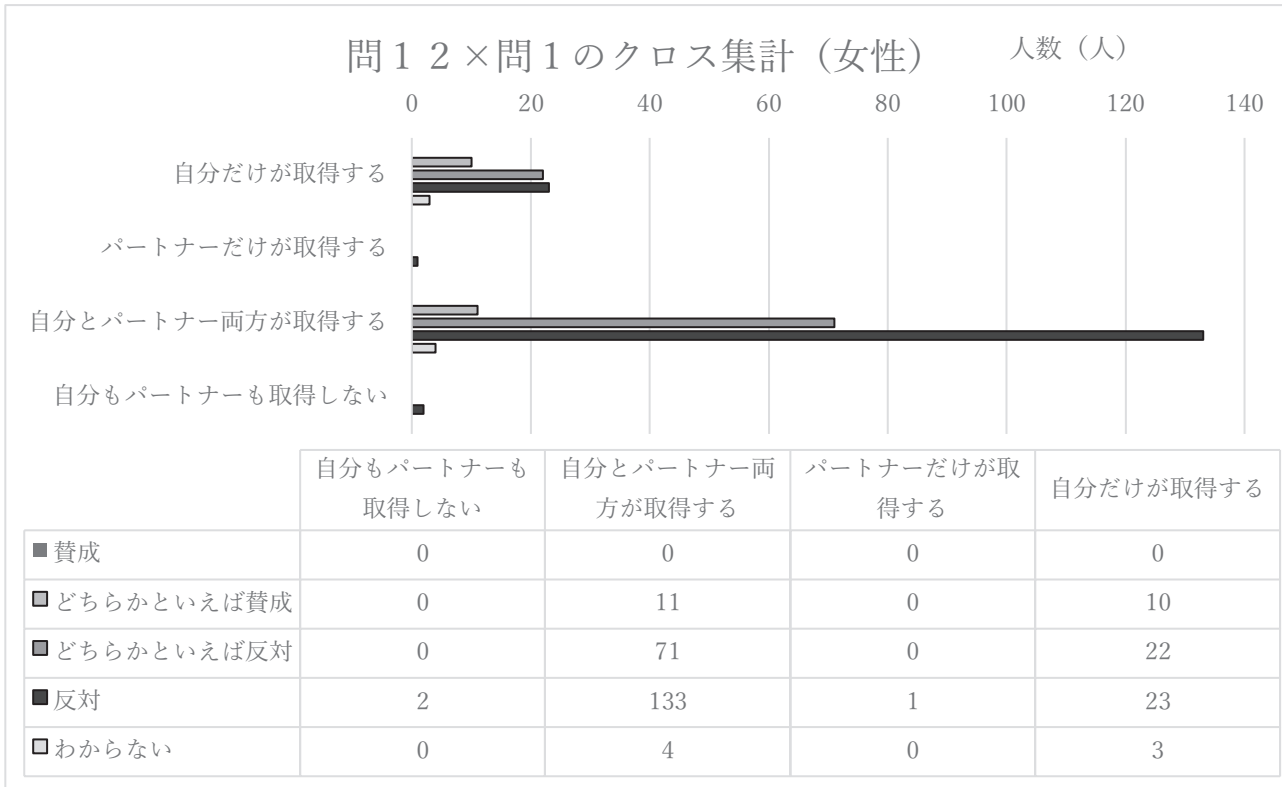


男女全体ともに「自分とパートナーの両方が取得する」とする回答が7割以上に上った。しかし、女性では「自分だけが取得する」が2割みられたのに対し、男性では0割と対照的となった。また「パートナーだけが取得する」の項目においても女性1%に対し男性23%と大きく差が見られた。

この結果から、男女全体ともに、従来の女性だけの育児休業観からの脱却が見受けられる。しかし、男女で大きく差があった「自分だけが取得する」「パートナーだけが取得する」の項目から、未だ女性だけが育児休業を取得し、男性は取得しないという傾向も残っていることがわかる。女性自身が「自分だけが取得する」と回答していることから、女性側が育児は自身の役割であると認識している傾向がみられる。また、男性は「パートナーだけが取得する」と回答していることから、子どもが生まれても自身は仕事を両立し、パートナーには育児休業を取得させ、育児を主として担わせる傾向があると言える。

◎問12×問1 クロス集計

次に伝統的な性別役割分業の賛否について質問した、問1『夫は外で働き、妻は家庭を守るべき』という考え方について、あなたのご意見に近いものはどれでしょうか。」と問12とをクロス集計した。結果は以下の通りである。





## ◎考察

女性が育児を行うという行為は伝統的な性役割観だが、クロス集計の結果では、伝統的な性別役割分業に「反対」「どちらかといえば反対」と回答した人も女性の「自分だけが取得する」、男性の「パートナーだけが取得する」と回答している。さらに、女性の「自分だけが取得する」、男性の「パートナーだけが取得する」と回答した人の割合としては、伝統的な性別役割分業に「反対」「どちらかといえば反対」と回答した人の方が、伝統的な性別役割分業に「賛成」「どちらかといえば賛成」と回答した人の割合より大きい。

この結果から、性別役割分業に反対している人であっても、育児休業の取得に関しては伝統的な性役割観が残っていることが言える。

### 〈第2項 総括〉

自分やパートナーのライフプランについて尋ねた問8、9、10、11、12の結果や分析から、男性は家庭参加への意識が、女性は労働などの社会参加への意識が高くなっていることが読み取れ、自分とパートナーそれぞれが家庭と仕事を分担し、両立しながら家庭生活を歩んでいくことを望む意見が多く見られた。しかし、特に問10、11、12では、異性に対してのライフプランについては寛容な態度を示す回答が多くなる一方で、男性においては、「男性が外で働いて家庭を養う」、女性においては、「女性が家庭で家事育児をする」といったような、回答者自身の性別に対しての性役割観に基づいた項目の回答数が多く見られたことから、異性に対しての性役割観に比べて、自分自身の性別に対しての性役割観をより強く意識する傾向にあるのではないかということが推察された。

また、問1とのクロス集計において、それぞれの回答の間に矛盾が生じた部分もあったことから、社会問題としての「性役割」というものには反対していても、自分やパートナーのライフプランという身近な場面においては、無意識のうちに性役割観に基づいた考え方をしてしまう人が少なくないということも示された。

## 第3項 家族観

ここでは、名市大生の現在・これまでの家族の姿や家庭内での役割にどのような傾向があるのかを明らかにし、その要因を考察していく。また、「男らしさ/女らしさ」の観点から、親の価値観が学生のジェンダー意識の形成にどのような影響を与えたのか、また家庭生活における認識の違いやその原因がどのようなものであるかを考察する。

### 家族観-1 『家庭内での決定権保持者について』

**問13 あなたの家族について、家庭内での決定権を持っていた人は誰ですか。【当てはまる番号1つだけ記入】**

この質問を通して、学生それぞれの家族について家庭内での決定権を持っていた人を調査し、決定権に関して男女間でどのような差があるのか、また、性別役割分担意識との関連性を考察する。

### 分析

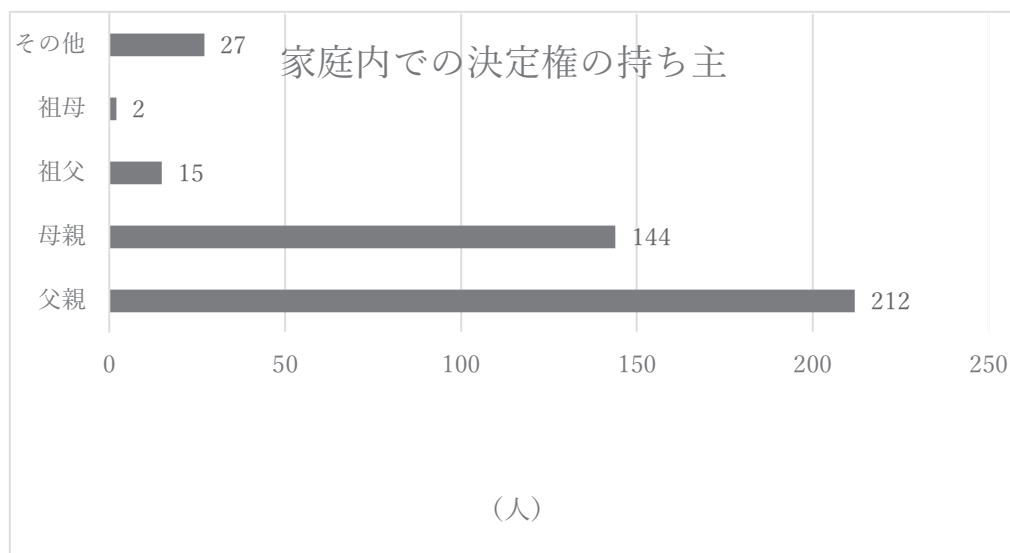
家庭内で決定権を持っていた人について、「父親」「母親」「祖父」「祖母」「その他」の5択で質問した。

回答結果

	選択肢	回答数
1	父親	212
2	母親	144
3	祖父	15
4	祖母	2
5	その他	27
総数		400

「その他」の内訳

両親ともに	11
話し合いによって決定	5
時と場合による	3
平等	4
分からない	3
猫	1



### ◎考察

家庭内での決定権を父親が持っているという回答した方は半数を超えており、決定権については女性に対して男性優位である傾向が見られる。また、祖父母間の比較においても、回答数は少数であるが、祖父と回答した方が祖母と回答した方を大幅に上回っており、決定権は男性寄りであると言える。その他の回答27の内、「分からない」・「猫」を除く20の回答は両親ともに同権である、話し合いによって平等に決めるなど、決定権が誰かに偏らないと回答した方も一定数いた。しかしながら、全体から見ると平等であると回答した割合は低く、家庭内で決定権が誰かに集中していることは明らかである。以上のことから、この質問から名市大生の家族観は最終的な決定権が家族内の誰かに偏っている傾向があり、その背景には家族内での役割分担、役割意識に基づいた決定の仕方があると考えられる。

家族観-2 『家事の担い手について』

**問 14 あなたの家族について、家事を主に担っていた人は誰ですか。【当てはまる番号1つだけ記入】**

この質問を通して、学生の各家庭での主な家事の担い手を明らかにし、家事の担い手について男女間でどのような差があるのか、また問 13 と同様に、性別役割分担意識との関連性を考察する。

**分析**

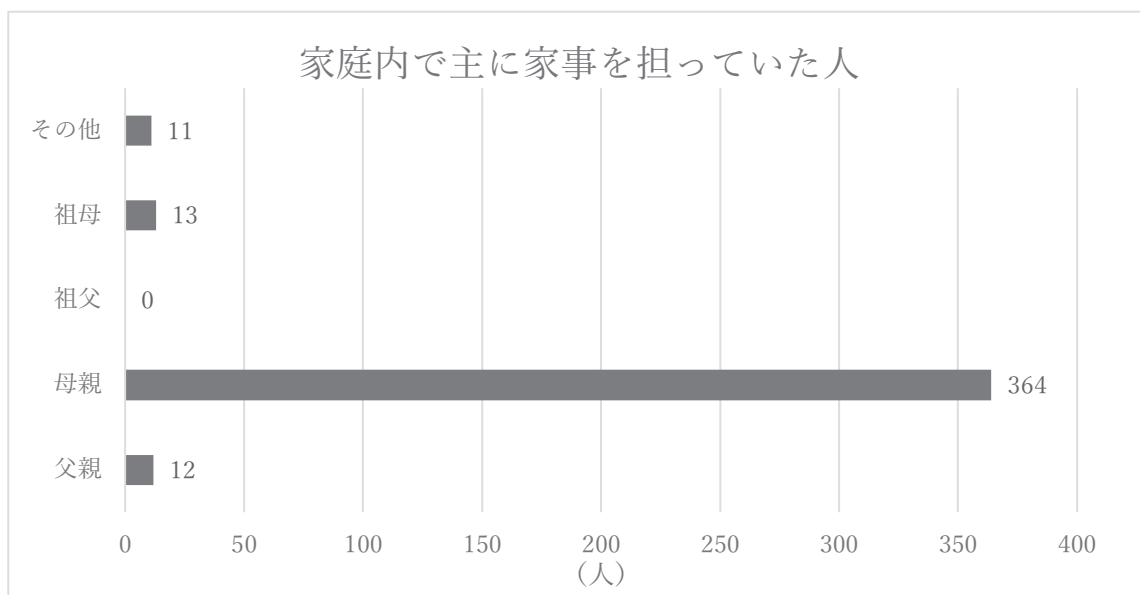
家事を主に担っていた人について、「父親」「母親」「祖父」「祖母」「その他」の 5 択で質問した。

回答結果

	選択肢	回答数
1	父親	12
2	母親	364
3	祖父	0
4	祖母	13
5	その他	11
総数		400

「その他」の内訳

両親ともに	4
できる人が行う	2
母と祖母	2
平日は母、休日は父	2
各自で行う	1



◎考察

家庭内で家事を主に担っていた人が母親であると回答した方は全体の 9 割を超えており、性別役割分担意識に基づいた、女性が家事を行うものであるという意識は未だに根付いたままであると考察できる。また、祖父母間の比較においても、回答は少数であるが祖父と回答した方が 0 名に対して、祖母と回答した方は 13 名おり、家事の主な担い手は女性であることが強く読み取れる。その他の回答 11 の内、その全てが両親ともに家事を行う、平日と休日でも分担する、できる人・各自で行うなど、家事が誰かに偏っていないと回答した方も一定数いた。しかしながら、全体から見るとその回答数はごく少数であり、家事の分担、特に母親への家事負担が大きいことが読み取れる。

以上のことから、この質問から名市大生の大多数の家庭内で家事の担い手は女性であり、家事の役割に関してジェンダー間で大きく差が見られることが分かった。また、その背景には性別役割分

担意識に基づく、女性が家事を行うものという無意識的な思い込みがあると考えられる。

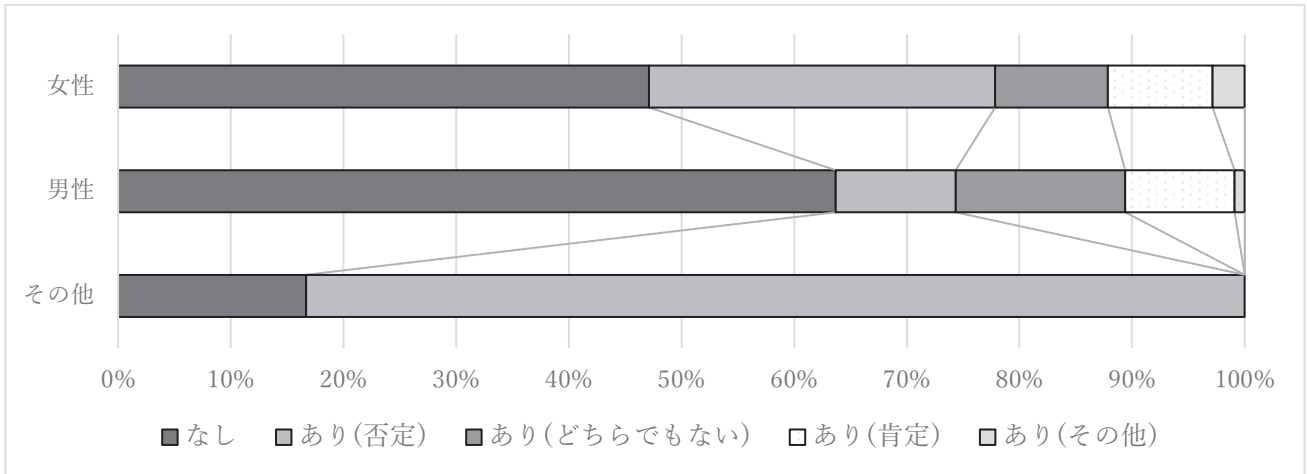
### 家族観-3 『男らしさ/女らしさについて』

**問 15 あなたは家族から「男らしさ/女らしさ」を求められた経験がありますか。また、その時にどう感じましたか。【記述式】**

この質問では、家族から求められた「男らしさ/女らしさ」について、それを押し付けられたものとして否定的に捉える場合と、その通りだと肯定的に捉える場合とについて調査する。なお、興味深い意見については紹介をし、分析を行う。

#### 分析

家族から「男らしさ/女らしさ」を求められた経験があり/なしで集計し、ありについては肯定、否定、どちらでもない、その他に分けて分析した。全体の結果は以下の通りである。



男性よりも女性の方が、押し付けがあったとする割合と押し付けに対し否定的な感情を抱いた割合のどちらも高くなっており、これは旧来の女性像が子供らしさを抑制する傾向にあったことが原因であると思われる。

#### ◎回答に対する考察

否定的な感情を抱いた例として「女の子は足を閉じる、言葉遣いを丁寧に」「男の子は泣かない」など振る舞いに関するもの、「男の子は短髪」「女の子は長髪でスカート」など見た目に関するもの、「料理、片づけは女の子」など家事に関するもの、「女の子は短大、地元」など進路に関するものがあった。

特に多かったのが家事に関するもので、否定的感情を抱いたとする回答 86 件のうち 18 件が家事に関するものであった。「同じ大学生の弟は家事をせずゲームをしていても叱られないが、女である私は勉強の途中でも家事をしなくてはならない。非常に理不尽であり到底理解ができない。」「兄は料理しろと言われなかったのに私は女だから料理しろと言われた性別という勝手に決められた理由だけで料理しないといけないのは不平等だと思った」など特に兄弟と比較して不満であるとする回答が多かった。

一方で、肯定的な感情を抱いた例としては、「女の子は足を閉じる、言葉遣いを丁寧に」、「男は誠

実に、女の子に優しく」など振る舞いに関するものがほとんどであった。

これらの結果から、進路や家事など個人の資質であり外からは見えにくいものや、逆に見た目など個人の資質とは関係ない事柄に関しては「男らしさ/女らしさ」による価値判断を否定的にとらえる傾向にあると考えられる。しかし、周りから見て明らかであり、かつ個人の資質にもかかわる振る舞いに関しては判断が分かれている。

#### ◎回答の傾向に対する考察

振る舞いに関してより詳細にみると、否定派の多くは「汚い言葉遣いをしてしまった時兄は許されたのに妹の私だけ注意された」といったように兄弟などの男性と比較して不満であるとしており、家事などの場合と同じような傾向がみられた。対して肯定派では、「祖父母から求められるのはしょうがないことで多少大事な意見だとも思う礼儀や上品さは自分にとってプラスになるから」といったように自分に得であるとする意見や、「求められたことがある。父親はちゃんとしたであり、自分も尊敬しているので、男らしく誠実に生き、自分のパートナーを幸せにするべきだと思う。」など自分が目指す人間像と合致しているとする意見があった。これらのことから、振る舞いについては自分がその振る舞いをしたいか、したくないかといった主観的な部分が大きく関係していると考えられる。

また、その他特徴的な意見として、「女性です。『女らしく』も『女らしくない』も求められたことがあります。受け入れもせず反発もせず、いつも『それがどうした。』と思っています。」や、「いつも言葉遣いや身だしなみなど様々な面において『もっと女らしくしなさい』といわれる。私は私のしたいようにしたいので、注意された内容の中で納得のいくものは反省して改善するが、それ以外は自分のしたいようにする（直さないこともある）。」など、気にしない、納得すれば直す、といった意見がみられた。

全体としては、旧来の性別役割分担に基づいた男性像/女性像の押し付けに対して否定的な意見が多く、特に仕事においては男女平等参画社会の実現に近づいていると考えられる。一方で、座りかたや言葉遣い、態度などについては男女で異なる規範についても肯定的な意見がみられ、たくましい/おしとやかといった印象レベルでの潜在的な男性像/女性像はいまだに残っていると考えられる。

#### 〈第3項 総括〉

問13・14の回答結果より、家庭内での決定権の持ち主・家事の担い手に焦点を当てた役割分担については、決定権・家事の担い手について家族内で平等である、男女間に大きな差はないと回答した方は少数であり、男女のどちらかに偏っている傾向が強いことが明らかになった。また、問15の回答結果より、特に家事に関して女性が家族からその担い手を求められる傾向が強いことがわかった。しかし、問15によればこれらの傾向に対して疑問ないしは反発心を抱いている学生も多く、性別役割分担意識の再生産にはある程度歯止めがかかりつつあるのが現状であると考えられる。

## 第4項 社会課題に対する考え

この項では、近年議論が高まっているジェンダーに関する社会課題について、名市大生がどのように考えているのか意見を問う。「同性婚」については今年3月、同性婚の禁止についての合憲性が問われた裁判で、日本初の違憲判決が出た<sup>5</sup>。また、朝日新聞社が行った「同性婚を法律で認めるべきか」という世論調査では、若年層ほど同性婚に賛成する傾向が高いことがわかっている<sup>6</sup>。「選択的夫婦別姓」については2020年1月、朝日新聞社が実施した全国世論調査（電話）で、賛成が反対を大きく上回り、特に女性で若年層になるにつれて賛成する傾向にあることがわかっている<sup>7</sup>。また、学生生活において男女を外見から規定するものとして「制服」があるが、近年ではジェンダースファッションや選択式制服など、ジェンダーに配慮したファッションが出てきている。

これら近年議論に挙げられる社会課題について、名市大生が抱く考えについて調査する。

さらに、これまでの質問や社会を踏まえて、現在の日本社会全体で男女平等が実現されているのかを調査する。そして、本調査や社会問題として取り上げられるが、そもそも「ジェンダー」について名市大生が抱いている印象を調査する。

社会課題に対する考え-1 『同性婚について』

### 問16 あなたは同性婚についてどのように考えていますか。【記述式】

ここでは、近年議論が高まっている「同性婚」に関して、名市大生が抱く意識とはどのようなものであるのかという疑問を、記述回答の分析を通じて明らかにしていく。そして、自由記述である特徴を生かして回答の傾向を探り、興味深い意見については詳しく分析を加えていく。

#### 分析

##### ◎統計的解釈

まず、全体の回答における割合を見る（図1）。全395回答のうち、同性婚制度の導入に賛成、もしくは肯定的な意見の人は94%であった。同性婚に否定的、もしくは制度導入に反対とする意見の人は全体の約3%であった。このことから、非常に多くの学生が同性婚に対して賛成、もしくは肯定的な意識を持っているということが指摘できる。なお、本設問は自由記述のため、回答に対して「賛成/肯定的意見」、「中間的意見/その他」、「反対/否定的意見」という3つの主軸を用いたのちに、賛成であれば同性婚の実現に向けて重要視している要素は何か、消極的賛成か積極的賛成かなど、各々の記述について詳細なラベリングを行った。

つぎに、男女別の割合について述べる。同性婚の賛否について、男女間で若干の差が見られた（図2）。男性の方が反対もしくは否定的な記述が多く見られたのに対して、女性ではその割合は中間的意見を含めても5%未満にとどまった。この差が生じる要因としては、現代の社会において、女性は男性と比べて相対的地位が低く、差別や格差の問題を「自分ごと」として捉える人が多い。よって、

<sup>5</sup> 朝日新聞、「同性婚の不受理、初の違憲判断 札幌地裁『差別的扱い』」（2021/3/17）

<https://www.asahi.com/articles/ASP3K3F63P3JIIPE02H.html>

<sup>6</sup> 朝日新聞、「同性婚、法律で『認めるべき』65% 朝日新聞世論調査」（2021/3/22）

<https://www.asahi.com/articles/ASP3P7DSCP3MUZPS003.html>

<sup>7</sup> 朝日新聞、「選択的夫婦別姓、賛成69% 50代以下の女性は8割超」（2020/1/27）

<https://www.asahi.com/articles/ASN1W65VON1WUZPS002.html>



女性は他のマイノリティに対しても共感が働き、差別の撤廃や権利を認めるべき、と考える傾向があるからではないかと推論する。また、グラフでの掲載は行っていないが、性別を「その他」や「クィア」、「クエスチョニング」、「X ジェンダーの定義が一番近い」と回答した人々は、全員が同性婚について賛成/肯定的意見であった。

図 1

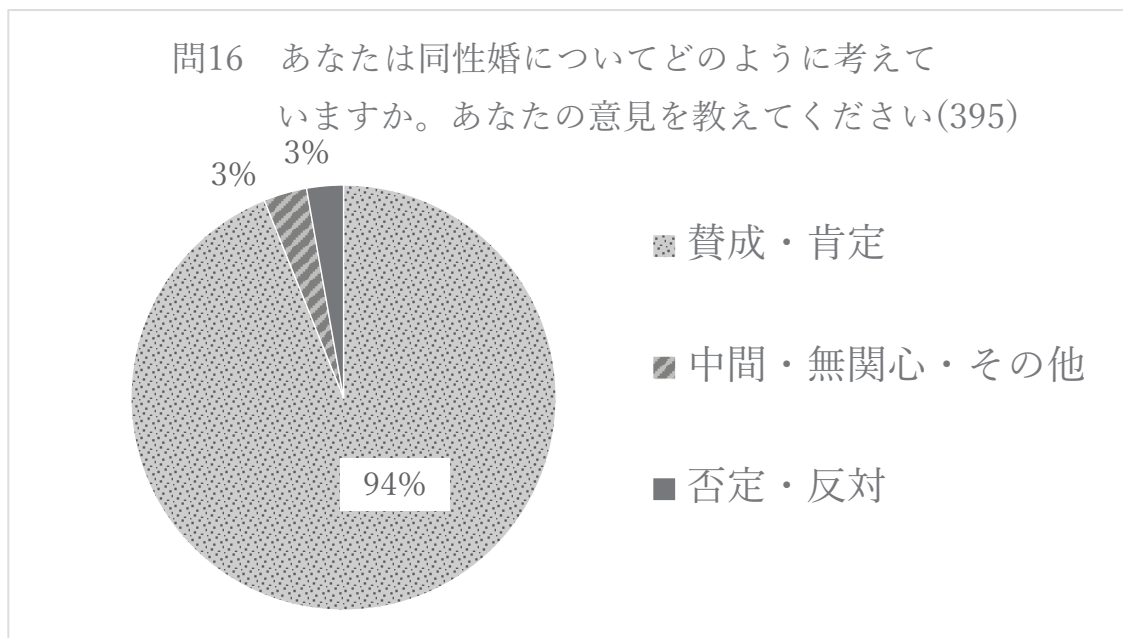
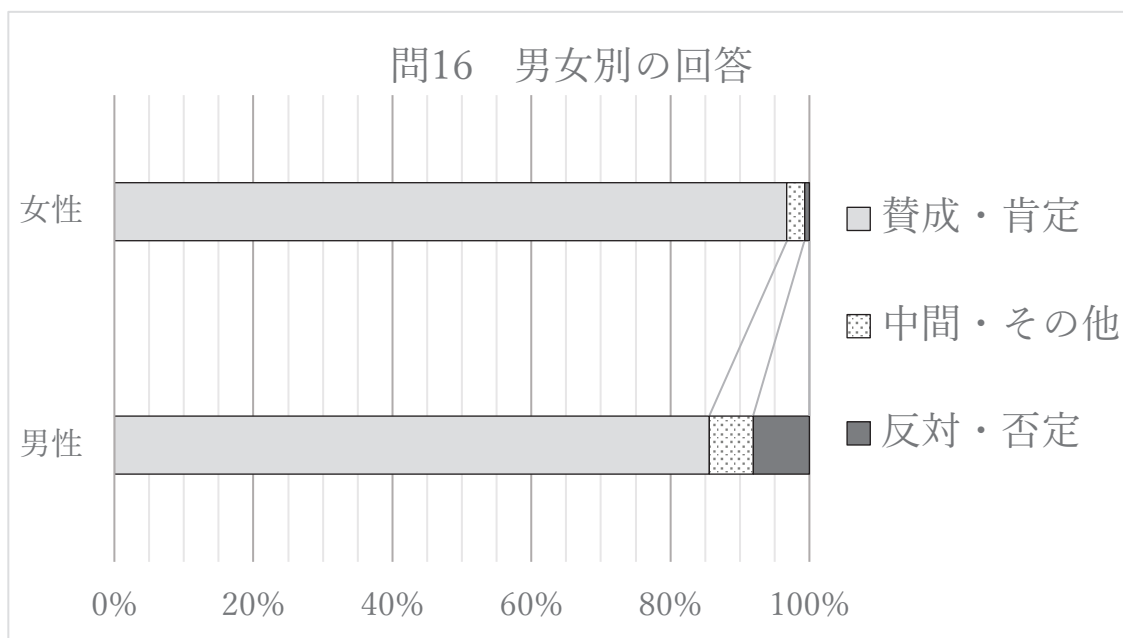


図 2



◎賛成・肯定的意見

簡素な「よい/賛成」「認めるべき」という回答を除いたときの頻出意見としては「外野がとやかく言う必要はない」、「多様性を認める社会であるべき」、「個人の自由」「結婚（恋愛）に性別は関係ない」、「結婚したいという気持ちがあればよい」などという趣旨の記述である。また、結婚することで

得られる権利をセクシャルマイノリティにも平等に付与すべきという意見もみられた。さらに「日本でも法制化すべき」という、同性婚制度が実現している他国と比較して、日本における人権保障の制度作りの遅れを主張する意見もあった。

また「なぜ禁止されているのか理解できない」「一刻も早く法で認めるべき」といった、現状の婚姻制度への疑問や早急な制度化を求める声は多く見られた。このような明確に法制度の改正を求める声のみならず、同性カップルを取り巻く現代日本の社会環境に問題意識を感じているという意見もみられた。彼らの意見の論旨としては、社会が同性カップルの結婚を祝福するような雰囲気の醸成や、多様な価値観を認め合うことが必要であるとのことであった。

そして、同性婚反対の理由として挙げられる「出生率の減少」や「少子化が進行する」という意見についての疑問を述べる人もみられた。少子化の進行に対する反論意見としては、同性婚を禁止することによって出生率が増加するとは言えないという意見が主であった。さらに、婚姻の可否を決定する要素については、結婚とは生産性が全てではないため、結婚の可否は子どもを産むか産まないかという要素によって決めるべきではないという声が見られた。このように回答した学生は、異性婚の場合でも子どもをもうけないカップルがいることの指摘や、「結婚はただ単に子供を産むためだけの制度ではない」という意見の根拠が示されていた。

消極的・条件付き賛成の回答においては、消極的な人は同性カップルに対する世間の目や制度の変更にもなう混乱、同性カップル間の子どもに対する偏見を心配する声や、「身近な人であったら混乱する」という意見があがった。条件付き賛成については、制度が詐欺の用途に利用される可能性について言及する記述や、「導入はパートナーシップ制などで段階的に認めるべき」といった制度導入に対する慎重姿勢がみられた。



実際の回答（賛成・肯定的）

「個人の自由だと思う。結婚したいくらい好きな人が現れたなら、結婚をするべきだと思うし、他人が口を挟むことではないと思う」

「全然ありだと思っている。同性で結婚したい人はすればいいし、異性で結婚したい人も結婚すればいいし、同性でも異性でも結婚したくない人は結婚しなればいと思う」

「結婚という形をとることでしか得られない権利（遺産相続など）があるので、誰でも好きな人を人生のパートナーにできるように同性婚はできるべきだと思う」

「お互いの同意があるのであれば好きにすればいいと思う。」

「賛成！本人たちが愛し合っているのに、結婚しちゃいけない理由がわからない」

「めちゃめちゃ賛成。私はバイセクシャルですが、結婚するなら女性がいいと思っているので。（価値観のずれが少なそう） たまに偉い人が『同性婚を認めたら少子化が進む』と言っているのを見ますが、ぶっちゃけ同性愛者は同性愛者で変わらないものなので、今でもその人たちが必ず異性と結婚して子どもがいるかって言ったらそうではないし、同性婚が認められたから急に少子化が進むなんてことはまずありえない、論点ズレてるなあと思います」

「自由だと思います。生産性と結びつけてよく考えますが、それでは独身でいる人や結婚しても子供は作らないひとはどうなんだって思うので、その考えには反対です」

「日本でも、もっと認識が広まり、権利が認められるべき。そもそも、結婚の目的は、子供を産むことがゴールではないと考えているので、少子化が進むといった理由を挙げ、同性婚を認めない政府のこれまでの態度は、間違っていると考えます」

「ありだと思う。ただ、多くの批判や好奇の目に晒される対象になりやすくなるとも思う」

「まだまだ世間に浸透していない考えであるから、急激に許可すると混乱を招く。少子化や結婚詐欺（異性婚よりも悪用されやすいと考えている）の対策なども含め、慎重に検討しなければならない」

「同性で結婚された方々が、養子をとって、子どもを育てようとしたときに、子どもがいじめられないかとか、偏見にさらされないかどうしてもし不安になってしまうと思うので、そこをどうサポートしていくかが大切だと思う」

### ◎中間的意見・無関心について

「反対も賛成もしない」という中間的な意見のほかに、「(意見は) ない」、「なんとも思わない」「考えたことがない」といった同性婚についての無関心を示す意見もいくつか存在した。後者については、賛成意見を述べる人の中にも「自分には関係ないが賛成」「同性愛者の気持ちはわからないが賛成」といった、同性婚について他人事を感じている意見も存在したことから、学生の中には同性婚について無関心な人や、「自分ごと化」して考えられないという人も一定数存在しているとわかる。

#### 実際の回答（中間的意見）

「異性婚よりも珍しいという印象があるが、私自身特に支持、反対する気はない。大きく歳の離れた人を選ぶようにそういう選択をする人もいるんだと思っている」

「本人たちの自由だから特に賛成も反対もしない」

「あまり深く考えたことはないです。」

「いいとも悪いとも思っていない。身近ではない」

### ◎反対意見について

反対意見は法制化の困難に着目しているものが最も多く、手当はどうなるのかということや、制度を利用した犯罪などを反対理由とする例がみられた。また、同性カップル間の子どもの立場について言及する意見もあった。心理的に受け入れられないという意見を明確に述べている人はごく少数であったが、「結婚や恋愛は異性同士で行うもの」という前提に立った上で、同性愛そのものを否定する意見もいくつか存在した。

賛成意見の割合が圧倒的多数であったことから、それと比較すると反対意見の数は非常に少ない結果となった。法制度の問題や詐欺などの犯罪の発生、そして子どもの立場という消極的・条件付き賛成の人がその理由として挙げた意見と、似た意見を反対理由とする意見もあった。各記述がそれぞれ特徴的であり、数は少ないながらも多様な意見が集まった。

## 実際の回答（反対・否定的）

「憲法など広いところで考える必要もあるように思えるので、昨日の今日ですぐに変えるなどというのは現実的ではないと思う」

「反対、扶養などの出生に対するインセンティブを同性愛者に与えるべきではないと思うから扶養等を取り除いた婚姻又はパートナーシップ制度なら賛成」

「同性愛はいいけど同性婚は制度化が難しくてそれを利用した犯罪も起きる可能性があるから同性婚は認めるべきではない」

「正直に言うと受け入れられない、街中で見かけても気にはしないが周りに沿いう言うkとをする人がいればここからは祝福できないと思う（原文ママ）」

「自分たちで勝手に収束する分には構わないが、それを公に認めてくださいというのはまた違う気がする」

「反対です。（中略）科学的発見があって同性愛に関する遺伝子があるとすれば賛成に回りますがそれまでは反対です」

## ◎興味深かった意見について

ここでは、本問の回答の中でも興味深かった意見に注目する。まず、婚姻に関して、異性婚・同性婚にかかわらず、「婚姻そのものにこだわらない」という家族の形を示している意見が、全体の約1%ではあるが存在した(5/395)。この意見を持つ人は同性婚に対して賛成/肯定的意見を前提としているものがほとんどであったが、1名だけ「同性婚についても反対」の立場であった。「友情婚」などの現在の婚姻制度にこだわらない家族の新しいあり方を述べる人もいた。ここからは、大学生が考える家族像が多様化していることや、「結婚」に縛られることのない将来の姿を思い描く人も少なからずいるということが読み取れる。

また、実際の同性カップルの姿を知ることによって、自分の中の同性婚に対する意識が変わったという人や、「(身近な同性カップルに) 最初は驚いたけど、すごく楽しそうで羨ましい」という意見を述べる人もいた。上記から、セクシャルマイノリティのリアルな姿を見て、本人達を知ることが、性的多様性を認め合う意識の形成に寄与すると考えられる。

## 実際の回答

「同性婚のみならず、友情婚みたいなものも一つの家庭の形としてありだと思う」

「同性婚制度があってもいいと思うが、そんなにもめるなら婚姻制度自体なくしてもいいと思う。

好きに選ばせてあげられたらベストだと思う」

「性別だけでパートナーを絞る必要はないと思うので賛成です。今までは抵抗があったけど、SNSでも同性パートナーの存在をたくさん見て、美しいことだと思った」

### ◎考察

まず、賛成/肯定的意見からは、本学の学生が結婚において重要なのは「個人の思い」であると考えていることや、結婚のあり方としては恋愛結婚を望むという考え方、そして全ての人に平等な権利を求めているという平等主義的思考や、個人の意思決定を大切にすべきという自由主義的な思考を持つ人が多いことが指摘できる。法制度の改正を求める声や、その法制化を他国と比較するような意見、そして社会環境に問題意識を感じているという意見からは、大学生が現在の「同性婚を認めない」とする法制度や社会環境に疑問や不満を持っていることが読み取れる。また、同性婚の制度化を求める学生は、制度そのものの成立だけではなく、社会が同性カップルの結婚を祝福するような雰囲気醸成が必須であると考えられる人もみられた。このことから、法が一人歩きにならないように、多様性を認める社会への変化が重要であると考えられる。制度が机上の空論となってしまうことを防ぎ、現実的なものとして機能するためには、社会制度という構造のみならず、社会を構成している人々の意識も変化する必要があるといえるだろう。ゆえに同性カップルやセクシャルマイノリティを特別視しすぎることなく、多様性を持つ社会の一員として包摂することが重要であると主張する。また、同性カップルとその子どもについては、現在の同性婚が認められないという状況下では、子どもをもうけること自体も難しく、育児の面においてもサポートの欠如や制度の不整備、社会の目などの諸要因による困難が積みまとう。「同性カップルであるから子どもを産み育てることはない」という固定概念からの脱出は社会的急務であろう。これにおいても、権利付与と同時に、社会的理解の促進を進めていかねばならない。

つぎに、中間的意見や無関心層の存在は決して無視できるものではない。賛成の立場にはあるものの「自分ごと化」できないという人の存在や、そもそも興味が無いために同性婚についてなんとも思わないという人が一定数存在することは事実である。特に無関心層においては、この問題に興味関心を抱けるような働きかけが必要だろう。そこで、実際に日本で生活している同性カップルの存在を知ることは、彼ら無関心層の意識変化に影響を与える可能性があると考えられる。

そして、反対意見からは法や制度を現実的な視座で見ている人が多いことが読み取れ、制度変更による社会の混乱への配慮といった保守的傾向がみられた。これは条件付き賛成や消極的賛成の立場の意見にも同様であり、「同性婚制度の成立」に付随する社会変化への憂慮から、制度導入への慎重姿勢がみられた。また、反対の理由を少子化の進行とする人はごく少数であったことから、同性婚と少子化の関係性については冷静な立場で情報を取捨選択しているのではないかと考察した。心理的拒絶感を示す人は少数であったものの、「異性愛中心主義」が意見の根本に存在すると考えられ

る部分が共通していた。このように、異性愛中心主義を根底としたうえで、「結婚」という行為の意味に対する認識の差異が、彼らの同性婚の賛否を左右しているのではないだろうか。具体的には、結婚とは子どもを産み育てる「男女」に社会的サポートや特権を付与するものであると捉えているのか、結婚とは愛し合うもの同士が支え合って生活するために存在しているものなのかという価値観の差である。どの部分に重点を置いているかによって、同性婚に関する考え方も変化すると考えられる。「結婚」という行為の意味については、同性婚制度の実現において、社会全体で議論すべき課題であると主張する。

## 社会課題に対する考え-2 『選択的夫婦別姓について』

### 問 17 あなたは選択的夫婦別姓についてどのように考えていますか。【記述式】

ここでは、近年社会問題として議論にも挙げられる「選択的夫婦別姓」について、名市大の学生がどのような意識を抱いているのかという疑問を、記述回答の分析を通じて明らかにしていく。そして、自由記述である本問の特徴を生かし、回答の傾向を探っていく。そして興味深い意見については詳しく分析をしていく。

#### 分析

##### ◎自由記述意見のラベリング

自由記述意見を、調査者の視点から大きく 14 の項目にラベリングした。(表 1)

(表 1)

	ラベリング	全体	女性 (人)	%	男性 (人)	%	性別その他・無回答
1	反対	19	8	2.9%	11	9.6%	0
2	どちらかという反対	14	7	2.5%	7	6.1%	0
3	実現不可能	4	2	0.7%	2	1.8%	0
4	どちらとも言えない	10	5	1.8%	5	4.4%	0
5	どちらかという賛成	9	6	2.1%	2	1.8%	1
6	賛成だが問題あり	16	11	3.9%	4	3.5%	1
7	条件付き賛成	13	7	2.5%	6	5.3%	0
8	個人の自由、賛成	70	46	16.4%	24	21.1%	0
9	あり	107	81	28.9%	23	20.2%	3
10	賛成、強い賛成	109	91	32.5%	17	14.9%	1
11	わからない	7	3	1.1%	4	3.5%	0
12	無関心、どちらでも良い	14	9	3.2%	5	4.4%	0
13	誤答	2	2	0.7%	0	0.0%	0
14	無記入	7	2	0.7%	4	3.5%	1
計		401	280		114		7

なお、ここからの分析をよりわかりやすく行うためラベリングを絞り、反対(1)、どちらかという反対(2,3)、どちらとも言えない(4)、どちらかという賛成(5,6,7)、賛成(8,9,10)、わからない(11)、その他(12,13,14)の7項目で回答の分析を行っていく。

##### ◎『反対』の意見

選択的夫婦別姓について反対を示す意見としては、「夫婦別姓にしたときの子供の苗字の問題」を挙げているものが多い。その他には「相続や手続き」といった制度的な面から反対する意見、そして「家族としてのまとまりの欠如」を心配する心理的な面から反対する意見が見られる。



#### 実際の回答

「子供を授かったときに困るし、相続の時も困る感じがする。」(女性)

「選択的夫婦別姓は家族間の心理的な壁を生みかねないので同性を強制すべき。」(男性)

「選択的夫婦別姓を制度化することにあまり賛成できない。個人の手間以上に行政のコストが大きいと考えているためだ。制度上必ずしも女性側が姓を変えなければならないというわけでもないので、制度として取り入れる必要はないし、同性夫婦と同じ扱いは認められないと思う。」(男性)

#### ◎『どちらかという反対』の意見

どちらかという反対とする意見には、「子供の名字の問題」や「戸籍と制度上の問題」を挙げた消極的反対を示すものがある。また様々な理由から「制度として選択的夫婦別姓が不可能なのではないか」という意見も見られる。

#### 実際の回答

「導入に反対というわけではありませんが、戸籍にもとづく社会保障や制度も多々あるので、簡単にはいかないだろうと思います。個人的には、改正手続きの簡略化や通常使用のハードルが下がり範囲が広がれば、制度として別姓を認めなくても事足りるのではと思います。」(女性)

「あまり賛成できない。子供が生まれた際にどちらになるかで揉めることになりそう。」(男性)

「夫婦別姓の権利を主張する人が出てくるのはもちろん当然であろうが、現在ではそれを容認できるような制度設計が不十分だろうから実現はできないと思う。」(男性)

#### ◎『どちらとも言えない』の意見

どちらとも言えないとする意見には、メリット・デメリットの双方を挙げた上で、どちらとも言えないとする意見の他に、戸籍や制度上と普段の生活で姓を使い分けるべきという意見も見られる。

#### 実際の回答

「夫婦同性はそれを求めている人に強要している点で良くないため、選択的夫婦別姓は良いと思う。しかし『選択的』であるにも関わらず、夫の苗字を名乗ることに批判的な人が一定数観測されるため、制度に賛成し辛い。」(男性)

「戸籍上は統一すべき。普段の生活では配慮されるべき。」(男性)

#### ◎『どちらかという賛成』の意見

どちらかという賛成を示す意見では、「消極的賛成や1つの選択肢としてあり」だとする意見がある。また、賛成としながらも子供の苗字や戸籍上の制度、制度を取り入れる社会システムといった問題を挙げている意見も多い。さらには「制度が整っていれば、議論がいき通っていれば賛成する」とする条件付きでの賛成を示す意見も見られる。

## 実際の回答

「選択的夫婦別姓のデメリットがないのであるなら1つの選択肢としてありだと思ふ。」(男性)

「自分は夫婦同性が良いと思っているが、人によって選択権があるのは良いのではないかと思ふ。一方で子供のことを考えるとどちらを名乗ればいいのかなどで困ってしまうことも多々あると思ふので積極的に賛成派しない。」(女性)

「あっても良いと思ふが、まだ一般的でないため周りへの説明が大変そう」(女性)

「賛成だが、子供の姓についての議論が必要」(男性)

「賛成派が多いが、例えば親が離婚した際の子供の姓や相続等での家族の扱いが複雑になる点で問題が生じるため焦らず先に法整備をするべき。」(男性)

「混乱しない制度が整えられるなら法整備化すべき。」(女性)

「好きにすればいいと思ふけどその考えをどうでもいいと思ふている人に強要しないでほしい。」(女性)

## ◎『賛成』の意見

賛成とする意見では、「賛成/あり」というような簡素的な意見が多い。それを除くと「個人の自由である」、「姓を変更する手続きを省くことができる」、「あくまで選択肢として望む人ができるようにすべき」、「すぐにでも認められるべき」、「仕事上、楽になる」といったような意見が出た。

### 実際の回答

「特に問題はないし、個人の自由だから認めても良いと思ふ。」(男性)

「パートナーと考えて選択すれば良いと思ふ。」(女性)

「仕事でそのままの姓の方がいい人もいると思ふから良いと思ふ。」(女性)

「”選択的”なので良いと思ふ」(女性)

「必要とする人がいるならあってもいい制度だと思ふ」(男性)

「男女平等を実現するために必要だと思ふ。」(女性)

「法整備を進めて、夫婦が自由に決められるようになると良いと思ふ。」(男性)

「女性の負担が重すぎるため、少しでも早く選択的夫婦別姓を導入すべきだと思ふ。選択肢を増やすだけで、導入で損をする人がいないのだから、なぜ導入しないのか不思議に思ふ。」(女性)

「女性のキャリアを守ることに繋がるため、法的に認められるべきだと考えています。」(女性)

## ◎統計的分析

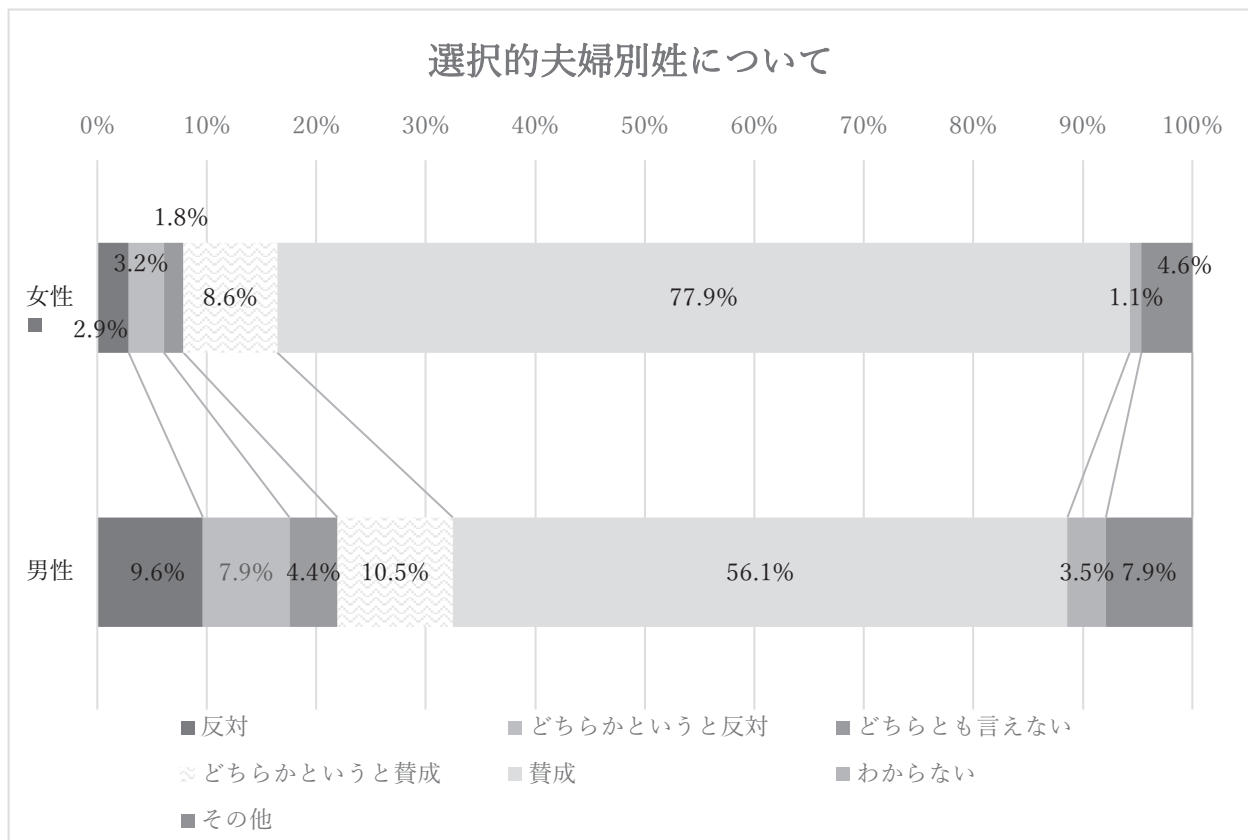
選択的夫婦別姓について、先述の7項目をもとに男女別での割合を見る。(図1)

男性、女性ともに選択的夫婦別姓に賛成する意見の割合が最も高いが、その割合は女性が77.9%、男性が56.1%であり、女性の方が20%以上も高いことがわかる。反対の割合については、女性が2.9%、男性が9.6%であり、男性の方が高い。以上のことから、女性の方が男性に比べて選択的夫婦別姓を認めることについて積極的であり、男性の方が消極的であることが読み取れる。

また、図では示していないが、性別を「その他」「クィア」「Questioning」「Xジェンダーの定義が

1番近い」とした人については、全員が賛成もしくはどちらかという」と賛成を示した。

(図1)



◎考察

まず、賛成の意見についてより詳しく男女の主要な意見を見ていく。表1からわかるように、女性は賛成の中でも特に強い賛成を示す人が多い。「ほぼ女性が名字を変えていてその手続きや名字を変えることに抵抗感がある」「女性が姓を変えるのが当たり前なのは男女不平等である」「自分は変えたくない」というように、女性はこの問題を自分ごととして、また男女平等と関連付けて考える人が多いように感じた。一方で男性は特に個人の自由であるとする人が多い。「好きにすればいい、当人の自由」「選択できるようにすればいいと思うが、自分は同姓を選ぶ。自分の姓を変えることになったとしても」というように、男性は反対派していないものの、各々の問題であるとして他人事として捉えて意見をする人が多く感じた。

同じ賛成でも、その内訳に違いが見られることから、選択的夫婦別姓についてはやはり女性が結婚と同時に男性の姓に変更することを、当たり前とする社会背景を踏まえた上での、各性別の立場にたった意見であると考えることができる。

次に、反対の意見についても見ていく。反対意見についてはその記述内容に目立った男女差は見られないが、女性は「子供の問題」を挙げる人が多く、男性は「家族のまとまり」や「制度面」から反対する人が多く感じた。その中で「結婚とともに多くは女性が姓を変えることが一般的であるため、違和感を抱いたことがない」(女性)、「制度それ自体よりも、『男性の苗字にするのが普通』という考えが浸透していることが解決しにくい問題」(男性)という、制度として決まっているわけでは



ない、男性の名字にするという当たり前について言及する意見があった。つまり、夫婦別姓にすることで、子供の問題や制度の問題が生じるために反対とする意見と、女性が必ずしも姓を変えなければならないわけではないため、賛成しないという主に2つの立場からの反対意見があると考えられる。

また、賛成/反対を示していない意見の中でも考えるべきものがある。『どちらとも言えない』の中に「別姓を認める＝男女平等という流れになってしまうこともよくない」（女性）とする意見があった。これは先述した賛成意見の中の男女平等の実現とは対立する意見である。この学生が性別役割分担に反対していたり、ジェンダーについて社会問題だと捉えていることから、おそらく選択的夫婦別姓を認めるだけでは男女平等を実現したとは言い難く、もっと根本的な意識や当たり前になっている部分から改善していく必要がある、ということであると推測する。どちらとも言えないと回答した人は、わからない/関心がないのではなく、この学生のように熟考した上で、賛成/反対と言い切れないという人がほとんどであった。

さらに、無関心と回答した人で「特に考えたことはない。しかし男であるが故に姓が変わることに対して考えたことがないのが問題だと思う」（男性）という意見があった。全くの無関心を示す人も多いが、その中でこのような意見が出てくるということは、今回のアンケート調査をきっかけに選択的夫婦別姓について考えようとしてくれる人が出てくるということであり、調査者としては嬉しいことである。

まとめると、名市大生は全体的に選択的夫婦別姓については賛成を示す人が多いということがわかった。しかし「女性が男性の姓に変更するのが当たり前」という考えは男女、賛成/反対を問わず浸透していることは明らかである。現行の制度も踏まえ、ステレオタイプを拭き去った上でこの問題については議論をしていく必要があると考える。

### 社会課題に対する考え-3 『学校制服について』

#### 問18 学校制服の在り方について、どのようにすべきだと考えていますか。【当てはまる番号1つだけ記入】

外見の戸籍上の性別によって決められる学校制服について、LGBTQ についての議論も活発になる中、どのようにすべきであるのか、名市大生の考えを調査していく。また、問15において家族から服装についての男らしさ/女らしさを求められた学生について、その家族からの何気ないジェンダー意識が影響を与えているのかも調査する。

#### 分析

##### ◎問18の統計的分析

学校制服の在り方について、「戸籍上の性別に従って学校側で決定すべきだ」「学校側が申請を受け、許可した生徒に限っては戸籍上の性別と異なる制服も認めるべきだ」「学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ」「私服の着用を認めるべきだ」の4択で質問した。

問18の統計結果から、学校制服の在り方について男性女性ともに「学生が自由に選択・変更すべきだ」と考えている人の割合が最も大きいことが分かった。女性において、学校制服について学生が自由に選択・変更できる方が良いと考えている人の割合が8割と大きくなっている。また、「私服

の着用を認めるべきだ」と回答した人は男性女性でほぼ同じ割合となった。

◎考察

学校制服は学生自身が自由に選ぶべきという考えの人の割合が大きかった理由について考えられる可能性としては、実際に学生が自由に選択できる制服やジェンダーレス制服の存在が周知されてきたことが挙げられる。実際に公立校でも私立校でも多様性を考えジェンダーレス制服の導入を進める学校が増加し、学校制服を販売している企業にもジェンダーレス制服の注文数が増加している<sup>8</sup>。これらの社会における学校制服のジェンダーレス化という流れが、名市大生の学校制服に対する考えにも影響を与えたのではないかと考察した。

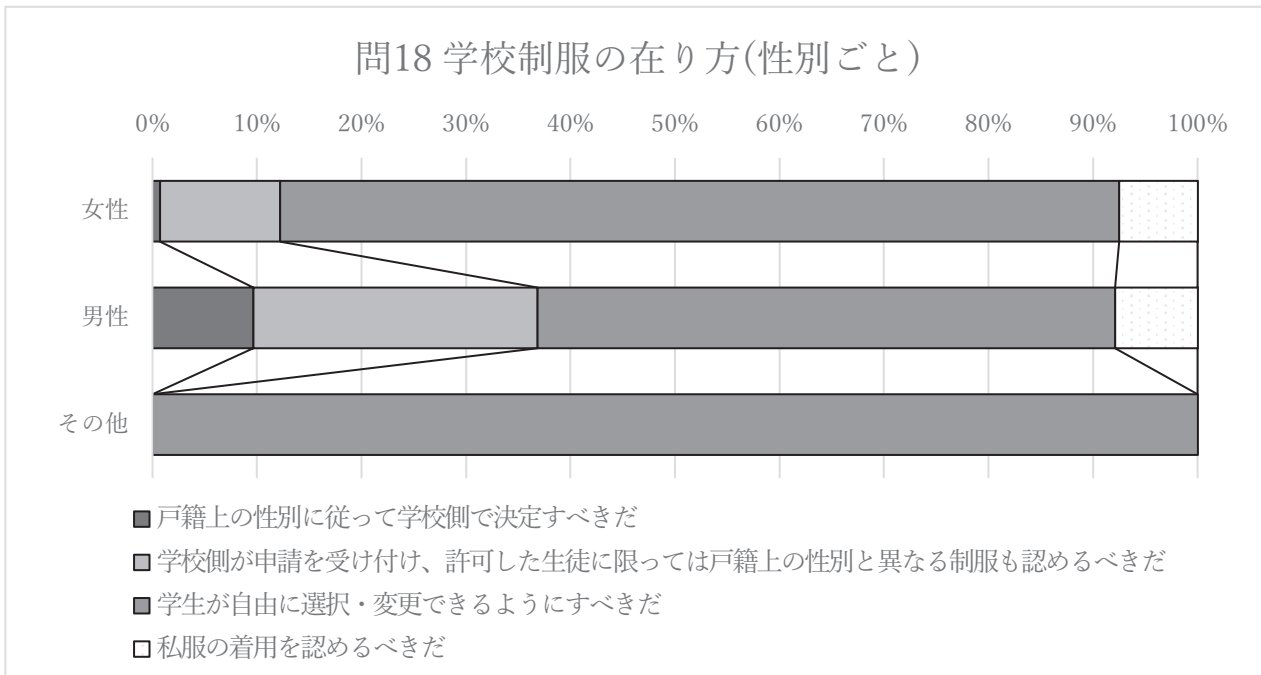


図1(単位：%)

◎問18 とのクロス集計

次に、上記の分析結果について「身にまとうもの」という観点から、<問4：女性の化粧について(選択式)>とのクロス集計と<問15：男らしさ/女らしさの押し付け(自由記述)>の服装に関する記述を踏まえた考察を行った。

◎問18 と問4 のクロス集計における統計的結果と考察

まず、問18 学校制服と問4 女性の化粧についてのクロス集計から見ていきたい。以下の図2 と表1 から、問18 で「戸籍上の性別に従って学校側で決定すべきだ」を選択した人に注目すると女性は人前に入る時は化粧をすべきであると考えている人の割合が大きいことが分かる。これらのことか

<sup>8</sup> 朝日新聞 EduA、「採用増える『ジェンダーレス制服』、誕生の背景は トンボのデザイナーに聞く」(2021/04/02)

<https://www.asahi.com/edua/article/14314851>

ら、学校制服において性別による規範に従うべきだと考えている人は、女性の化粧という学校制服と比較すると義務感を感じにくい身だしなみに対しても、規範意識を持っていることが伺える。

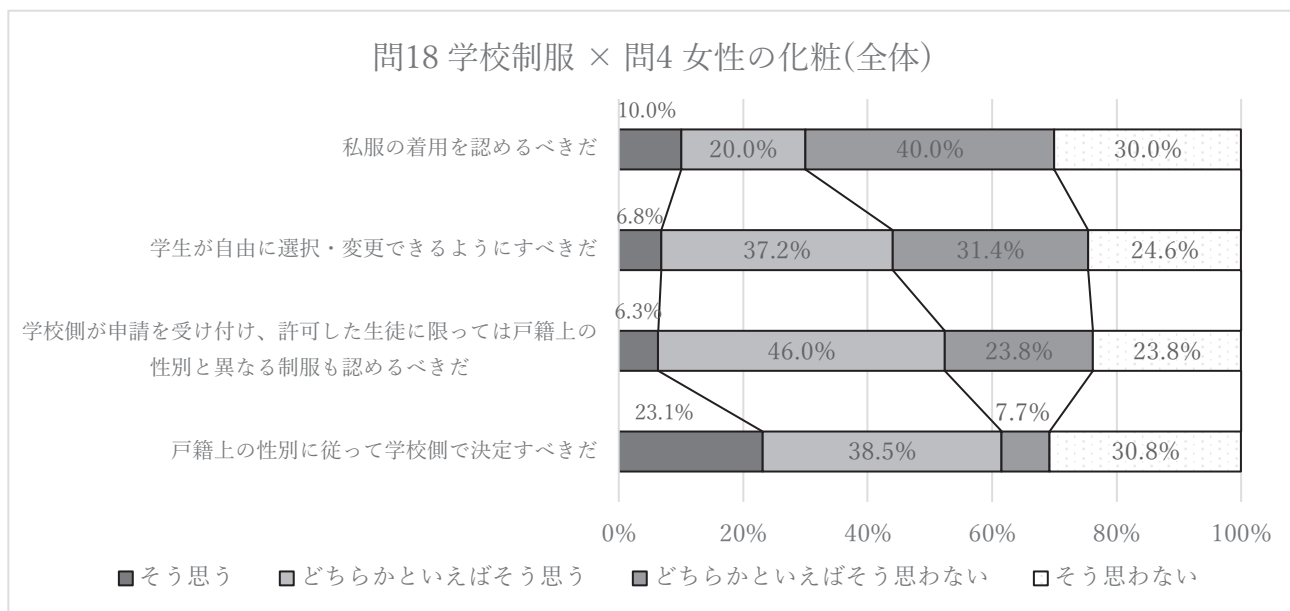


図 2(単位：%)

問 4	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
問 18				
私服	10.0	20.0	40.0	30.0
学生が自由に選択・変更	6.8	37.2	31.4	24.6
学校に申請し許可を得る	6.3	46.0	23.8	23.8
戸籍上の性別	23.1	38.5	7.7	30.8

表 1(単位：%)

◎問 18 と問 15 から見える分析と考察

次に、今までの経験の中で身だしなみや容姿といった外見に対して周りからのジェンダー的な影響を受けたことがある回答者は学校制服についてどのような考えを持っているのかを見ていきたい。

問 15 「家族から男らしさ/女らしさを求められたことはあるか」という質問に対して「スカート/髪/服装」という言葉を用いて回答した記述から一部抜粋して以下の表 2 を作成した。また、「ズボン」という言葉を用いて回答していた人は居なかった。

表 2 の記述を含め、家族から服装や外見に対する性別によるらしさを求められたと回答した人は女性のみであった。このことから、実際に周りから自分の服装や外見について「男らしさ/女らしさ」を求められた経験があり、それに対して否定的な感情を持ったという人は、問 18 で学生が自由に選択できる制服が良いと思う傾向があると考察した。

問 15 の記述	問 18 で選択した肢
スカート履いて欲しいと言われたことがある。嫌だったので拒否していた。	学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ
「女の子だからスカート履きなよ。」と言われた。古い考え方だと思った。	学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ
小学生の頃、髪の毛をボーイッシュにしていたら、髪の毛を伸ばして女の子らしくしたらと周りの大人に言われた	学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ
髪を短くしようとした時に止められたが、なぜダメなのか分からなかった。	学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ
可愛い服装をするように言われたがあまり気がすまなかった	学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ
もうちょっと女の子っぽい服装をしなさいと言われた	学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ

表 2

社会課題に対する考え-4 『社会における男女の地位について』

**問 19 あなたは、社会全体で男女の地位は平等になっていると思いますか。【あなたの意見に最も近い点を選択】**

これまでの質問を踏まえて現在の日本社会を見たとき、日本社会全体での男女の地位が平等になっているかどうか、名市大生の意見を調査する。さらに、その意見に至る要因は何なのか、他の問いと関連づけながら考える。

### 分析

◎問 19 の統計的分析

この問いは、男女の地位について 1～9 段階で回答をする。点が高いほど男性優遇社会度が高いという条件で回答を依頼した。問 19 の統計結果から、男性女性ともに「やや男性優遇 6, 7」を選択した人の割合が最も大きいことが分かった。また、女性においては「女性優遇 1, 2」を選択した人はいなかった。このことから若干の男女差はあるものの名市大の学生は現在の日本社会はやや男性優遇であると捉えている人の割合が非常に大きく、特に女性にその傾向が強いことが明らかになった。

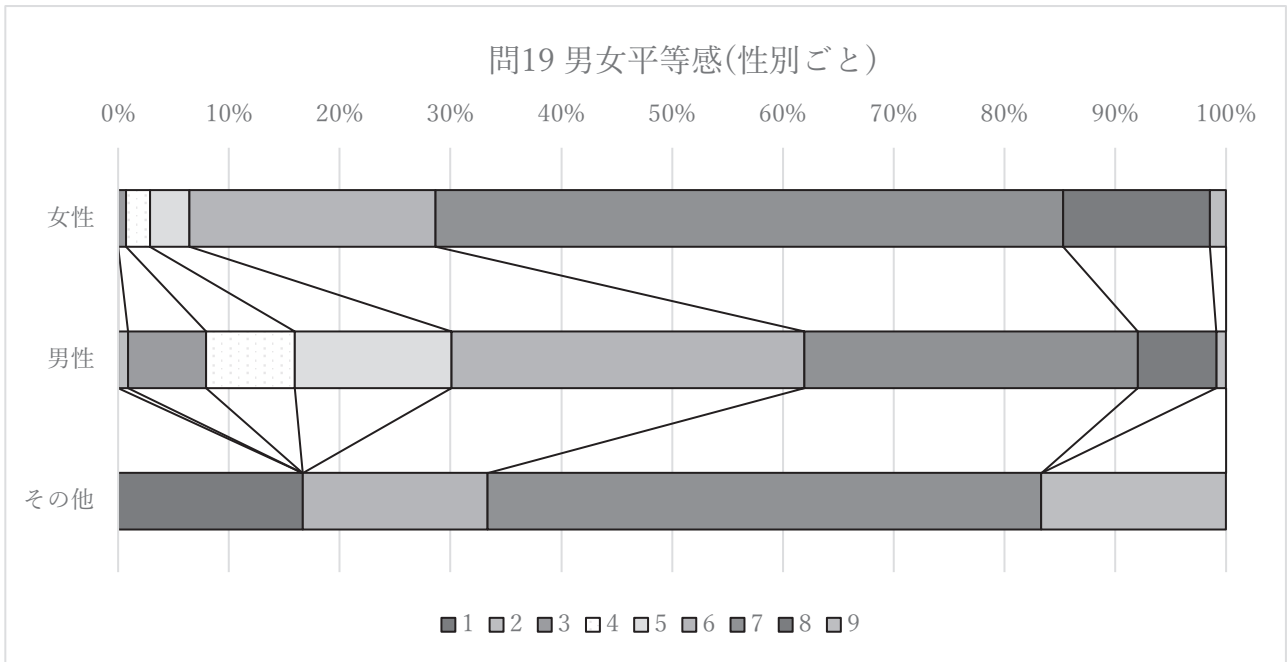


図3(単位：%)

◎問 19 とのクロス集計

次に、なぜ上記の結果のように名市大生が感じるのか考察を進めていく。そのために大学生のリアルなジェンダー観に対する質問である<問 4：女性の化粧について（選択式）>と<問 6：男性が女性に奢る（選択式）>とそれぞれクロス集計を行った。

◎問 19 と問 4 のクロス集計の統計的結果

クロス集計を行った結果、女性においては 1～9 点全体的に問 4 では「どちらかといえばそう思う」を選択している人が多く、女性全体として「女性は人目に出る際化粧をするのがマナーである」と考える傾向が強いことが分かった。一方で男性においては、問 19 で男性優遇社会と回答している人に注目すると問 4 では「化粧はマナーである」と回答する人の割合が大きくなった。全体的に緩やかではあるが、男性優遇であると回答している人の方が問 4 では「どちらかといえばそう思う」を選択する割合が大きい傾向がある。

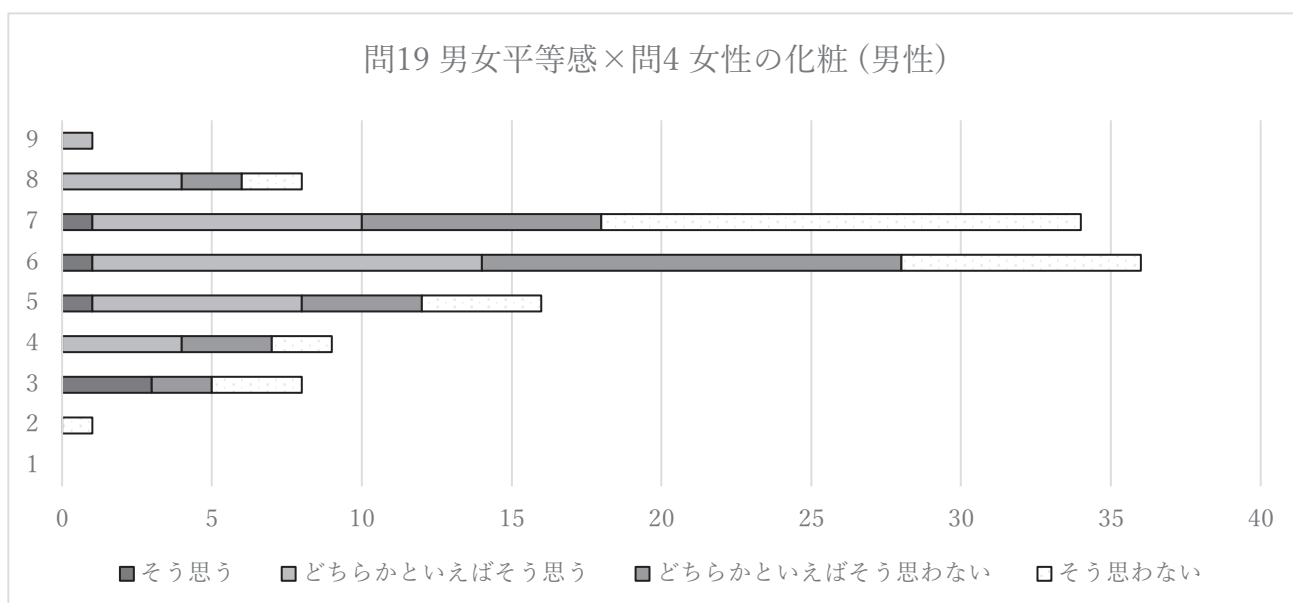


図 4(単位：人)

問 4 \ 問 19	そう思う	どちらかといえばそう思 う	どちらかといえばそう思わ ない	そう思わない
9	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)	0(0.0)
8	0(0.0)	4(50.0)	2(25.0)	2(25.0)
7	1(2.9)	9(26.5)	8(23.5)	16(47.1)
6	1(2.8)	13(36.1)	14(38.9)	8(22.2)
5	1(6.3)	7(43.8)	4(25.0)	4(25.0)
4	0(0.0)	4(44.4)	3(33.3)	2(22.2)
3	3(37.5)	0(0.0)	2(25.0)	3(37.5)
2	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
1	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

表 4(単位：人(%) )

◎問 19 と問 6 のクロス集計の統計的結果

また、男性が女性に奢るべきかという質問に対して、同様に女性は1～9点全体的に「そう思わない」と回答している割合が非常に大きかった。女性は全体として「男性は女性に奢るべき」とは考えない傾向が強い。男性においては、全体的に女性と同様に「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」を選択している人が多い。しかし、問 19 で女性優遇と回答している人は問 6 で「そう思わない」を選択している傾向がある。全体的には問 6 においては「どちらかといえばそう思わない」が最も大きな割合を占めているが、「どちらかといえばそう思う」を選択した人の割合は問 19 で高い点をつけているほど大きくなることも読み取れる。

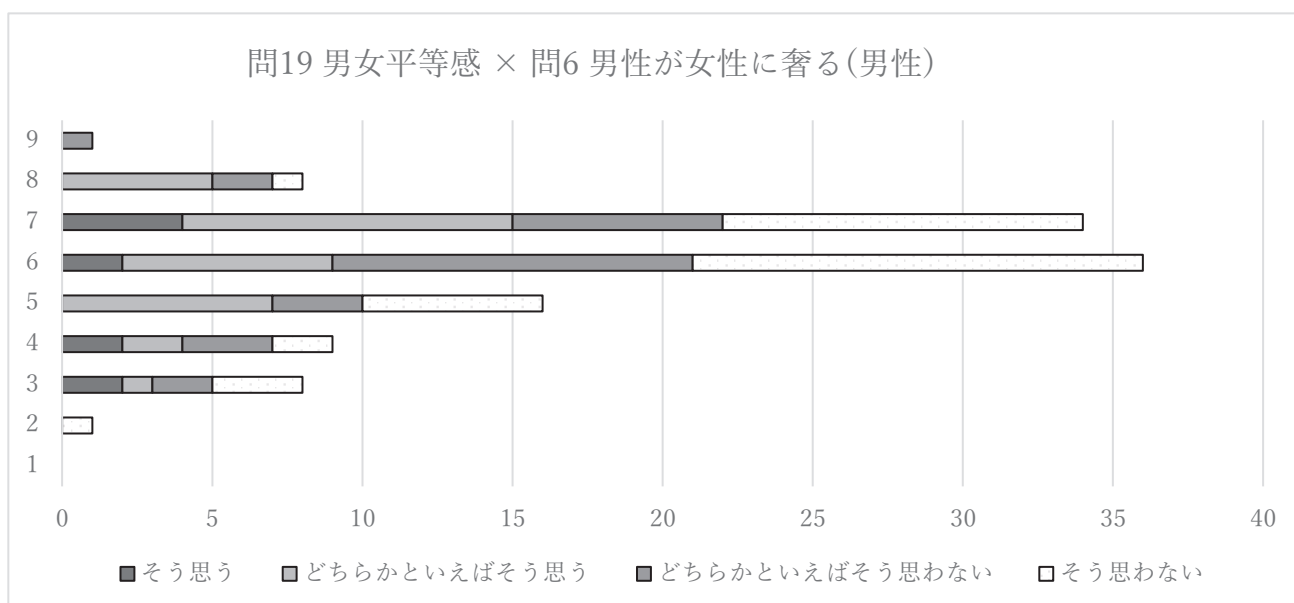


図 5(単位：人)

問19 \ 問6	そう思う	どちらかといえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
9	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)	0(0.0)
8	0(0.0)	5(62.5)	2(25.0)	1(12.5)
7	4(11.8)	11(32.4)	7(20.6)	12(35.3)
6	2(5.6)	7(19.4)	12(33.3)	15(41.7)
5	0(0.0)	7(43.8)	3(18.8)	6(37.5)
4	2(22.2)	2(22.2)	3(33.3)	2(22.2)
3	2(25.0)	1(12.5)	2(25.0)	3(37.5)
2	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100.0)
1	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)

表 5(単位：人(%) )

◎問 19 と他の問とのクロス集計における考察

上記の「女性の化粧」「男性が女性に奢る」についてのそれぞれのクロス集計から、男性において問 19 で男性優遇と回答している一方、問 4 と問 6 でジェンダー的な価値観を反映させた選択肢を選ぶ割合が大きい傾向があることが分かった。このことから、社会全体としては男性優遇と感じていても実際に身近なことになるとジェンダー規範に則るのではないかと考察した。

◎問 19 と問 13 のクロス集計における統計的結果と考察

次に、身近な場としての家庭生活におけるジェンダー観とクロス集計を行いたい。問 13 の家庭での決定権を問う質問と問 19 での回答の傾向を明らかにしていく。男性女性ともに家庭での決定権を

持っていたのは父親である人が多かった。ここで女性の回答に着目すると、問13で父親と選択した割合が大きいほど問19では男性優遇社会と回答する傾向が強まっていることが分かる。このことから、家庭での父親と母親のパワーバランスから男女平等感についても回答に差が生じたのではないかと考察した。

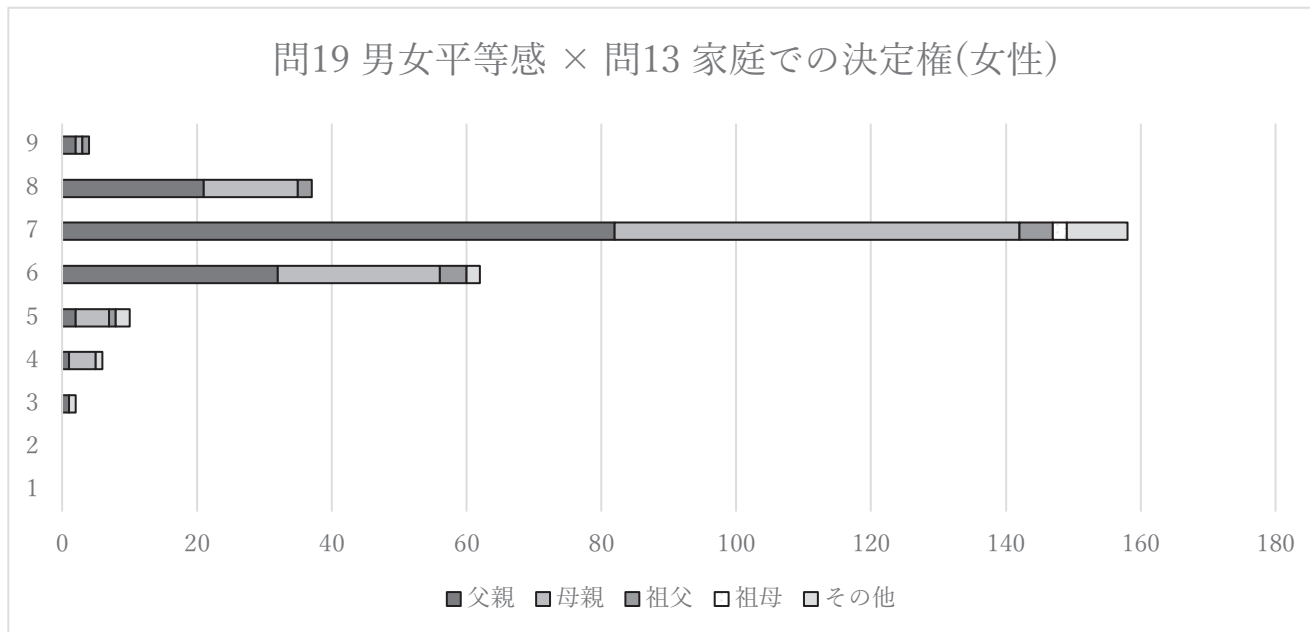


図6(単位：人)

問13 \ 問19	父親	母親	祖父	祖母	その他
9	2 (50.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
8	21 (56.8)	14 (37.8)	2 (5.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
7	82 (51.9)	60 (38.0)	5 (3.2)	2 (1.3)	9 (5.7)
6	32 (51.6)	24 (38.7)	4 (6.5)	0 (0.0)	2 (3.2)
5	2 (20.0)	5 (50.0)	1 (10.0)	0 (0.0)	2 (20.0)
4	1 (16.7)	4 (66.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (16.7)
3	1 (50.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (100.0)
2	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
1	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)

表6(単位：人(%) )

社会課題に対する考え-5 『「ジェンダー」という言葉について』

**問20 あなたは「ジェンダー」という言葉にどのような印象を受けますか。【記述式】**

そもそもの問題の根底にある「ジェンダー」という言葉について、名市大生がどういった印象を持っているのか、どこまで関心があるのかなどを調査し、ジェンダー教育の意義などを考える。



## 分析

### ◎分析方法

得られた回答をその内容から関心度別に六つの群に分け、割合や回答内容から、名市大生の傾向を分析する。群の性質は以下の通り。なお、C群に分類される回答のうち◎がついているものは、「ジェンダー」の辞書的な意味を正しく答えている。

- A群：無回答・何も思わないなどの回答  
 B群：難しい、わからないなど、あまり「ジェンダー」に馴染みがないと推測される回答  
 C群：学術的な定義や意味合いを答えているもの。自分の意見ではないと推測される回答  
 D群：「最近話題である」など、ジェンダーに対して第三者的な印象を抱いている回答  
 E群：「ジェンダー」に対し、一定の感情や意識を持っていると推測される回答  
 F群：「ジェンダー」に対し、問題意識、意見を持っていると推測される回答

### ◎分析 1

#### ○回答の内訳(男性)

群	割合(%)	データ数	主な回答
A	7.0	5	特に何も思わない
		3	無回答
B	4.3	3	難しい
		2	わからない
C	30.0	10	性別
		6	男女平等
		4	LGBTQ(+)
		3	◎社会的性別、性別の問題、男女格差
		2	男女差別
1	SDGs、固定観念、自由、区分、生物学的性、多様性、偏見、男尊女卑、認知的性 など		
D	8.7	10	最近の話題、課題
E	24.3	15	否定的な印象(面倒臭い、複雑、大袈裟・過度、イデオロギー色が強い、フェミニスト)
		10	肯定的な印象(寛容的、性差別撤廃、多様性がある、柔軟な考え方)
		3	その他(個人で多様な考え方がある、など)
F	26.1	30	・使い方を間違えれば、ただ男性を糾弾するだけの言葉になる ・自分は女性でどちらかというと女の子の方が好きだが、誰にも言ったことがない。最近 LGBTQ などが話題に上り、もてはやされるようになったことを受けて、「同情や生ぬる

			<p>い配慮なんていないのに」「ほっといてほしい」と思う。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的な性という意味だけれど、言葉ばかり一人歩きしてとりあえずこれを使っとけば男女格差や性的マイノリティについてわかっています感が否めない。</li> <li>・生物学的なセックスに対しての社会的な性別。社会を見つめ直す視点として必要であると思うが、ジェンダー平等を謳う人にはイデオロギーに縛られた浅薄な印象を抱いてしまう。</li> <li>・みんなが関心を持って寛容になるべきテーマだが、度が過ぎるとフェミニストとか揶揄されているので、触れづらいテーマに思う</li> <li>・ジェンダーの必要性が分からない。人それぞれ個性も異なるのだから男/女/その他などと枠にはめる必要はないと思うし、生物学的性別以外に性別を分ける必要があるのか疑問に思う。</li> </ul> <p>(全回答から一部抜粋)</p>
	100.0	115	

○回答の内訳(女性)

郡	割合(%)	データ数	主な回答
A	11.3	23	特に何も思わない
		8	無回答
B	4.7	4	わからない、説明できない
		3	難しい
		1	とっつきにくい、堅苦しい、縁がない、曖昧、現実味がない、触れてはいけない
C	36.1	17	性別
		15	男女格差、男女問題
		13	男女差別
		12	◎社会的性別
		11	多様性
		6	男女の差異
		5	女性の権利・地位、心の性別
		4	男女平等
		3	固定観念
		2	ジェンダーレス・中性的、男尊女卑、LGBTQ(+)、自由
1	社会的正義、同性愛、自己証明、フェミニズム、寛容、個		

			人の特性、男女の役割、男女の対立、タブー、価値観 など
D	9.1	25	最近の話題、新しい概念、最近の社会問題
E	15.7	26	否定的な印象(格差が存在する、政治的である、うんざりしている、囚われすぎる、厄介な考え方、世に広まっていない)
		9	肯定的な印象(様性がある、議論が進んでいる、幅広い考え方、リベラル)
		8	その他(皆が考えるべき課題、平等にしていくべき、など)
F	25.2	69	<p>・これが語られるときは「誰かが傷ついている」という話になることが多いので、自分も知らぬ間に誰かを傷つけてはいまいかと、多少身構える部分がある。自由である一方、繊細でもあるという印象。</p> <p>・ジェンダーということばを強調するほど、男女やトランスジェンダーに差別やギャップがあるということが強まっている感じがする</p> <p>・ジェンダーは社会的・文化的な性差なので、あくまで「そう呼んだら通じやすい」くらいのものだと思っています。全性愛者なので、そもそも性別をあまり気にしていません。</p> <p>・統計的差別による女性の雇用機会の減少など現代社会において改善されるべき問題はあると思う。ただ男性と女性の身体的特徴の差異など生得的なものについて考慮する区別は必要だと思う。</p> <p>・ジェンダーという言葉は、確かに現状では取り上げるべきトピックとして成立し得るが、本当の意味で平等が確立されて、それが当たり前になったときには、消えていく言葉だと思う</p> <p>・現在は主に女性に焦点が当たっている。もちろん女性の地位向上は必要だが、男性に焦点を当てたり、男性女性に囚われない考え方に焦点を当てたりしてもよいのではないかな。</p> <p>(全回答から一部抜粋)</p>
	100.0	274	

○回答の内訳(「男性」「女性」以外の性別)

性別	群	回答
その他(答えたくない)	B	難しい
	C	精神面・嗜好の観点における性、社会的性別、格差、多様性
	D	最近聞くようになった
無回答	F	社会的な性別という意味だと習ったことがあります が生物学上の性別と区別するときに便利な言葉だ なと思っただけです。日常生活で使う人を見ると ちよつと小難しい言葉を使うのが好きな人な のかなと感じるかもしれません。学問上の用語 として使う印象です。
クエスチョニング <sup>9</sup>	C	性別
クィア <sup>10</sup>	F	ジェンダーによる差別が無くなればい いとは思いますが、完全に無くすのは 難しいと思う。
X ジェンダー <sup>11</sup>	F	ジェンダーに囚われない時代になっ てきたことはいと思います、ジェン ダーを意識しすぎて会話でも気を つけないといけないのは少し疲れる なと思います。新聞でスポーツ選 手に対してイケメンとかを使用し てはならないと IOC が見解を出 したと掲載されていて、正直イケ メンとすら言うてはいけないとな ると素直に感想を言えなくなるな と感じたことがあります。このよ うにジェンダーを意識した会話を するのは現時点では大変だと思 いました。

<sup>9</sup> クエスチョニング：自身の性自認（自分の抱く性）・性指向（好きになる性）が決まっていな  
いセクシュアリティのこと。

『USA TODAY』 “What does the Q in LGBTQ stand for?”

<https://www.usatoday.com/story/news/nation-now/2015/06/01/lgbtq-questioning-queer-meaning/26925563/>、（参照  
2021-11-22）

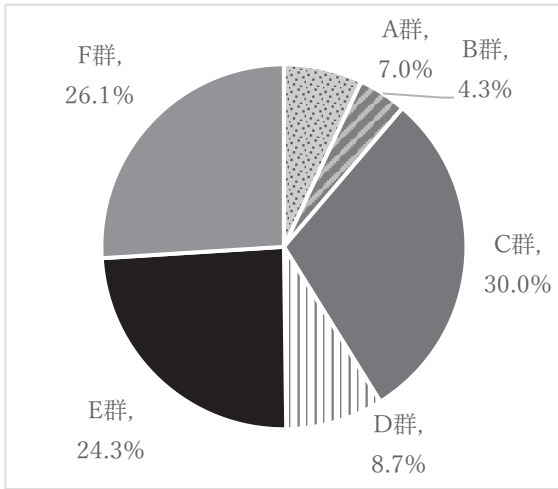
<sup>10</sup> クィア：「不思議な」「風変わりな」「奇妙な」などを表す英語。かつては同性愛者への侮蔑語であ  
ったが、1990年代以降は性的少数者や、LGBTのどれにもあてはまらない性的なアウトサイダー全体をも  
包括する用語として肯定的な意味で使われている。

（前掲『USA TODAY』“What does the Q in LGBTQ stand for?”）

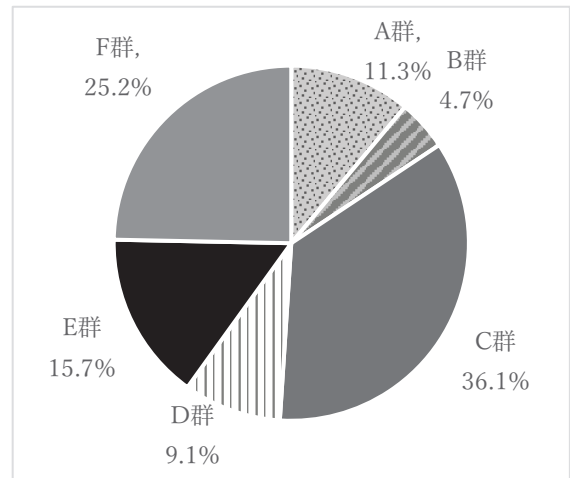
<sup>11</sup> X ジェンダー：「(身体的性に関係なく) 性自認が男性にも女性にもあてはまらない」セクシュア  
リティを指す。日本で生まれた概念。

（『性別が、ない！～両性具有の物語～ 6巻』 p9、新井祥、2009年）

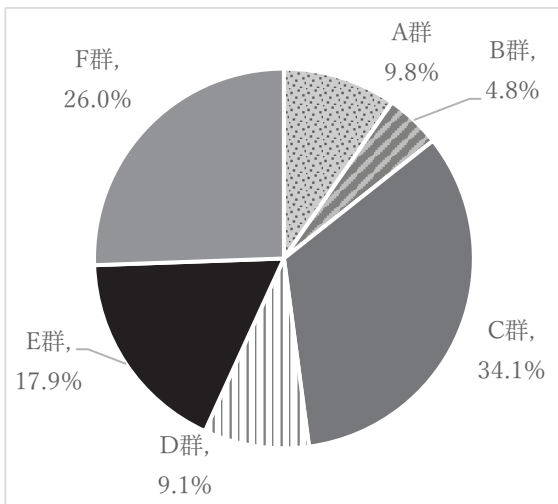
○解答群別割合(男性) ※有効回答数：115



○解答群別割合(女性) ※有効回答数：274



○解答群別割合(全体) ※有効回答数：396



◎考察

男女・全体の結果で郡別の割合に大きな違いはみられず、A群・B群に分類される回答が少なく、F群回答が多かったことから全体的な名市大の学生の特徴として「ジェンダー」に関してそれなりに関心度や自分の意見や関心を持っており、世間の反応や対応にも敏感であることが推測される。

C群の回答が最も多く、「ジェンダー」の正しい定義である「社会的性別」の回答も多かったが、一方で「生物学的性別」など反対の意味を表すとの回答や、他にも様々な意味合いの回答があり、「ジェンダー」の認知度のほか、人によって捉えている意味合いのばらつきが見られた。このばらつきは男女間でも傾向が僅かに異なり、男女ともに最も回答者の多かった「性別」を外すと、次点が男性では「男女平等」、「LGBTQ(+)」と続き、一方で女性の回答は「男女格差」「男女問題」、「男女差別」の順になる。比較的女性の方が「ジェンダー」に対してネガティブな印象や問題意識を感じているほか、女性の回答には「女性の権利・地位」を意味とするものもあり、日常生活で「ジェンダー」

を実感するタイミングやその状況が、男女間で異なることが背景にあると予測される。

D 群の回答者も男女ともに一定数存在し、ジェンダーに対し一定の解釈を得た上で世の中の対応や風潮にも敏感であると予測できるほか、どこか他人事のような無関心に近い感覚を持っているとの予測もでき、詳細に関しては他のデータと照らし合わせるほか、追加調査が必要であろう。

E・F群の回答からは一元的な感想にとどまらない様々な意見が見られた。特筆すべき点としてはE群：「うんざりしている」など、「ジェンダー」という言葉に現代社会が過度に敏感になり、思想色が強くなっている、という意見が多く見られたことである。「ジェンダー」が真の意味で活用されておらず、それによって学生自身が触れづらくなったり、否定的な印象を持ったりする傾向があるとも予測される。

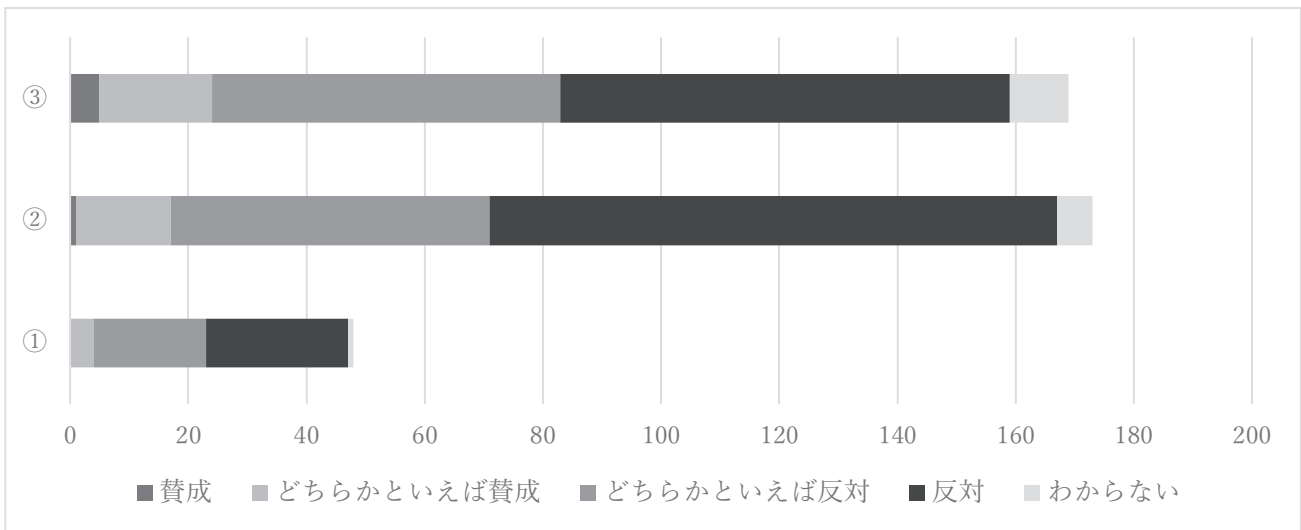
以上のことから、名市大の学生は「ジェンダー」対してある程度の見解や知識を持ち、解釈をしていると考えられる。世間の動きや学術的な「ジェンダー」の分野にも敏感な彼らにとって「ジェンダー」は、ひたすら良い印象を持つものではなく、脆弱性や曖昧さ、詭弁性をはじめとするネガティブな印象をも内包する言葉である。

### ◎分析 2

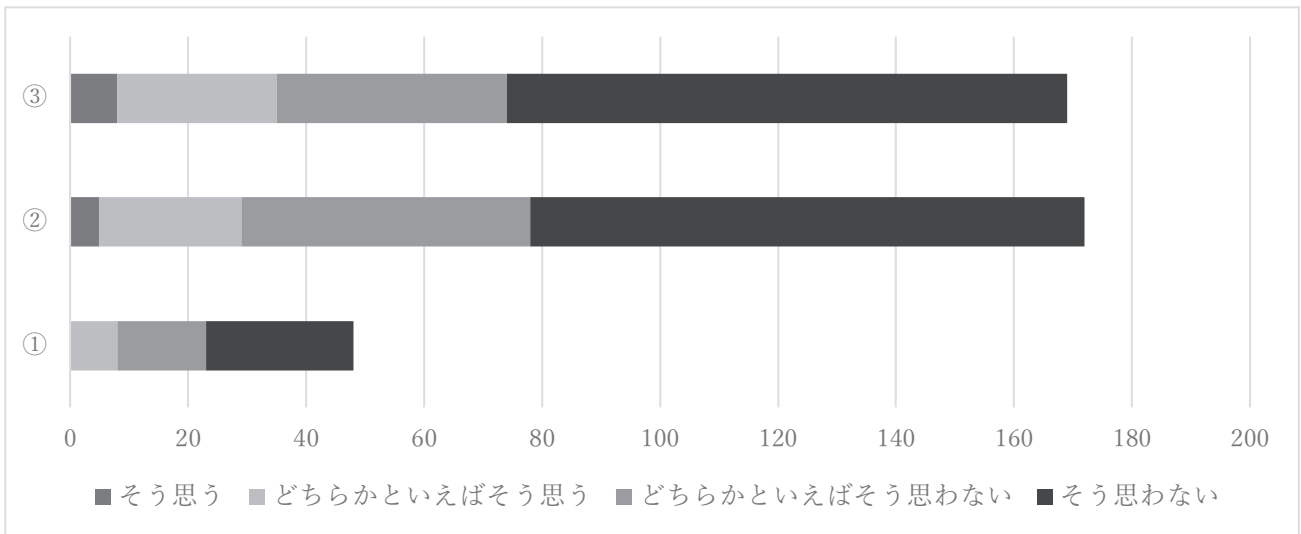
①A・B群 ②C・D群 ③E・F群 に分類し、他の質問の回答とクロス集計を行う。

「ジェンダー」に対する印象と、日常生活におけるジェンダー観の相関を調べる。

#### ○問 1（性別役割分担）とのクロス集計



○問6（男性が奢るべきか）とのクロス集計



◎考察

「ジェンダー」に対する印象と、日常生活のけるジェンダー観を伴った行動基準・価値基準の関係性に、群別で解答の傾向に大きな差は見られなかった。

個々人の「ジェンダー」に対する印象とは関係なく社会の慣習や常識として、ジェンダー平等を意識した「男・女」のあるべき姿が根付いているのであろう。

学校現場におけるジェンダー教育の広がりも、上述の「社会慣習・常識」としてのジェンダー観を普及させていると考えられる。

2017年度から高校の家庭総合・家庭基礎の教科書に「LGBT」が記載されるようになり、2019年度からは中学校の道徳の教科書でLGBTについて取り上げるようになった。さらに、2020年度から小学校の保健体育の教科書にもLGBTについての記載が追加されるなど、ジェンダー教育の門戸は経年ごとに幼年まで開いており、当たり前存在する概念として教育現場で取り扱われている。調査の対象とした名市大の学生もこれまでの学校生活においてそのような風潮を受けてきたことが推測される。

さらに、このようなジェンダー教育の広がりや、性的少数であると自認している学生にとってもそれを公言しやすくさせているのではないだろうか。今回問20の考察をするにあたり、自身の性別を「男」「女」以外であると自認する学生からの回答が一定数見られた。

「ジェンダーの印象」という彼らにとってセンシティブな質問に対し、性自認を明らかにしつつ、意見を公表できる寛容さがあったのではないかと思われる。

ジェンダー教育の意義とは、性的少数と呼ばれる概念や人たちが、ごくあたりまえに社会・人々の中に存在することにあると考察した。

#### 〈第4項 総括〉

第4項では、社会問題に関する質問から現在の社会に対する学生の考えを見てきた。まず問16の同性婚については、賛成/肯定の意見を示す人が大半であったが、男女で差があった。「同性カップルであるから子どもを産み育てることはない」という固定概念からの脱出や、同性愛者・同性カップルに対する社会の理解を進めていくことが急務であると同時に、「結婚」という行為のあり方を今一度考えていく必要性を感じた。問17の選択的夫婦別姓については、こちらも大半の人が賛成をしている反面、男女でこの制度についての捉え方や意見の立場に違いが見られた。制度上難しいとする意見もあるが、まずは「女性が男性の名字に必ず変えるもの」という固定観念からの脱却と現行制度を踏まえた上での慎重な議論が必要であろう。問18の学校制服についても、学生が自由に選択できるようにするべきという回答が最も多かった。問16～18でわかるのは、名市大生はジェンダーに関する社会問題についてこれまで以上に寛容にするべきという意見が多いということである。

問19では今の社会をどちらかという男性優遇だとする人が最多であったが、身近な行動や家庭環境から影響を受けていたことがわかる。男性優遇社会だと感じている人が多いからこそ、問16～18において、より寛容的な制度を求める声が多いのだとも推測ができる。

最後に問20については、ジェンダーについて様々な意見が見られた。学術的に正しいとされる語彙の意味はあるが、それ以上にジェンダーという言葉に何かの問題をあげていたり、ネガティブな意見もあつたりすることから、名市大生はジェンダーについては大きな社会課題として認識していることがわかる。



## 第3章 研究のまとめ

### 第1節 まとめ

大学生のジェンダー観を調査するにあたり、はじめに名古屋市が行った「男女平等参画に関する大学生の意識調査(2016)」や近畿大学の「2016年度近畿大学 大学生人権意識調査(2017)」を先行研究として参考にした。先行研究から、大学生は親世代とは異なり性別役割分担には否定的なことがわかった。しかし、男性は女性と比べてやや性別役割規範を肯定する傾向にあり、家庭で「男らしさ」を求める発言をされた経験、学校で対応に男女差を感じた経験が、男性のジェンダー意識において男性性規範を肯定するような影響を及ぼしていることが覗かれた。また、ライフプランについて、男女ともにワーク・ライフ・バランスを理想とする人が最も多かった一方で、次点で女子学生、男子学生ともに従来の性別役割分担意識を反映した人生キャリアを思い浮かべる傾向があることが明らかとなった。性別役割分担に否定的な意見を持つ学生は多いが、自分やパートナーの将来のことになると性別役割分担意識に基づいた考え方をしてしまう人が多いのではないかとということが考えられた。

以上の先行研究の結果を踏まえ、その中で特に大学生に特徴的なジェンダー観が見られるのではないかと考えた、性別役割分担などのジェンダー観、育児休暇を取得するかなどのライフプラン、同性婚や夫婦別姓などの家族観の3項目について質問を行うこととし、質問を作成した。

アンケート調査の結果、ジェンダー観の項目から、名市大生のジェンダー観は伝統的な性別役割分担意識が薄れてきているとわかった。しかし、大学生の日常的な行動には依然伝統的なジェンダー観が残っており、特に女性は化粧をすべき、男性は食事を奢るべきと、女性/男性自身がそう考えていることから、自分ごととなると周りの目を気にして、伝統的な考えに影響を強く受けていることがわかった。

ライフプランからは、自分とパートナーそれぞれが家庭と仕事を分担し、両立しながら家庭生活を歩んでいくことを望む意見が多く見られた。しかし、異性に対してのライフプランについては寛容な態度を示す回答が多くなる一方で、自分自身に対しては性別役割分担の考え方を強く意識する傾向がみられ、社会問題としての性別役割分担には反対していても、自分やパートナーのライフプランという身近な場面においては、無意識のうちに性別役割分担意識に基づいた考え方をしているのではないだろうか。

家族観から、家庭内での決定権・家事の役割分担については、男女のどちらかに偏っている傾向が強いことが明らかとなり、家族観に関して性別役割分担意識が影響を与えていることが考えられる。さらに、家族から「男らしさ/女らしさ」を求められた経験が家庭内での役割分担意識の形成に影響を与えていることが分かった。

ジェンダーに関する社会課題についての考えを質問した項からは、男女の地位の差について、今の社会をどちらかという男性優遇だとする人が最も多く、身近な行動や家庭環境から影響を受けていたことがわかった。また、同性婚、選択的夫婦別姓については、賛成/肯定の意見を示す人が大半であった。男性優遇社会だと感じている人が多いからこそ、現代社会により寛容的な制度を求め

る声が多いのではないだろうか。

全体を通して名市大生は、伝統的な性別役割分担意識に否定的な態度と、より高いジェンダー意識、そしてジェンダー問題に寛容な態度を持っていることがわかった。同性婚など社会で起きているジェンダー問題に対する関心の高さと賛成の多さや、伝統的な性別役割分担への反抗、自身とパートナーそれぞれが家事と仕事を両立していく姿勢などからそうした態度がうかがえた。先行研究と比較しても、各質問、項で伝統的な性別役割分担意識に反対する回答の傾向が強く、名市大生はより高いジェンダー平等意識を持っていることがわかった。特に先行研究でみられた、男女間での性別役割分担意識に対する肯定/否定の差が縮まっている点、将来のライフプランにおいて女性の仕事の継続型が再就職型より多い点に名市大生の特徴がみられた。

しかし、ジェンダーに対し寛容な面があった一方で、自身やパートナーの身近で具体的なこととなると伝統的なジェンダー意識の影響を依然強く受けていることが推察された。例えば、性別役割分担には反対していながら、自身のライフプランについては性別役割分担の考えを持っている人や、女性の化粧や男性は食事をおごるべきかについての質問から、主に性別役割分担を押し付けられている側の人々自身が、その考えを支持する回答を示していることが目立った。ここから、社会的なジェンダー観には反発しているが、自身を含む個人に求める考え・行動には伝統的なジェンダー観が現れることがいえる。社会課題としてのジェンダー観には寛容に、対して自身の実生活におけるジェンダー観は伝統に基づいているという矛盾は、周りの目を気にするといったことから無意識に作用していると考えられ、性別役割分担意識の潜在化が起きているといえる。この傾向は近畿大学における調査からも見受けられ、名市大生・近畿大生に共通していることから、大学生や若者全体にもこの傾向がみられるのではないかと考える。今後はこうした潜在的な性別役割分担意識をより明らかにし、さらにそれを解消していくような取り組みを行っていくことが、男女共同参画社会、ジェンダー平等社会の更なる推進につながるだろう。

## 第2節 今後に向けて

本調査の結果として得られた性別役割分担意識について否定的傾向が見られたことや男性の家庭参加・女性の労働参加の意識の向上は男女共同参画社会の実現が叫ばれている現在の社会にとっては良い傾向であると言える。これは、現代社会において疑問視されている事柄や、問題提起されている事柄について意識している人が増えてきているということが原因であると推測される。しかし、問題提起されていない事柄については意識している人が少ない傾向がみられたことから、今後も大学生一人一人がジェンダー観について考える機会や大学生のジェンダー意識を調査する機会を作っていくことで、より多くの問題提起を行っていくことが必要であると考えられる。

一方、男性が奢るべきという考え方や女性の化粧、家庭内の決定権の偏りなど、昔からの固定観念が色濃く残っている部分も見られる。そして、これらの固定観念には両親の考え方が一因となっていることが結果からも推測される。そのため、若者だけではなく親の世代などでも広く認識されるような取り組みを行うことで、男女格差の是正が進めやすくなるのではないかと考える。また、現代のジェンダー観がスタンダードになるような空気感を作っていくということも必要であると思

う。それを行うことで男女平等、格差の是正は促進され、そして実現するのではないかと考えるからである。その空気感は、若者の方が現代のジェンダー観に肯定的であるため、作りやすいと言える。そのため若者を中心として作っていくが、若者だけではなく全員で作りに上げていくことが実現に向けて重要であると思われる。しかし、それが差別などにつながる危険性も存在する。例えば時代に即しているからと言って価値観を押し付け、その人の持っている価値観を否定するようなことはしてはいけない。そのため、どのように形成していくのかについて考え、男女共同参画社会を実現できるように実行していくことが望まれる。

最後になるが、本調査にご協力くださった名古屋市立大学の先生方や学生、そして私たち菊地班の指導教員である菊地夏野先生には深く御礼申し上げます。

## 第4章 研究資料

調査対象者向けアンケート調査協力依頼用紙

本調査研究アンケート用紙

## 調査対象者向けアンケート調査協力依頼用紙

大学生のジェンダー観に関するアンケート調査のお願い

名古屋市立大学 人文社会学部 現代社会学科 2年  
2021年度社会調査実習 菊地班  
福井敢太 石田楓花 江口和輝 高浪将吾 前田雅  
村山マドカ 森川柚穂 山田旺子 山田有輝  
連絡先 kikutihhan2021@gmail.com

ごあいさつ

わたしたちは「大学生のジェンダー観」をテーマで調査を行っています。

今回その一環として、大学生の皆さんが学生生活を送ったり、将来のライフプランを考える中で、ジェンダーについて感じたり考えたりすることをお聞きすることで、大学生が感じているリアルなジェンダー観について調査したいと考えています。将来社会の中心を担っていく大学生のジェンダー観を調査することで、男女共同参画社会の実現に向け具体的な課題を明確にしていくことが本調査の目的であります。

なおこのアンケートでは個人の特定はいたしません。今回ご記入いただいたデータは、調査実習以外の目的では使用いたしません。ご協力お願いいたします。

また、このアンケートは複数の授業で実施していただいているため、すでに別の授業で回答された方は重ねての回答をお控えくださいますようお願いいたします。

### 回答方法

こちらの URL か QR コードからご回答ください。ご協力よろしくお願いいたします。

URL

<https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSe6xkypeOMoreceKsZc94mztxz6xpByjTtBfxUnwkwswAllg/viewform>

QR コード



担当教員 菊地夏野  
〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町字山の畑 1  
名古屋市立大学人間文化研究科  
Tel 052-872-5171  
Mail kikuchi@hum.nagoya-cu.ac.jp

# 本調査研究アンケート用紙

大学生のジェンダー観に関するアンケート調査のお願い

名古屋市立大学 人文社会学部 現代社会学科2年  
2021年度社会調査実習 菊地班

ごあいさつ

わたしたちは「大学生のジェンダー観」をテーマで調査を行っています。

今回その一環として、大学生の皆さんが学生生活を送ったり、将来のライフプランを考える中で、ジェンダーについて感じたり考えたりすることをお聞きすることで、大学生が感じているリアルなジェンダー観について調査したいと考えています。

なおこのアンケートでは個人の特定はいたしません。また、今回ご記入いただいたデータは、調査実習以外の目的では使用いたしません。ご協力お願いいたします。

また、このアンケートは複数の授業で実施していただいているため、すでに別の授業で回答された方は重ねての回答をお控えくださいますようお願いいたします。

選択肢の当てはまる数字を右側の回答欄に記入してください

問1 「夫は外で働き、妻は家庭を守るべき」という考え方について、あなたのご意見にもっとも近いものはどれでしょうか。【当てはまる番号1つだけを記入】

1 賛成 2 どちらかといえば賛成 3 どちらかといえば反対 4 反対 5 わからない

回答欄

問1-1 問1で「賛成」「どちらかといえば賛成」と答えた方におたずねします。  
それはなぜですか。【当てはまる番号をすべて記入】

1 日本の伝統的な家族の在り方だと思うから  
2 自分の両親も役割分担をしていたから  
3 夫だけが外で働いた方が、多くの収入を得られると思うから  
4 妻が家庭を守った方が、子供の成長にとって良いと思うから  
5 家事・育児・介護と両立しながら妻が働き続けられる制度が整っていないから  
6 その他（具体的に：\_\_\_\_\_）  
7 わからない

問1-2 問1で「反対」「どちらかといえば反対」と答えた方におたずねします。  
それはなぜですか。【当てはまる番号をすべて記入】

1 男女平等に反すると思うから  
2 自分の両親も外で働いていたから  
3 夫も妻も働いた方が、多くの収入を得られると思うから  
4 妻が働いて能力を発揮した方が、個人や社会にとって良いと思うから  
5 夫も妻も家事・育児を行い、働いた方が、子供の成長などにとって良いと思うから  
6 家事・育児・介護と両立しながら妻が働き続けられる制度が整っているから  
7 固定的な夫と妻の役割分担の意識を押し付けるべきではないから  
8 その他（具体的に：\_\_\_\_\_）  
9 わからない



問2 あなたは自分自身の性格についてどう思っていますか。【当てはまる番号1つだけを記入】

- 1 男らしいと思う 2 どちらかといえば男らしいと思う  
3 どちらかといえば女らしいと思う 4 女らしいと思う  
5 わからない

問3 あなたの理想の恋人の条件について、当てはまるものを選んでください。

【当てはまる番号をすべて記入】

- 1 年上 2 年下 3 同い年 4 誠実な 5 上品な 6 従順な 7 優しい 8 面白い  
9 活発な 10 寛容な 11 幼げな 12 大柄な 13 小柄な 14 家庭的 15 細身な  
16 感情豊か 17 一途な 18 背が高い 19 大人びた 20 かわいい 21 カッコいい  
22 意志が強い 23 たくましい 24 おしゃれな 25 ふくよかな 26 話がうまい  
27 話しやすい 28 趣味が合う 29 礼儀正しい 30 さわやかな 31 容姿が好み  
32 経済力がある 33 甘えてくれる 34 将来性がある 35 クールな 36 大人しい  
37 料理ができる 38 包容力がある 39 親しみやすい 40 居心地がいい  
41 プライドがある 42 頼りがいがある 43 ギャップがある 44 交友関係が広い  
45 価値観が似ている 46 人として尊敬できる 47 素の自分で居られる  
48 支えがいのある 49 自分にないものを持っている  
50 自分の気持ちを伝えてくれる

問4 女性は人前に出る際化粧をするのがマナーだと思いますか。あなたの考えにもっとも近いと思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 そう思う 2 どちらかといえばそう思う  
3 どちらかといえばそう思わない 4 そう思わない

問5 女性の方に質問です。あなたが化粧をする理由は何ですか。あなたの考えにもっとも近いと思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 マナーだと思うから  
2 化粧することが好きだから  
3 周りの目が気になるから  
4 自分の顔を隠したいから  
5 周りの人がしているから  
6 自分をきれいに見せたいから  
7 化粧はしない  
8 その他（具体的に：\_\_\_\_\_）

問6 男女で食事に出かけたら、男性が奢るべきであると思いますか。あなたの考えにもっとも近いと思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 そう思う 2 どちらかといえばそう思う  
3 どちらかといえばそう思わない 4 そう思わない

問7 男性の方に質問です。あなたが女性に奢る/奢りたいと思うのはなぜですか。あなたの考えにもっとも近いと思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 義務だと思うから
- 2 相手に求められるから
- 3 周りの男性もしているから
- 4 自分の方が経済力があるから
- 5 相手を喜ばせたいから
- 6 奢らない
- 7 その他（具体的に：\_\_\_\_\_）

問8 あなたは就職先を選ぶときに次のうちどのような項目を重視しますか。あなたの考えに当てはまる番号をすべて選択し、記入してください。

【当てはまる番号をすべて記入、一番重視するものに◎】

- |                |                    |             |
|----------------|--------------------|-------------|
| 1 将来性          | 2 安定性              | 3 企業規模      |
| 4 仕事内容         | 5 職場の雰囲気           | 6 福利厚生・休業制度 |
| 7 男女格差がない      | 8 給料が高い            | 9 知名度       |
| 10 家庭との両立のしやすさ | 11 その他（具体的に：_____） |             |

問9 あなたが夢見る理想の家庭生活について想像してもっとも当てはまると思う番号を選択し、記入してください。

① 自分について【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 結婚しないで仕事を続ける
- 2 結婚したら仕事を辞める
- 3 結婚しても子供はつくらず仕事を続ける
- 4 子供ができてても仕事を続ける
- 5 子供ができたなら子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働く
- 6 子供ができたなら子育てのために仕事を辞め家事・育児に集中する
- 7 その他（具体的に：\_\_\_\_\_）

② パートナーについて【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 結婚しても子供はつくらず仕事を続けてほしい
- 2 結婚したら仕事を辞めてほしい
- 3 子供ができてても仕事を続けてほしい
- 4 子供ができたなら子育てのために仕事を辞め子供が大きくなったらまた働いてほしい
- 5 子供ができたなら子育てのために仕事を辞め家事・育児に集中してほしい
- 6 パートナーと暮らすことは考えていない
- 7 その他（具体的に：\_\_\_\_\_）



問10 あなたが将来パートナーと暮らすとしたら、家事はどのように分担しようと思いますか。あなたの考えにもっとも近いと思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- |                |                   |
|----------------|-------------------|
| 1 自分中心         | 2 どちらかといえば自分中心    |
| 3 自分とパートナーほぼ半々 | 4 どちらかといえばパートナー中心 |
| 5 パートナー中心      |                   |

問11 将来、仕事と家庭生活のどちらに重点を置くかについて、あなたの理想についてもっとも当てはまると思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- |               |                  |
|---------------|------------------|
| 1 仕事中心        | 2 どちらかといえば仕事中心   |
| 3 仕事と家庭生活ほぼ半々 | 4 どちらかといえば家庭生活中心 |
| 5 家庭生活中心      |                  |

問12 あなたは将来育児休業(産前産後休業ではない)を取得したいと思いますか。あなたの理想にもっとも当てはまると思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- |                  |                    |
|------------------|--------------------|
| 1 自分だけがとる        | 2 パートナーだけがとる       |
| 3 自分とパートナーの両方がとる | 4 自分とパートナーの両方が取らない |

問13 あなたの家族について、家庭内での決定権を持っていた人は誰ですか。当てはまる番号を選択し、記入してください。

【当てはまる番号一つだけを記入】

- |      |      |      |      |           |
|------|------|------|------|-----------|
| 1 父親 | 2 母親 | 3 祖父 | 4 祖母 | 5 その他 ( ) |
|------|------|------|------|-----------|

問14 あなたの家族について、家事を主に担っていた人は誰ですか。当てはまる番号を選択し、記入してください。

【当てはまる番号一つだけを記入】

- |      |      |      |      |           |
|------|------|------|------|-----------|
| 1 父親 | 2 母親 | 3 祖父 | 4 祖母 | 5 その他 ( ) |
|------|------|------|------|-----------|

問15 あなたは家族から「男らしさ/女らしさ」を求められた経験がありますか。また、その時にどう感じましたか。【記述式】

問 16 あなたは同性婚についてどのように考えていますか。あなたの意見を教えてください。【記述式】

問 17 あなたは選択的夫婦別姓についてどのように考えていますか。あなたの意見を教えてください。  
【記述式】

問 18 学校制服の在り方について、どのようにすべきだと考えていますか。あなたの意見にもっとも当てはまると思う番号を選択し、記入してください。【当てはまる番号一つだけを記入】

- 1 戸籍上の性別に従って学校側で決定すべきだ
  - 2 学校側が申請を受け付け、許可した生徒に限っては戸籍上の性別と異なる制服も認めるべきだ
  - 3 学生が自由に選択・変更できるようにすべきだ
  - 4 私服の着用を認めるべきだ

問 19 あなたは、社会全体で男女の地位は平等になっていると思いますか。数直線上であなたの意見にもっとも近い場所に↓を書いてください。



【女性優位】

【男女平等】

【男性優位】

問 20 あなたは「ジェンダー」という言葉にどのような印象を受けますか。率直な意見をお書きください。  
【記述式】

最後に、あなた自身のことについておたずねします。

問 21 性別 【当てはまる番号一つだけを記入】

1 女性      2 男性      3 その他（任意 \_\_\_\_\_）

問 22 学年 【当てはまる番号一つだけを記入】

1 学部 1 年      2 学部 2 年      3 学部 3 年      4 学部 4 年  
5 学部 5・6 年      6 その他（\_\_\_\_\_）

問 23 学部 【当てはまる番号一つだけを記入】

1 医学部      2 薬学部      3 経済学部      4 芸術工学部      5 看護学部  
6 総合生命理学部      7 人文社会学部(国際文化)      8 人文社会学部(現代社会)  
9 人文社会学部(心理教育)      10 その他（\_\_\_\_\_）

問 24 生活スタイル 【当てはまる番号一つだけを記入】

1 家族と同居      2 一人暮らし      3 その他（\_\_\_\_\_）

問 25 高校生の時、あなたはどこにお住まいでしたか。 【記述式】

1 国内(\_\_\_\_\_ 都 道 府 県)  
2 その他(\_\_\_\_\_)

調査は以上です。ご協力ありがとうございました。

## 第5章 編集後記

石田楓花

この実習では、アンケートの作成、調査の依頼方法のような基礎的な能力から、ジェンダーに関する専門的な知識まで今後の大学生活で必要となる様々な事柄を学ぶことができ、有意義な時間を過ごせました。はじめての経験で不安が大きかったこの調査実習ですが、気さくで温かい班員の皆さんに多くの場面で助けられ、非常に心強かったです。菊地班の皆さん並びにこの調査に関わってくださったすべての方々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

猪塚雄大

社会調査実習の授業を通して、アポ取りやインタビュー調査など普段はできない貴重な体験をすることで、改めて社会調査の意義を感じました。また、データ分析などの具体的な調査に関わる手法を学んだことは、今後の学修にも活かすことができると感じ、非常に勉強になりました。調査にご協力いただいた方々、菊地先生、そして班員の皆さん、改めてありがとうございました。

江口和輝

一年間社会調査実習を行ってきてもうまいかないこともたくさんあったが、最後までやり切ることが出来てとても良かった。菊地班のみんなをはじめ私たちの調査に携わってくれた人たちに感謝しかありません。ありがとうございました。

後藤さなえ

探り探りの状態で始めた社会調査実習でしたが、この活動を通じて「調査実習」の技法を、身をもって体験できただけでなく、様々な意見に触れることで、自身のジェンダー観を再考する機会にもなったかと思えます。実習の足手まといになっていないか心配でしたが、なんとかやり遂げられたのは実習班の皆さん、そして菊地先生のおかげです。調査にご協力いただいた方々にも感謝が尽きません。皆様、本当にありがとうございました。

高浪将吾

今回の実習を通して、本格的な社会調査を自分たちで企画し、多くの方々の協力のもと実施、分析し、一つの形としてまとめられたことは、今後の大学での学びに確実に生きてくる経験になったと思えます。他の班に比べてメンバーは少なかったですが、だからこそ班員同士の結束はとて深く、ハードなスケジュールでも団結して楽しくやり遂げることができました。菊地班のメンバーには助けられっぱなしで本当に感謝しかなく、この出会いに感謝したいです。

最後になりましたが、時に厳しい意見も交えながらご指導いただいた菊地先生、並びにアンケート調査にご協力いただいたすべての方に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

福井敢太

1年前の今頃、社会調査実習などといっても所詮調べ学習や自由研究に毛が生えた程度であろうと高を

括っておりました。しかし、実際の社会調査実習はただ調べることを目的としたそれらの活動とは大きく異なっていました。特に、調査目的を明確にするという研究の在り方や、自分の興味をどうやって研究レベルまで落とし込むかなどの実践はとても貴重な経験となりました。このように実りある社会調査実習となったのも、指導教員である菊地夏野先生と班員の皆様、そして調査にご協力いただいた先生並びに学生の方々のお陰です。皆様にこの場を借りて心よりお礼申し上げます。

前田雅

実習を行う上で、数々の困難もありましたが、それらを乗り越えられたのは頼りになる班のメンバーがいたおかげだと痛感しています。実習を通じて得た経験と仲間達は、私の人生における貴重な財産となりました。

最後になりましたが、ご指導いただいた菊地先生、実習にご協力いただいた方々、そして1年間共に頑張ってきた班員達に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

村山マドカ

ほんとにみんなの足を引っ張ってばかりだった記憶しかないですが、楽しく出来て良かったです。上手くいかなかったり歩調が合わなかったりしましたが、先生や仲間たちに感謝申し上げます。ありがとうございました。

森川柚穂

本当に班のメンバーに恵まれたと思います。分析や報告書のまとめ方も何もかも初めてで、わからないことだらけでしたが、何度もメンバーと助け合いながら調査を行うことができました。何を明らかにしたいのか、どのような方法をとることが最善なのか、そういったことをよく考えることの重要性を学びました。これからの私の学生生活にとってもとても貴重な財産となりました。

山田旺子

調査実習を通して、社会調査において「なぜその事象を調査したいのか」という動機がとても重要であることを実感しました。自分たちでアンケート調査票を作成し集計した結果を用いて分析した経験は、今後の自分の学びにとって貴重な財産となりました。改めまして調査にご協力いただきました皆様、菊地先生、班員の方々に心から感謝申し上げます。

山田有輝

僕は班の中で一番仕事をしていない自信があります(自信を持つようなことではないが)。何度 zoom での話し合いに寝落ちし参加しなかったことか…本当にすみませんでした。班員の皆様に沢山助けられました。本当に本当にありがとうございました。

執筆者

石 田 楓 花  
猪 塚 雄 大  
江 口 和 輝  
後 藤 さなえ  
高 浪 将 吾  
福 井 敢 太  
前 田 雅  
村 山 マドカ  
森 川 柚 穂  
山 田 旺 子  
山 田 有 輝

指導教員

菊 地 夏 野

2021年度社会調査実習報告書  
第2分冊

2022年3月31日発行

発行所 名古屋市立大学人文社会学部  
現代社会学科

〒467-8501 名古屋市瑞穂区瑞穂町山の畑1

電 話 052-872-5184

F A X 052-872-1531